

# 北田遺跡

昭和61・62年度農村総合整備モデル事業・  
ほ場整備事業に先立つ緊急発掘調査報告書

1988年3月

長野県飯田市教育委員会



付図1 北田遺跡遺構全体図

# 北田遺跡

昭和61・62年度農村総合整備モデル事業・  
ほ場整備事業に先立つ緊急発掘調査報告書

1988年3月

長野県飯田市教育委員会

## 序

飯田市上久堅地区は、飯田市の中心街から天竜川をはさんで南西の方向約8kmの伊那山脈の山麓部に発達した旧上久堅村にあたる。

地区内には飯田市指定史跡の神之峯城跡が存在し、中世末から戦国時代においては、当地方一帯を治めた豪族知久氏の拠点となった地である。また、近世においては重要な民間信仰の一つであった秋葉山参詣の道であり、信州から遠州への主要な経済的交通路としての秋葉街道筋の地区として、特に街道筋の難所の1つであった小川路峠の麓に発達した宿場として繁栄をみた。

しかし、多様化する近年の社会情勢の変化する中で過疎化傾向の進む地として、地区及び行政的な対応により活性化の望まれる地区となっている。

また、地区内における主要産業は農業及び林業經營によるものであるが、そのうち農業については、山間地帯であるという地形的条件により狭小な単位による耕地が主体となっており、将来においてより有効な生産向上のため耕地の単位面積拡大等の改良事業の促進は緊急な課題となっていた。

それにより、今回原平、柏原地区における水田の構造改善事業が実施されることになり、たまたまその範囲内に埋蔵文化財包蔵地北田遺跡が所在しており、事前に記録保存のため発掘調査を飯田市教育委員会が実施した。

調査着手前の予想では、小規模な集落跡程度の遺跡と判断され、短期間の調査で終了の見込みであったが、調査進行とともに飯田市においても最大級の遺跡であり、発見された文化財の内容も極めて貴重なものが多く、今後の歴史研究に果す役割は多大であるといえます。

また調査実施中及び終了後において上久堅の人々による自分達の祖先の残した文化遺産を是非残したいという切望の念と実践による成果として、調査地に隣接して復元家屋2棟の建築と公園の整備がなされたことは、飯伊地区に例のない大古の人々の生活を体験する場所として、学校教育及び社会教育におけるかけがえのない郷土学習、歴史学習の施設として位置づけられるものであり、将来にわたって保存・活用されるに至ったことは望外の喜びです。

飯田市教育委員会

教育長 福島 稔

## 例　　言

1. 本書は、農村総合整備モデル事業・ほ場整備工事に関する飯田市上久堅北田地区の工事に先立ち実施した「北田遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、飯田市教育委員会が調査団を編成して実施した。
3. 本書の発掘調査に関し、調査着手前の諸手続上は「中宮原遺跡」として扱ったが、地字等の状況から「北田遺跡」として統一して掲載した。
4. 調査実施にあたり、50cm四方の大区画、2m四方の小区画に分割して作業を行なった。大区画は、南西端から西方へ向ってA・B : C～、北方へ向って1・2・3～とした。小区画は、大区画内の南西端を基点に北方へa・b・c～、西方へ1・2・3～とした。小区画の呼称はA<sub>1</sub> b<sub>15</sub> : C<sub>2</sub> e<sub>20</sub>などとなる。
4. 発掘調査は、昭和61年に実施し、整理作業は昭和62年度に実施した。
5. 本書に掲載した資料に関し、整理不十分な点が若干あり、遺物実測図については、別冊として刊行することとした。
6. 本書の執筆は、調査員が分担して行ない、文責は文末に記した。
7. 本書に関連した遺物及び図面類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館で保管している。

# 本文目次

## 序

## 例言

## 目次

I 経過	1		
1 調査に至るまで	1		
2 調査の経過	1		
3 調査組織	2		
II 立地と環境	4		
1 自然的環境	4		
2 上久堅の考古学的調査	6		
3 歴史的環境	7		
III 調査結果	11		
1 造構と遺物	11		
1) 住居址	11		
(1) 縄文時代早期	11		
① 30号住居址			
(2) 縄文時代中期	12		
① 8号住居址	② 19号住居址	③ 20号住居址	④ 21号住居址
⑤ 22号住居址	⑥ 23号住居址	⑦ 24号住居址	⑧ 25号住居址
⑨ 26号住居址	⑩ 27号住居址	⑪ 28号住居址	⑫ 29号住居址
⑬ 31号住居址	⑭ 32号住居址	⑮ 33号住居址	⑯ 34号住居址
⑰ 35号住居址	⑱ 36号住居址	⑲ 37号住居址	⑳ 38号住居址
㉑ 39号住居址	㉒ 40号住居址	㉓ 41号住居址	㉔ 42号住居址
㉕ 43号住居址	㉖ 44号住居址	㉗ 45号住居址	㉘ 46号住居址
㉙ 47号住居址	㉚ 48号住居址	㉛ 49号住居址	㉜ 50号住居址
㉞ 51号住居址	㉟ 52号住居址	㉞ 53号住居址	㉜ 54号住居址
㉞ 55号住居址	㉟ 56号住居址	㉞ 57号住居址	㉜ 58号住居址
㉞ 59号住居址	㉟ 60号住居址	㉞ 61号住居址	㉜ 62号住居址
㉞ 63号住居址	㉟ 64号住居址	㉞ 66号住居址	㉜ 67号住居址
㉞ 68号住居址	㉟ 69号住居址		

(3) 弥生時代後期	58
① 6号住居址 ② 9号住居址 ③ 14号住居址 ④ 18号住居址	
⑤ 65号住居址	
(4) 古墳時代後期	64
① 1号住居址 ② 2号住居址 ③ 3号住居址 ④ 4号住居址	
⑤ 5号住居址 ⑥ 7号住居址 ⑦ 10号住居址 ⑧ 11号住居址	
⑨ 12号住居址 ⑩ 13号住居址 ⑪ 15号住居址 ⑫ 16号住居址	
⑬ 17号住居址 ⑭ 70号住居址 ⑮ 71号住居址 ⑯ 72号住居址	
⑰ 73号住居址	
2) 堀立柱建物址	81
① 堀立柱建物址1 ② 堀立柱建物址2 ③ 堀立柱建物址3	
④ 堀立柱建物址4 ⑤ 堀立柱建物址5 ⑥ 堀立柱建物址6	
⑦ 堀立柱建物址7 ⑧ 堀立柱建物址8 ⑨ 堀立柱建物址9	
⑩ 堀立柱建物址10 ⑪ 堀立柱建物址11 ⑫ 堀立柱建物址12	
⑬ 堀立柱建物址13 ⑭ 堀立柱建物址14 ⑮ 堀立柱建物址15	
⑯ 堀立柱建物址16 ⑰ 堀立柱建物址17 ⑱ 堀立柱建物址18	
⑲ 堀立柱建物址19 ⑳ 堀立柱建物址20 ㉑ 堀立柱建物址21	
㉒ 堀立柱建物址22 ㉓ 堀立柱建物址23 ㉔ 堀立柱建物址24	
㉕ 堀立柱建物址25	
3) 小豎穴	106
① 小豎穴1 ② 小豎穴2	
4) 埋設土器	107
① 埋設土器1 ② 埋設土器2	
5) 方形柱列址	108
① 方形柱列址1 ② 方形柱列址2 ③ 方形柱列址3	
6) 土坑	112
① 土坑1 ② 土坑3 ③ 土坑4 ④ 土坑5	
⑤ 土坑6 ⑥ 土坑7 ⑦ 土坑8 ⑧ 土坑9	
⑨ 土坑10 ⑩ 土坑11 ⑪ 土坑12 ⑫ 土坑13	
⑬ 土坑14 ⑭ 土坑15 ⑮ 土坑16 ⑯ 土坑17	
⑰ 土坑18 ⑱ 土坑19 ⑲ 土坑20 ⑳ 土坑21	
㉑ 土坑22 ㉒ 土坑23 ㉓ 土坑24 ㉔ 土坑25	
㉕ 土坑26 ㉖ 土坑27 ㉗ 土坑29 ㉘ 土坑31	
㉙ 土坑32 ㉚ 土坑33 ㉛ 土坑34 ㉜ 土坑36	

㉙	土坑 37	㉚	土坑 38	㉛	土坑 39	㉜	土坑 40
㉚	土坑 41	㉛	土坑 44	㉝	土坑 45	㉞	土坑 46
㉛	土坑 47	㉝	土坑 48	㉞	土坑 49	㉟	土坑 50
㉝	土坑 51	㉞	土坑 52	㉟	土坑 53	㉟	土坑 54
㉞	土坑 55	㉟	土坑 56	㉟	土坑 57	㉟	土坑 64
㉟	土坑 65	㉟	土坑 66	㉟	土坑 67	㉟	土坑 68
㉟	土坑 71	㉟	土坑 72	㉟	土坑 73	㉟	土坑 74
㉟	土坑 75	㉟	土坑 76	㉟	土坑 77	㉟	土坑 78
㉟	土坑 79	㉟	土坑 80	㉟	土坑 84	㉟	土坑 85
㉟	土坑 86	㉟	土坑 87	㉟	土坑 88	㉟	土坑 89
㉟	土坑 90	㉟	土坑 91	㉟	土坑 92	㉟	土坑 99
㉟	土坑 100	㉟	土坑 101	㉟	土坑 102	㉟	土坑 103
㉟	土坑 104	㉟	土坑 105	㉟	土坑 106	㉟	土坑 107
㉟	土坑 108	㉟	土坑 109				

-まとめ-----	135
付 編-----	139

15号住居址出土スケールの金属学的分析調査結果

### 挿 図 目 次

挿図1 北田遺跡位置図	5
挿図2 北田遺跡位置図及び周辺遺跡図	8
挿図3 30号住居址、土坑11	11
挿図4 8号住居址	13
挿図5 19号・20号住居址	14
挿図6 21号住居址	15
挿図7 22号住居址	16
挿図8 23号住居址	18
挿図9 24号住居址	19
挿図10 25号住居址	20
挿図11 26号住居址	21
挿図12 27号・42号住居址	22
挿図13 28号住居址	23

挿図14	29号住居址	24
挿図15	31号住居址	25
挿図16	32号住居址	26
挿図17	33号住居址	27
挿図18	34号住居址	28
挿図19	35号住居址	29
挿図20	36号住居址、土坑25、周辺ピット	30
挿図21	37号住居址	31
挿図22	38号住居址	32
挿図23	39号住居址	33
挿図24	40号住居址	34
挿図25	41号住居址	36
挿図26	43号住居址	37
挿図27	44号住居址	38
挿図28	45号住居址	39
挿図29	46号住居址、土坑6・7・8・9・10	40
挿図30	47号住居址	41
挿図31	48号住居址	42
挿図32	49号住居址	43
挿図33	50号・57号住居址	44
挿図34	51号住居址、建物址25	45
挿図35	52号住居址	46
挿図36	53号住居址	47
挿図37	54号住居址	48
挿図38	55号住居址	49
挿図39	56号住居址	50
挿図40	58号住居址	51
挿図41	13号・59号住居址	52
挿図42	60号住居址	53
挿図43	61号住居址	54
挿図44	62号住居址、小堅穴2、土坑45・46・47・48・49・50・51 52・53・54・55・56・57	55
挿図45	64号住居址、土坑44	56
挿図46	66号住居址	57

挿図47	67号住居址	57
挿図48	6号住居址	59
挿図49	9号住居址	60
挿図50	14号住居址	61
挿図51	18号住居址	62
挿図52	65号住居址、土坑80・84	63
挿図53	1号住居址、溝址1	65
挿図54	2号住居址、溝址1	66
挿図55	3号住居址	67
挿図56	4号住居址	69
挿図57	5号住居址	70
挿図58	7号住居址	71
挿図59	10号住居址	72
挿図60	11号住居址	72
挿図61	12号住居址	73
挿図62	12号住居址 カマド	74
挿図63	15号住居址	75
挿図64	16号住居址	76
挿図65	70号住居址、土坑111	77
挿図66	71号・72号住居址、土坑91・92	78
挿図67	73号住居址	80
挿図68	建物址1	81
挿図69	建物址2	82
挿図70	建物址3・4	83
挿図71	建物址5	85
挿図72	建物址6	86
挿図73	建物址7	87
挿図74	建物址8	88
挿図75	建物址9	89
挿図76	建物址10	90
挿図77	建物址11	91
挿図78	建物址12	92
挿図79	建物址13	93
挿図80	建物址14	95

挿図81 建物址15・23	96
挿図82 建物址16	98
挿図83 建物址17	99
挿図84 建物址18	100
挿図85 建物址19	101
挿図86 建物址20	102
挿図87 建物址21	103
挿図88 建物址22	104
挿図89 建物址24	106
挿図90 埋設土器1・2	108
挿図91 方形柱列址1(土坑58・59・60・61・62・63)	109
挿図92 方形柱列址2(土坑65・66・67・68・69・70)	110
挿図93 方形柱列址3(土坑93・94・95・96・97・98)	111
挿図94 小窓穴1、土坑17・18・19・32・33・34・39・40・41・90	115
挿図95 17号住居址カマド、土坑12・14・15・23・24・26・29・31・37	118
挿図96 土坑1・3・4・5・13・20・21・36・86・87	121
挿図97 土坑71・72・73・74・75・76・77・78・79・88・89	126
挿図98 土坑11・16・22・27・38・42・43・44・64・85・110	129
挿図99 68号・69号住居址炉址、土坑99・100・101・102・103・104・105 106・107・108・109	132
挿図100 スケール蛍光X線分析結果	143
挿図101 スケールX線回析結果	144

## 表 目 次

第一表 飯田市上久堅地区遺跡一覧表	9
-------------------	---

## 付 編 写 真 図 版 目 次

図版1 写真1 試料磁着状況	140
図版2 写真3 スケール比較	141
図版3 写真5,6 スケール実態(双眼)顕微鏡(1)②	145
図版4 写真7,8 スケール反射顕微鏡写真	146
図版5 写真9,10 スケール反射顕微鏡写真	147

- 图版33 土坑14  
图版34 土坑15·16  
图版35 土坑17·18·23·24  
图版36 土坑25·26·30  
图版37 土坑31·34·36  
图版38 土坑37·38·39·41  
图版39 土坑42·44·46  
图版40 土坑52·53·54  
图版41 土坑55·56·64、小壁穴1  
图版42 方形柱列址1  
图版43 方形柱列址1  
图版44 方形柱列址2  
图版45 方形柱列址3  
图版46 6号住居址  
图版47 6·9号住居址  
图版48 18号住居址  
图版49 1·2号住居址  
图版50 3·4号住居址  
图版51 5·7·14号住居址  
图版52 12号住居址  
图版53 15·70号住居址  
图版54 71·72·73号住居址  
图版55 挖立柱建物址1·2  
图版56 挖立柱建物址3·4·5·6  
图版57 挖立柱建物址6·7·8  
图版58 挖立柱建物址9·10  
图版59 挖立柱建物址10·11·12  
图版60 挖立柱建物址13·14·15·16·23  
图版61 挖立柱建物址15  
图版62 挖立柱建物址9·18·19·20·22  
图版63 挖立柱建物址21·24  
图版64·65 調査風景  
图版66 見学会風景

## 写 真 図 版 目 次

- 図版1 北田遺跡遠景（神之峯城跡）、北田遺跡近景（西方から）
- 図版2 調査後の近景（西から）、調査地全景（西から）
- 図版3 30号住居址、8号住居址
- 図版4 8号住居址
- 図版5 19・20号住居址
- 図版6 21号住居址
- 図版7 21号住居址
- 図版8 22号住居址
- 図版9 23号住居址
- 図版10 24号住居址
- 図版11 24・25・26号住居址
- 図版12 28号住居址
- 図版13 29・31号住居址
- 図版14 32・33号住居址
- 図版15 34号住居址
- 図版16 35号住居址
- 図版17 38号住居址
- 図版18 39号住居址
- 図版19 39号住居址
- 図版20 39号住居址
- 図版21 40・41号住
- 図版22 43号住居址
- 図版23 44号住居址
- 図版24 45・47号住
- 図版25 47・48号住
- 図版26 49号住居址
- 図版27 50・57・51号住居址
- 図版28 52・53号住居址
- 図版29 54・55・56号住居址
- 図版30 58号住居址
- 図版31 59・60号住居址
- 図版32 61・63号住居址

# I 経 過

## 1. 調査に至るまで

現地は飯田市上久堅原平及び柏原に所在し、戦前から地元の人々の間では土器や石器の出る場所として知られていた所であり、昭和54年に農道拡幅工事を実施した際に縄文時代中期の土器が発見され遺跡として登録された。

その後、地元耕作者の要望を受け飯田市農政部局により、昭和61・62年度事業として農村総合整備事業として、水田の規模拡大を主とする構造改善事業の実施が計画・立案され、遺跡の破壊が懸念されるに至った。

その計画に基づき、昭和60年8月に飯田市農政部局と飯田市教育委員会との間で協議を行い、それにより、遺跡は山間部の尾根上に立地する小規模な縄文時代の集落遺跡と考えられ、調査後開発されることは、やむを得ないと判断の上、事前に発掘調査して記録保存することとなった。

発掘調査は、長野県教育委員会の指導の元で飯田市教育委員会が調査実施機関として、文化庁の補助金を受けて事業実施することとなった。

飯田市教育委員会では調査実施にあたって、日本考古学協会員で長姫高校教諭の岡田正彦先生を調査団長として調査団を編成し、昭和61年5月に調査を開始した。 (小林正春)

## 2. 調査の経過

事前の協議、調整を受け、昭和61年5月26日に資材を現地に運搬し、翌27日に天幕を設営し、引き続き試掘調査を開始した。

事業実施範囲は、全体で約46,000m<sup>2</sup>、遺跡の範囲と考えられる尾根上部分のみでも約11,000m<sup>2</sup>と広大であり、調査対象範囲全体を50m四方の大区画に分け、さらにその中を2m四方625区画に分割し、土地区画の状況により若干の差はあるが、ほぼ20m間隔で試掘調査し、遺構分布状況の把握に努めた。

試掘調査着手2日目の28日には早くも住居址の存在が確認され、出土遺物も多く当初予想をはるかに越える大遺跡であることが推測されるに至った。

相当数の住居址が分布することが判断されたのを受け、人力による試掘調査と併行して、重機によるトレンチ調査により、早期に全体にわたる遺構分布状況を把握することとし、5月30日にミニバックホーを導入しての調査となった。

人力及び重機による試掘調査の結果、調査対象としたほぼ全域に住居址等の遺構が分布することが確認され、それを受けて6月2日から重機による拡張作業を行ない、面的な調査を行なうこととした。

重機による表土剥ぎ作業を完了した箇所から順次遺構の検出作業を行ない、6月7日の段階で竪穴住居址は縄文時代早期から古墳時代後期にかけて35軒を数えるに至った。

6月11日には住居址等の遺構掘り上げ作業を開始し、その後、順次掘り上げ、写真撮影、図化作業等を実施し、8月25日現地での作業を一応終了した。

結局、調査範囲は約5,000坪にわたったが、その外側の調査未了部分においても遺構の存在する可能性が大であり、事業実施時において、削平工事のなされる範囲及び、道路敷部について9月24日から追加調査を行ない9月28日にすべての調査を完了した。

その間、9月1日は文化庁文化財保護部記念物課伊藤文化財調査官の来飯をあおぎ直接現地での御指導をいただき、県教育委員会文化課からも再三にわたり、直接、間接のご指導をいただいた。

また、調査期間中に上久堅小学校児童をはじめ多数の見学者が来訪し、8月14日には、現地での見学説明会を実施し700余名の見学者が訪づれ地域の人々の文化財に対する理解を深めるに大きな意味を持つものであった。

こうした地域の人々による文化財愛護の結果として、その後上久堅地区内から遺跡の一部でも良いからそのまま残して後世に伝えられないかという声が強くなり、種々の協議を経て、調査箇所に隣接する北側の本事業対象外である桑園を購入し、復元家屋を造り、公園化して後世に伝えることとなり昭和62年度上久堅地区全戸の協力により北田遺跡公園として整備され後世に伝えられることとなった。

その後、現地での作業結果をふまえ、61年の秋以降は現地作成図面の整理、遺物の水洗いなどの基礎的な作業を行なった。

昭和62年度には、部分的な現地調査及び前年度実施の基礎的な作業の後を受け、出土遺物の注記、復元作業、図面類の整理等報告書作成のための室内での作業を行なった。 (小林正春)

### 3. 調査組織

#### 調査団

調査団長 岡田 正彦 (飯田長姫高校教諭)

調査担当者 小林 正春 (飯田市教育委員会)

調査員 清水与智光 (飯田市上久堅村誌編纂委員)

佐々木嘉和 (飯田市座光寺)

佐合 英治 ( " 毛賀)

桜井 弘人 (飯田市丸山町昭和61年度)

山下 誠一 ( " 下久堅 " )

吉川 豊 (飯田市教育委員会)

馬場 保之 (飯田市教育委員会)

作業員 内山かよ 内山博人 大島利男 畠島定治 小笠原亀人 木下傳 桐生久子  
後藤久子 田中静子 田中久子 橋爪亀次 多田井初美 筒井功 原小夜子  
深尾由香 山口明子 吉川千恵 若林太吉 長谷部手折 大日方富士子  
池田幸子 木下玲子 櫛原勝子 武田恵美 唐沢古千代 丹羽由美 牧内八代  
小平不二子 川上みはる 宮内真理子 吉川紀美子 吉沢佐紀子 松本恭子  
吉川悦子

事務局

事務局長 塩沢 正司 (飯田市教育委員会社会教育課長)

事務局員 池田 明人 ( " 社会教育課文化係長 )

小林 正春 ( " 社会教育課文化係 )

吉川 豊 ( " " )

馬場 保之 ( " " 62年度)

土屋 敏美 ( " 庶務課 )

協力者 上久堅自治協議会

上久堅村誌編纂委員会

上久堅公民館

(小林正春)

## II 立地と環境

### 1. 自然的環境

飯田市上久堅は天竜川の東、伊那山脈の西麓に位置し、天竜川の形成した上位段丘面で準平原地形の丘陵（標高650～900m）をつくり、その上に「伊那層」をのせている。その丘陵面を玉川・經田川・卯月川等の小河川が浸食して、竜東山地の独特な地形をつくっている。

北田遺跡は、地区内の柏原・中宮原の2地区にまたがった位置にあり、県道手塚原一米川飯田線の西方にあたる。

伊那山脈から西方に伸びた稜線の一つが堀切川に面して緩傾斜面を成して終息する地が北田遺跡である。遺跡の北側はその堀切川に面して10数mの急崖となって区切られ、西方は旧河道もしくは断層活動による凹地となり比高差10m程を測る。また南側は、西方の凹地に向って観音丘陵との間に浅い浸食谷となり凹地が形成される。結局、北田遺跡は伊那山脈の山裾が巾約100mの舌状台地となって終息し、東を除く三方からは独立丘的な高まりを持つ位置といえる。

現在の北田遺跡の土地利用状況は、北端の一部に桑園他の畠地があるが大半は水田となっている。しかし、今の土地利用の姿が形成されたのは中世以降の用水路整備後のことと考えられ、本来は自然の水害等を受けにくい地形であったといえる。

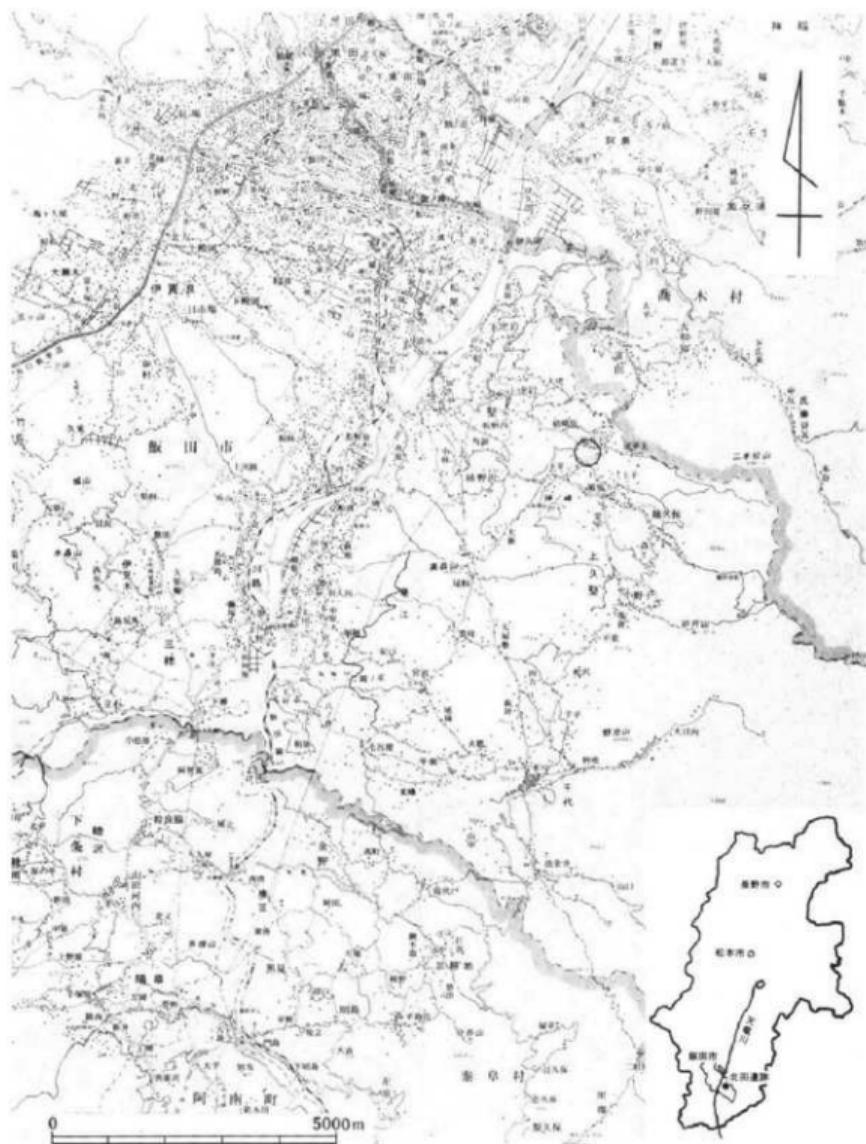
西方にある凹地は、自然湧水により全体が湿地となり、水田として利用されているが、ここでの水田化の時期はかなり古いことが推測され、少なくとも北田遺跡に住居址等のみられる弥生時代後期には水田としての活用がなされていたと考えられる。

次に当地の気象状況について「下伊那誌気象編」でみると、昭和28～40年の平均気温が0.7℃、最暖月の8月の平均気温は24.0℃となっており、飯田と比べて平均気温で0.7℃と低く、標高差によるものと思われる。また、上久堅中学校の資料によると、年降水量は1666mmとなっており、最高月は6月の280mm、最低月は12月で56mmである。これをみると郡全体の中では、降水量は少なく、乾燥地域に属している。風向は季節や微地形により異なるも、四季を通じて西寄りの風が強く、また日照時間もいろいろの条件により地域差はあるが比較的長い地域である。

北田遺跡の所在する位置が具体的にどのような気象条件下にあったかは不明であるが、四面に高所のある盆地状の中に西面する独立丘的な地形は、日照時間も長く、風当りもさほどではないといえる。

以上のように自然環境上からみて、北田遺跡は人類の居住に適した場所であったといえよう。

(清水与智光・小林正春)



挿図1 北田遺跡位置図

## 2. 上久堅の考古学的調査

飯田市上久堅の考古学的調査の黎明は、大正時代末年である。大正10~11年にかけて、下伊那教育会は郡下の考古学的調査を実施するに当たり、市村成人氏を事実上の責任者とし、上久堅地区には小学校教諭の折山守国氏を調査委員とした。その成果は、大正13年刊行の鳥居龍藏著「下伊那の先史及原始時代図版」に詳しい。それには上久堅の遺跡及び古墳として12箇所が記載されたほか、中宮遺跡（現在の上平遺跡）の遠景写真と北ノ入遺跡及び鬼釜古墳出土の遺物写真と実測図が掲載されている。ちなみに遺跡名称を列挙すると、下平・神之峯・中宮・上平・堂平・北ノ入・綿三坂・小野子・落倉遺跡と塚穴・鬼釜・奥津古墳である。

戦後になると、昭和27年、市村成人・大沢和夫両氏を中心に、「下伊那史第二・三巻」の資料収集のため編纂委員が郡下の古墳を歩き、当地区にも来訪して3基の古墳を確認した。それは昭和30年刊行の市村成人編「下伊那史第三巻歴史時代下」に掲載されている。翌年、「信濃史料第一巻上・下」が刊行され、新たに卯月山・蛇沢遺跡が加わり11遺跡3古墳の名称が記載された。昭和35年頃から中宮の田中英伍氏は自宅周辺の下平遺跡の北端にあたる畑から、縄文時代中期に想定される石鏸12点を表採所蔵していたが、これを岡田が昭和39年「伊那」10月号の「談話室」欄で紹介している。また昭和42年刊行の「全国遺跡地図長野県版」にも11遺跡3古墳はそのまま掲載されている。

昭和54年になると、「長野県史考古編」、「下伊那史第一巻」編纂のため分布調査が岡田によってされ、北田・原平・明賀塚・奥津寺・桐山・十二間遺跡と城山古墳が新たに発見された。この成果は昭和56年刊行の「長野県史考古資料編全一巻（一）遺跡地名表」に、17遺跡4古墳として登録されている。但し、城山古墳はその後土砂の崩壊により遺構の構築状況が判明し、江戸時代の石室であることが明確になったため、昭和59年、岡田は「伊那」7月号に「飯田市上久堅小野子の役行者石像小考——城山古墳存在否定に関連して——」のレポートを発表し、県史所載の城山古墳の存在を否定したのである。さらに昭和57年には長野県教育委員会の要請により「長野県の城館跡」編纂のための分布調査を岡田が行ない、神之峯城跡以外に小野郷城跡及び茶臼山城跡を報告した。これは昭和58年刊行の「長野県の中世城館跡分布調査報告書」に詳しい。但し、茶臼山城は小規模のため掲載されていない。またこの年、「全国遺跡地図長野県版改訂版」が刊行されたが、最近の調査成果を盛り込んでいないため、14遺跡3古墳しか記載されず、しかも大字名や名称の間違いが多く問題を残した。昭和58年版に追加された3遺跡は、原平・越久保遺跡と神之峯城跡である。

昭和61年になると、本書に関する柏原の北田遺跡一帯の農業構造改善事業が行なわれることになり、事前の記録保存のための発掘調査が、5月から9月にかけて実施され多大の成果をみるに至った。調査の結果、縄文時代早期深鉢形土器・土師器・須恵器・石製劔鍤車・鉄製鋤先・刀子

等が発見されている。この北田遺跡の発掘調査が、上久堅地区における本格的なしかも最初の学術調査であったことは特記すべきである。その後、同年10月、北田遺跡に隣接する塚穴第1号・2号古墳の発掘調査が行なわれた。

(岡田正彦)

### 3. 歴史的環境

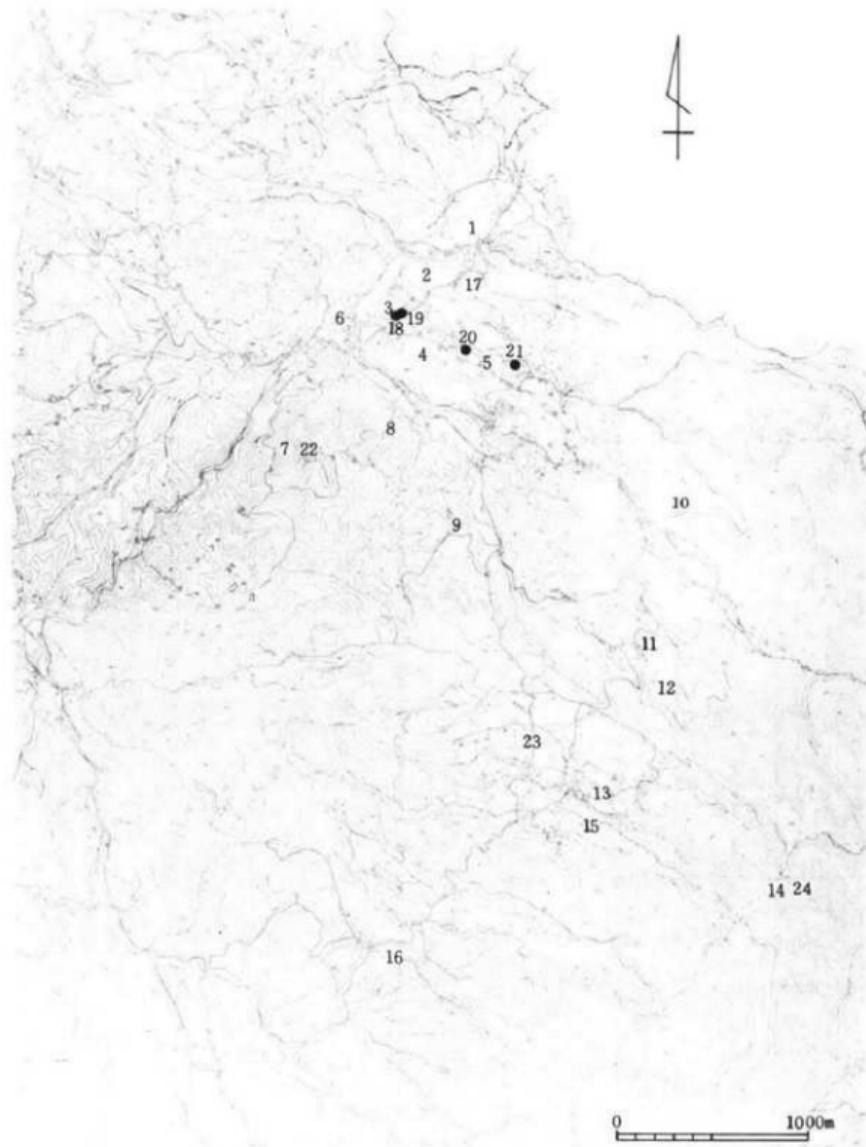
飯田市上久堅所在の遺跡は、一般遺跡17箇所、古墳4基、中世の城跡3箇所の合計24遺跡である。一般遺跡を時代別にみると縄文時代14、弥生時代1、古墳時代1、奈良・平安時代1、中世2、近世2を数えるが単純遺跡が多く、複合遺跡は少ない。特に正式な学術調査がなされなかつたため、表採遺物1点の発見で遺跡としておさえられたものもあり、17箇所の一般遺跡中12箇所は縄文時代、他の2箇所は中世・近世の単純遺跡である。複合遺跡は中・近世の陶器を出土する原平遺跡、縄文時代中期土器片及び打石斧と平安時代の土師器片が発見された空前地籍を中心とする上平遺跡があり、本書に掲載した北田遺跡からは縄文・弥生・古墳時代の遺構・遺物が発見されている。

上久堅の歴史的変遷を概観してみると、現在のところ1万年以前の旧石器時代の遺跡・遺物はない。上久堅の最古の文化は、約8000年前の縄文時代早期に比定される。それは北田遺跡の発掘調査により判明したものである。次の縄文時代前期の確実なる遺跡はないが、北田遺跡から中期初頭の土坑及び遺物が出土している。

約4500年前の縄文時代中期後半の大集落として本遺跡及び興禪寺遺跡があり、この外中宮の中宮原・森の北ノ入・惣三坂遺跡も注目しておきたい。この後に続く3000~4000年前の縄文時代後期の遺物は小野子遺跡から出土した若干の土器片のみである。また縄文時代最終末の晚期遺跡は森の北ノ入遺跡があり、若干の遺物が表採されている。このようにみると、縄文時代早期に柏原地籍に定着した文化は、中期以降、上久堅の全地域に拡散し、後期・晚期で衰退したことになる。

次の弥生時代の文化が下伊那地方に波及したのは、弥生時代前期のことであり、水稻耕作の開始に伴ないその遺跡立地に変化がみられる。弥生時代600年間は前期・中期・後期と三区分され、上久堅において発見された遺構・遺物は、今から約1700年前の弥生時代後期後半のものである。それは遺跡検出の5軒の竪穴住居址とその出土遺物で、土器は中島式土器が主体を占めている。北田遺跡の西方は、約10mの比高差をもつ凹地で旧河道の湿地帯（現在水田）になっており陸耕と共に水稻耕作に立脚した集落と推定される。

上久堅の古墳時代は上平・中宮及び柏原地区においてのみその遺構がみられる。当時期を象徴する古墳は埋藏古墳を含めて4基あり、未確認ながら地名から類推される1基を加えると5基となる。上平地区には上宮原古墳（別称佐前古墳）があり、今は破壊され、高さ1mの小封土上に



挿図2 北田遺跡位置図及び周辺遺跡図(数字は遺跡一覧表と一致する)

第1表 飯田市上久堅地区遺跡一覧

(昭和62年8月 関田誠)

分類番号	遺跡名所	在地	立地	種別	時代	遺構・遺物	備考
1 509	原平遺跡	原平下	平地	包廻地	中世	中・近世陶器(天目etc.)	
2 524	北田	"	原平・北田	台地	"	绳文・古墳文單中・弥生後・古墳後期住居跡・土坑遺物多	昭和61年発掘調査
3 510	中高原	"	中高原	台地	"	绳文	
4 511	興徳寺	"	中宮	平地	"	绳文中期土器片・石器	
5 513	上平	"	上平	平地	"	绳文(加曾利E式)・打石斧・鐵刃整石器	川井宗孝氏藏
6 512	下平	"	下平	山腹	"	磨石斧、平安朝土器片	故田中英伍氏藏
7 514	神之峰	"	下平・神之峰	山頂	"	绳文	
8 525	十二間	"	下平・水元	山腹	"	近世	古錢(980余枚)(唐・宋钱)、夏永通(2856枚)
9 515	堂平	"	堂平	台地	"	绳文	
10 518	側山	"	越久保	山腹	"	打石斧	
11 516	北八入	"	森・北八入	山腹	"	绳文中期土器片・铁劍・打石斧	故木下久米市氏藏
12 517	惣三坂	"	森・惣三坂	山腹	"	绳文	
13 519	小野子	"	小野子上	台地	"	绳文後土器片・打石斧	
14 520	卯月山	"	小野子・卯月山	山頂	"	石器	
15 521	落倉	"	落倉	山腹	"	打石斧、磨石斧	
16 522	蛇沢	"	蛇沢・蛇沢	台地	"	打石斧	
17 523	明質塚	"	原平・明質塚	山丘	古墳?	古墳?	(中世の十三塚?)
18 977	螺穴第一号古墳	中宮・螺穴	台地	古墳	古墳	円墳・横穴・須恵器・中世内耳土器・金環	昭和61年発掘調査
19	螺穴第二号古墳	中宮・螺穴	台地	"	"	円墳・横穴・土師器	昭和61年発掘調査
20 978	宮ノ原古墳	中宮・宮ノ原	平地	"	"	円墳・横穴・直刀・刀子・管玉・金環・碧、須恵器	別称蓬古墳
21 980	上宮原古墳	上平・上宮原	平地	"	"	円墳・横穴・須恵器	別称玉前古墳
22 514	神之峰城跡	下平・神之峰	山地	城跡	中世	主郭二~五重・段郭・出郭・空堀・焼米	別称東山城
23	小野郎城跡	小野子・城山	丘陵	"	"	郭・空堀	
24	茶臼山城跡	小野子・卯月山	山頂	"	"	郭	

飯田市上久堅地区遺跡一覧

天井石・側壁石が散在する。須恵器片や構築石材からみて、横穴式石室を有する円墳で、その築造時期は6世紀後半から7世紀前半に比定される。中宮地区には2箇所に古墳があり、1基は川の西南、久堅神社境内中にある宮ノ原古墳（別称鬼釜古墳）、もう1基は玉川の北、観音丘陵直下の塚穴古墳である。前者は明治25年頃に発掘調査され天井石が残存するが、それからみて横穴式石室をもつ円墳と考えられる。出土遺物は豊富で上久堅小学校に保管されているが、須恵器や轡等からその築造時期は6世紀末に比定される。61年に発掘調査した塚穴第1号・2号古墳は7世紀前半に位置づけられる古墳である。また、柏原の北田遺跡南東県道上段の丘陵上に立地する明賀塚は、円墳ながらに盛土の封土もみられ、地元伝承では塚から土器が出土したとも言われ、古墳としての可能性が強い。いずれにしろ以上5基の古墳に埋葬された人達の居住地、すなわち集落址は一体どこであろうか。全國的な類例からみれば、上宮原古墳・宮ノ原古墳及び塚穴古墳の被葬所の居住地は、玉川の西南一帯の平坦地、換言すれば玉川と馬場台地に挟まれた空前から久堅神社や興禅寺一帯の水田を中心とする地域と考定したい。また、明賀塚の前面に展開する北田遺跡から、古墳時代後期の竪穴住居址17軒、建物址24棟が検出されたことは注目したい。塚穴古墳の後背地にあたり、直接の関係は不明であるがこの集落の存在は当該地区において重要な意味をもつ。同一集落内における時間的差異は認められるものの、一体、この起伏の激しい地域での生産基盤は何であったのか。東日本でも珍しい古墳時代の建物址の存在は何を意味するのか。竜東地区で最高地に立地する古墳の被葬者（豪族）の存在は何を示唆しているのか。上久堅の古墳時代の疑問は尽きない。

次の奈良時代の資料は現在発見されていない。しかし1000年前の平安時代の土師器片は上平遺跡において出土しており、この時代に居住者がいたことを裏付けている。

中世に入ると当方は伴野庄の一部であり、神氏系の豪族知久氏が下久堅知久平に居を構えて一帯を統治している。室町時代の文亀年間（1501～1504年）、知久氏は戦国時代の世相を考慮して、その根拠地を上久堅の神之峯城（床山城）に移し、竜東一帯を支配していたことが、当時の文献により理解される。その時代を語る遺物は原平遺跡に多く散布し、また中世城館跡を示唆する地名や遺構も小野郷城跡や卯月山の一角にある茶臼山城跡等により判明している。さらに知久氏の建立した寺院、俗に知久18箇寺中現存するものは、中宮の興禅寺と上平の玉川寺があり、いずれも古墳時代の集落址を想定した場所に建立されている。神之峯城が落城するのは天文23（1554）年、武田信玄による攻撃のためであるが、その後知久氏は再興し、幾星霜を経て江戸時代になると喬木村阿島に3000石の旗本として幕末まで隆盛を極めている。

以上みてきたような自然的・歴史的環境の中に北田遺跡は立地しているのである。

（岡田正彦）

## Ⅲ 調査結果

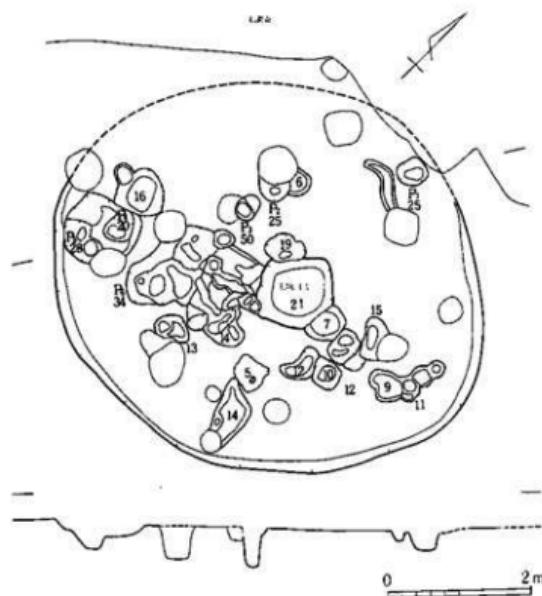
### 1. 遺構と遺物

#### 1) 住居址

##### (1) 縄文時代早期

###### ① 30号住居址(挿図3)

舌状台地の西端部、調査範囲内としても西端部にあたるD2k5周辺に検出された。西側壁が傾斜のため確認できず、確実な全体形とはいえないが $4.6 \times 4.0$ mを測る橢円形の竪穴住居址である。東側壁の確認した最深部は15cm程で、壁は緩傾斜である。床面は全体に中央部に向って緩く傾斜するがほぼ水平といえ、北半部が比較的良好であり、全体に性格等不明の小穴が多数認められた。それらの小穴が具体的にどのような性格を有するか不明といわざるを得ないが、このうちいくつかは上屋を支える柱穴であった可能性はあるが後時代にみられる柱穴とは若干異なり不規則であり、定形化しない家の姿が推測される。また、それらの小穴とは別に竪穴のほぼ中央部に土坑11とした径50cm程の穴があり内部からは焼けた石や炭が出土し、内部の土は漆黒色を呈し、住居址覆土



挿図3 KID 30号住居址、土坑11

と共にするもので、本住居址と直接関連する施設と考えられる。具体的な性格の特定は困難であるが、焼けた礫・炭の出土などから屋内炉の初原的な方を示すものかもしれない。

遺物は、土坑IIとした穴の周囲に集中して同一個体の土器が床面に密着して出土したほかは、竪穴全体に散在するという状態であった。なお、遺物の大半は竪穴内部からの出土であるが、隣接する小竪穴Iと本住居址の周囲2~3mの遺構外にも若干の遺物が散在して認められ、遺跡全体の中で本址を中心とする限られた範囲のみに該期の人々の主たる生活の場があったといえる。

出土遺物には、押型文土器・横刃型石器・石鎌・特殊磨石・黒曜石やチャートの剥片石器などがある。押型文土器はいわゆる大川式に属する凹状の横円文を施す土器が主体を占め、約50個体残存し復元できたものもある。それ以外の土器はいずれも少量で、格子目文・山形文・横円文・撚糸文などの小破片があるのみである。これらの出土土器の様相からみて、縄文時代早期の県内の特徴的な土器型式の1つである立野式の段階の住居址として位置づけられる。（小林 正春）

## (2) 縄文時代中期

### ① 8号住居址（挿図4）

調査区北西端中央のD2b10を中心検出し、7・14号住居址に切られる。(5)×(5)mの隅丸方形竪穴住居址と推測され主軸はN 43°Eを測る。壁高は残存部で20~30cmあり、床面は比較的良好で埋甕蓋石から炉址に向って平坦面を上にして花崗岩の割石を幅80cmの列状に敷いており、敷石住居の一例と考えられる。主柱穴は3本確認したが、残る1本は調査土盛の下になってしまった。炉址は中央からやや奥壁寄りに位置する。石を抜いた痕跡を検出し石組炉と推測される。炉址の底部と思われる範囲に土器が重なって入っており敷いたものであろう。南西側壁下中央に蓋石を持つ埋甕があり、逆位で埋められていた。

遺物は炉址内のものと、埋甕が主体で他の場所からの出土はわずかであった。

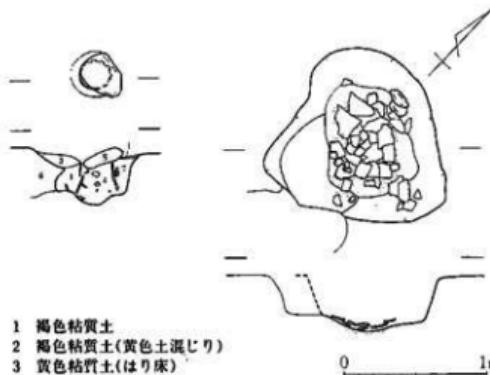
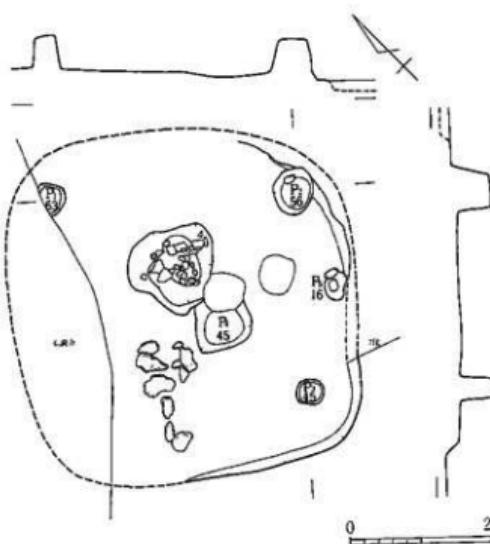
土器は器形の知れるものとして、深鉢4点がありその施文は沈線文と縄文の組合せによるものがほとんどである。石器は横刃型石器・敲打器・台石・剥片石器などがあり出土量は少ない。

時期は中期後半終末である。

（佐々木嘉和）

② 19号住居址

(挿図5)



- 1 黄褐色粘質土
- 2 黄褐色粘質土(黄色土混じり)
- 3 黄色粘質土(はり床)
- 4 黄褐色土(軟らかく炭小片混じる)
- 5 黄色土(ブロック状に入る)
- 6 黄褐色土(掘り方を切る穴の留土)

B 1 m 15を試掘中に、炉址を検出し周辺を  $5.5 \times 5.7$  m 広げて調査した。南西側は旧水田の境に当り、大きく削り取られている。上部も地山面まで耕作や造成により削平されている。全体の  $\frac{1}{4}$  程調査できたものと考えられる。主軸方向は炉址と主柱穴の関係から N  $85^{\circ} W$  を示すと考えられるが、全体の平面形が不明のため明確でない。壁は南東側で 6 cm 確認した。床面は比較的堅いものであるが炉址周辺と南東側を把握したのみである。

周溝は確認できなかった。4本主柱穴で、建て替えが行なわれていると考えられるが南西の主柱穴は確認できなかった。炉址は石組み炉であったと考えられる。炉址平面形は歪み、石が転落しており大きな石は抜き取られている。炉址底面は堅くよく焼けている。

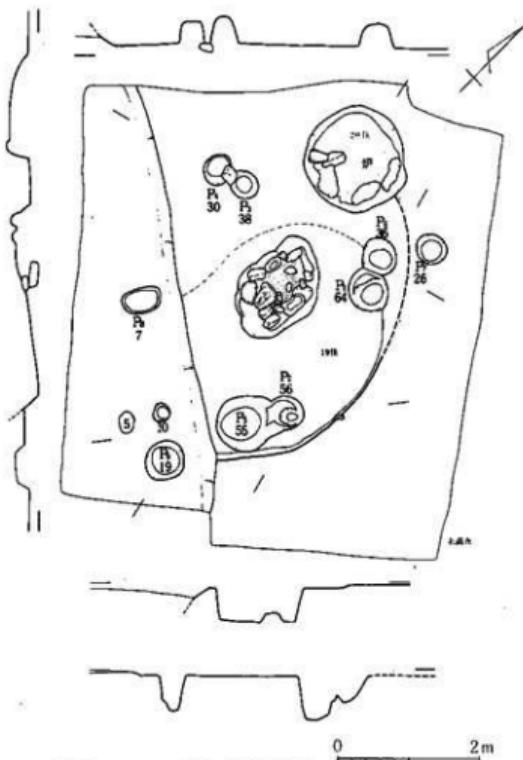
遺物はきわめて少ない。形態不明の土器片と炉址中より出土した石皿のはか黒曜石の石鐵、打製石斧、横刃型石器などである。

時期は、中期後半であるが詳細な時期は不明である。

挿図4 KID 8号住居址

③ 20号住居址

(挿図5)



挿図5 KID 19号・20号住居址

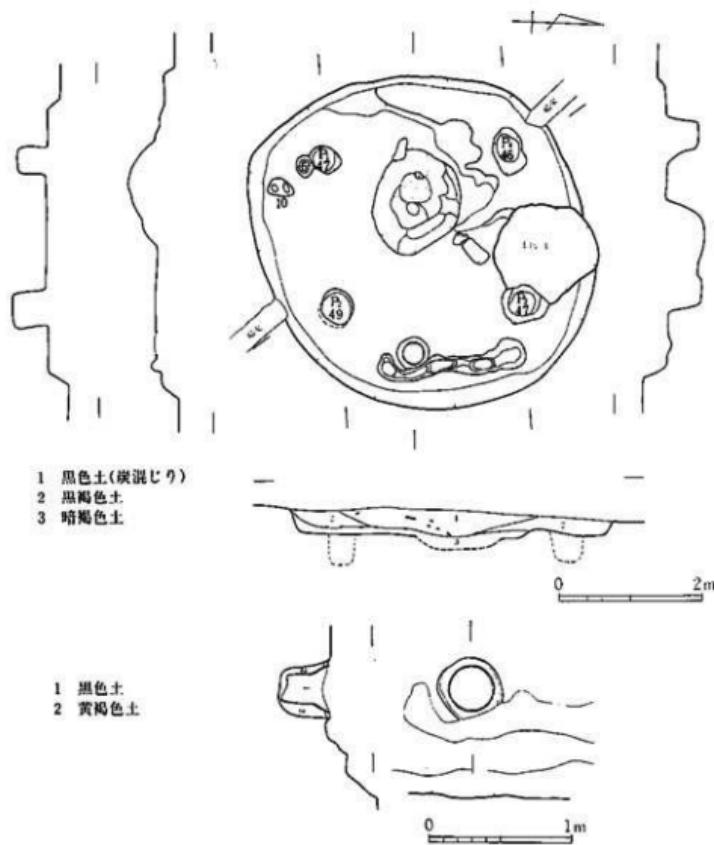
19号住居址調査中に確認した。19号住居址の北側1.5m程の所に、焼土を多量に含む円形のプランが検出され20号住居址とした。平面形、規模、主軸、主柱穴、周溝等の施設はすべて不明である。炉址と判断した掘込みも石を抜いたらしい痕跡を南東側に認めるものの、いわゆる炉址底部に見られる焼土の状態と異なる。また覆土中の焼土の方が多く、層状に認められた部分もあり土坑であった可能性がある。

遺物は石器のみで、小形の打製石斧・横刃型石器・敲打器などがある。

時期は中期後半と思われるが詳細な時期は不明である。

④ 21号住居址 (挿図6)

調査した範囲のほぼ中央C 2c23を中心検出された。土坑1と切り合うが壁のプランと重複していたため新旧関係は不明である。全体が調査できた。平面形は円形に近い隅丸方形の竪穴住居址である。規模は4.6×4.6mを測り、主軸方向はN 48°Eを示す。覆土は炭を含む黒色土である。住居址中央部に厚いレンズ状の堆積を成し、この層から遺物の出土も多い。壁は北西隅で9cm、北東隅で33cmを測り、比較的ゆるやかな壁面を成す。周溝は東壁下の入口部のみに確認された。深さ8~24cmを測り、壁より15cm内側に検出された。床面は比較的堅く良好である。北西壁側は炉址際から高まりを持つ。高さ4~7cmを測る。全体として凹凸はあるものの壁際から炉址に向



挿図6 KID 21号住居址

かってゆるやかに傾斜する。主柱穴は4本で深さ46~49cmを測り、直径45~65cmである。埋甕は西壁下に確認された。深鉢が正位に埋められており蓋石は取り除かれていた。炉址は住居址中央から西寄りにある。石を抜いた痕跡が認められ、石組炉であったと判断される。深さ38cmを測り比較的ゆるやかに掘り凹められている。焼土は底部のみに認められた。

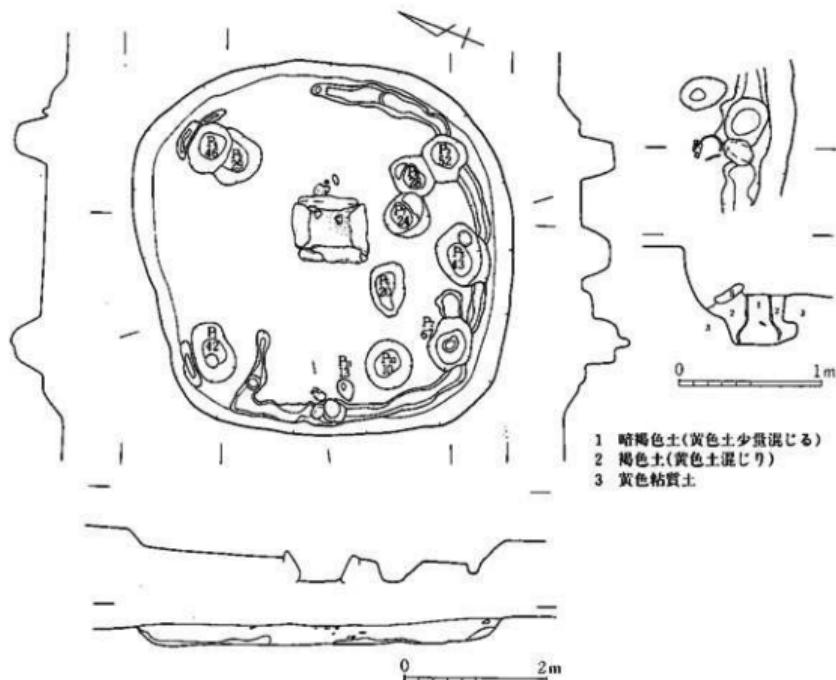
遺物は炉址周辺に多い。覆土上層から床面密着のものまであり、炉址覆土中からは土偶の頭部が出土した。遺物の出土量は多い。土偶の頭部のほか、器形の知れる深鉢16点があり、その施文のはほとんどは沈線文と縦文の組合せによるものである。埋甕に使われていた深鉢と小形の鉢の

数個体は櫛状工具による浅い沈線との組合せのものも見られ、小形の鉢の1つは口縁部下に把手状の装飾が付されている。炉址より出土した土器は頸部を連續刺突した隆帯で区画し、口縁部が無文、胴部が隆帯と繩文の組合せがなされる大形の深鉢である。どの土器も胎土中に多量の小石粒が混入している。石器の出土量もきわめて多く、砥石、乳棒状石斧未製品、小形の打製石斧、横刃型石器、凹石、敲打器、黒曜石剥片などがある。

時期は出土遺物から中期後半中頃である。

⑤ 22号住居址 (挿図7)

C 2c 25 を中心に検出した。北側に23号住居址が隣接する。全体が調査できた隅丸方形の堅穴住居址である。規模は  $5.15 \times 5.3$  m を測る。主軸方向は N  $67^{\circ}$  E を示す。覆土は黑色土のはば一



挿図7 KID 22号住居址

層である。壁はゆるやかな立ち上りを成し、南壁側で34cm、北壁側が25cmを測る。周溝は住居址の南側約半分に検出され深さ3~15cmを測る。西壁直下を除き壁下から少し内側に確認され、西壁下の端の部分は住居址中央部に向かって直角に1.2m程掘られている。床面は全体に凹凸が激しいが入口部と考えられる西壁下は、きわめて堅く良好である。北側の周溝が確認できなかった部分は炉址際まで貼床され軟弱である。柱穴は4本主柱穴である。南側の2本は北側の2本に比べやや間隔が狭く、中間に本住居址に伴うと考えられる穴が検出された。埋甕は西壁下のはば中央に確認した。入口施設の一部と考えられる深さ40cmの穴に隣接して深鉢が逆位に埋められていた。炉址は住居址中央よりやや東に寄った位置にあり、整った石組炉である。底部まで30cmを測り焼土は南東隅部に多量に認められた。炉址と周辺に床面密着遺物が多く、覆土中の遺物も住居址中央部からほとんどの土器が出土した。

遺物は埋甕に使われていた深鉢以外に完形品は無い。頸部から上部に隆帯と縄文による施文、胴部が沈線文と縄文の組合せによる施文がなされるものが埋甕も含め4点、胴部に刺突文が加わるもの1点、無文の底部2点などである。石器には乳棒状石斧破損品、小形の磨製石斧、打製石斧、横刃型石器、凹石、砥石、黒曜石製石鎌、剥片などがあり出土量は多い。

時期は中期後半中頃に位置付けられる。

(佐合 英治)

#### ⑥ 23号住居址 (挿図8)

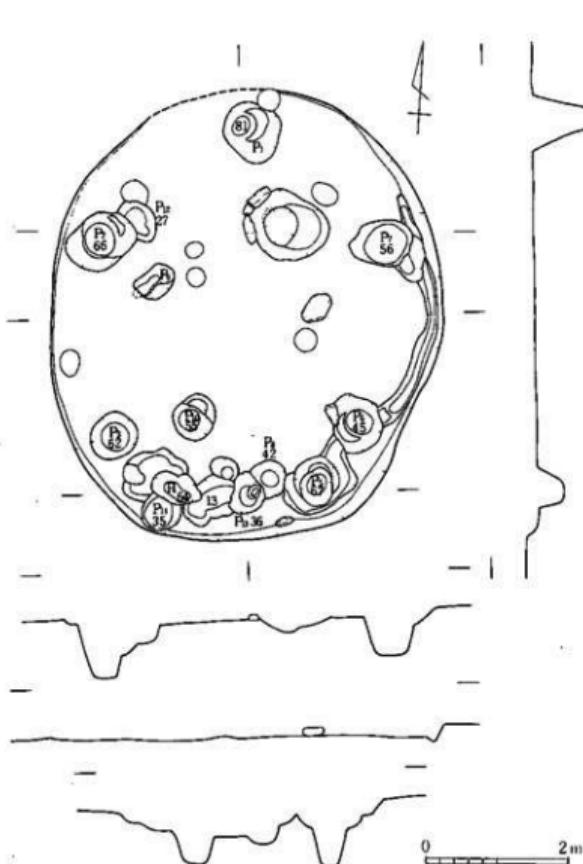
22・30号住居址の間に、掘立柱建物址5に切られて確認された。6.2×5.5mの不整橿円形を呈する竪穴住居址で、主軸方向N5.5°Wを示す。床面は凹凸が激しく、タタキ状をなしており堅い。壁高は3~26cmを測るが、壁と床との境は不明瞭で緩やかな立ち上がりも不明瞭である。周溝は東壁下で一部検出したいたどまる。柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>で、このうちP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>は入口部に關係した施設と思われる。P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>は上面に貼床があり、本住居址より古い穴であろう。P<sub>13</sub>上部から釣手土器、P<sub>3</sub>から深鉢1個体が出土し、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>からは硬砂岩製フレイクが多数出土した。また石皿が炉址脇の床面上に伏せられた状態で出土した。炉址は一側縁のみ炉石が残り、なだらかに凹む掘り方はその脇で最深を測る。炉底にわずかに焼土が認められた。

遺物の出土量は多い。器形の知れるものとして穴から出土した深鉢と釣手土器がある。釣手土器は釣手部分に刻みを施した隆帯により渦巻文、区画文が施文されたもので、深鉢は波状沈線文を施文した土器である。ほかに施文のわかるもの6点がある。口縁部に櫛形文、渦巻文が展開し、以下蛇行沈線文や平行沈線文の展開するもの、縄文地文の土器などである。また前期および中期中葉末の土器片がP<sub>10</sub>から出土している。石器は他の住居址と比較して多様で、打製石斧、磨製石斧、石鎌、敲石、縱形石匙、横刃型石器などのほか石皿がある。

時期は出土遺物等から中期後半前段階の住居址である。

⑦ 24号住居址（挿図9）

D1w25を中心とし、9・26号住居址に接し、掘立柱建物址2に切られて検出された。4.9×4.4mの規模をもつ不整規円形の竪穴住居址で、主軸方向はN26°Wを示す。床面は堅く締っており壁はやや緩やかに立ち上がる。壁下に幅広く掘られた周溝は、最終段階では壁下に巡らされたがその東および南壁下では細くやや深めとなる。柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>～P<sub>5</sub>とP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>6</sub>～P<sub>8</sub>の二組の組合せがあり、P<sub>5</sub>の上面が貼床状であったことから4本柱から5本柱に建て替えられたと考えられる。なお、穴の覆土は全体に堅い。炉底には土器が大部分内側を上にして敷きつめられている。



挿図8 KID 23号住居址

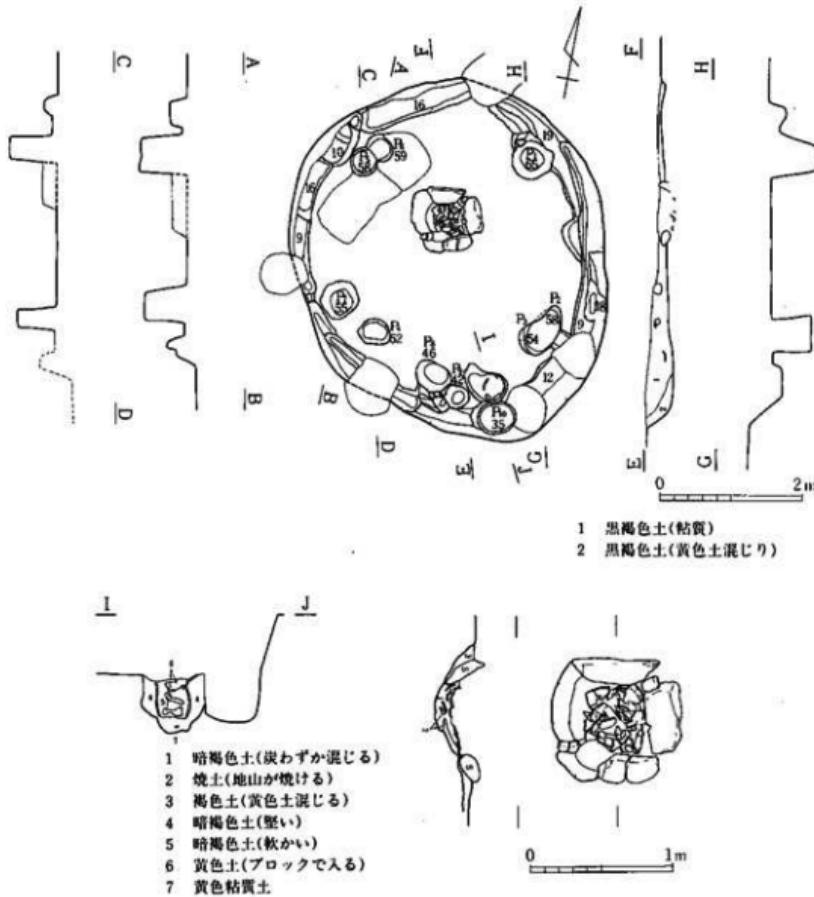
土器の下では地山  
が厚く焼土化して  
いる一方土器の隙  
間には焼土がない  
ことから、ある程  
度の期間が経過し  
た後土器を敷いた  
ものと思われる。  
また埋甕は南壁下  
に有り、上面には  
貼床が施されてい  
る。以上のことか  
ら、本住居址は長  
期間の営住にひき  
続いて、4本柱建  
物から5本柱建物  
への建て替えと付  
属施設の改変が行  
なわれ、さらに存  
続したものと考え  
られる。

遺物の出土量は  
多く、特に埋甕上  
に集中してみられ  
た。口縁部に沈線  
による重弧文の展  
開するもの、橋状

把手から腕骨文が垂下する条線文施文のもの、胴部上半に6単位の渦巻文が施文されるもの、波状沈線文施文など12個体の深鉢が出土した。石器は打製石斧・凹石・敲打器・多数の硬砂岩製フレイクがある。

時期は出土遺物等から中期後半中頃に比定される。

(桜井弘人・馬場保之)



摺図9 KID 24号住居址

⑧ 25号住居址 (挿図10)

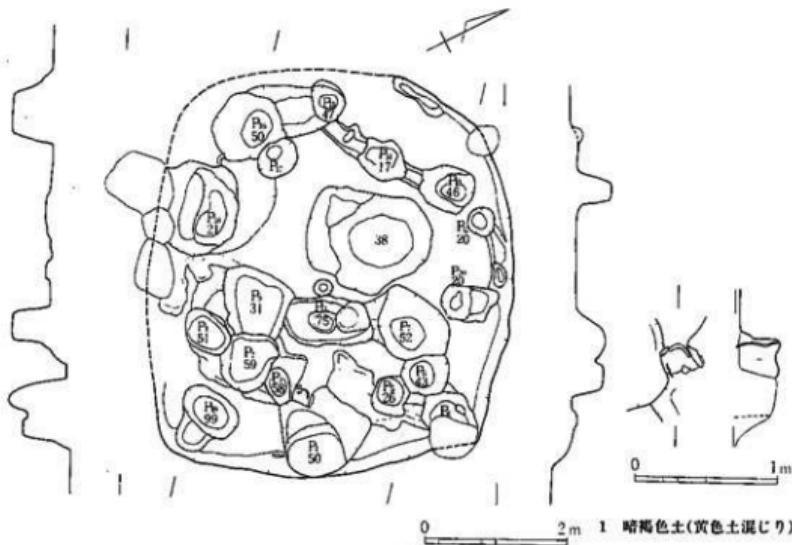
調査区中央やや北西寄り D2a1に検出し、9号住居址、掘立柱建物址3・4に切られる。(5.5)×(5.1)mの隅丸方形竪穴住居址と推測され、主軸はN45.5°Wである。壁高は残存部で20cmを測る。穴との切り合いが著しく、確認できた床はごく一部分で軟らかであった。主柱穴も5本柱と推測されるが、断定はできない。炉址の位置も大きな穴が切っており焼土すら無かった。埋甕は約20が原位置を保っていたのみである。

遺物は切り合い関係の為に他に比較して少ない。土器は無文で波状口縁を成す埋甕の他は、小破片が若干ある。石器の出土量は多く、打製石斧・横刃型石器・敲打器などがある。

時期は中期後半中頃である。

⑨ 26号住居址 (挿図11)

25号住居址の西側 D1×28に検出し、9号住居址に切られる。(5)×(5)mの不整隅丸方形竪穴住居址と推測される。柱穴と炉址の位置から主軸はN67°Eを測る。壁高は残存部で20~30cm、床は



挿図10 KID 25号住居址

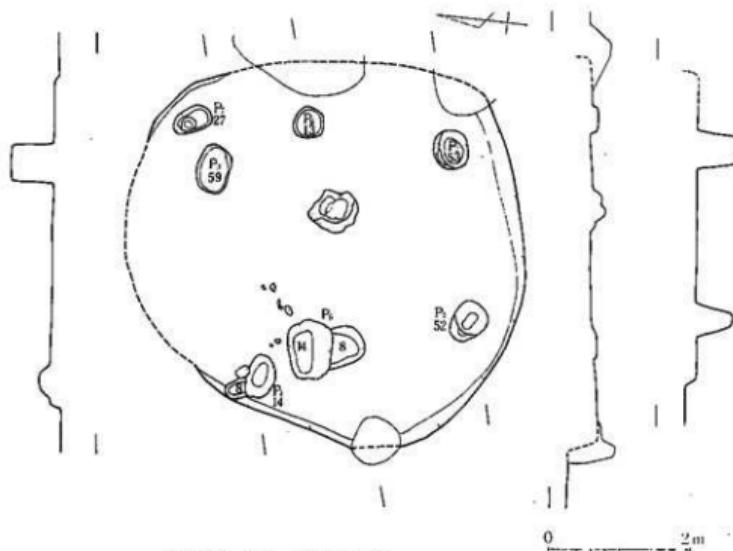
比較的平坦であり、堅く良好であった。主柱穴は4本柱と思われるが、ロームマウンドに附属する黒色土に切られる穴は浅い。この黒色土中には、チャート質の石片が混入していた。炉址は中央からやや奥壁よりに位置しており、小さく深い。

遺物出土量は少ない。土器は全体形の知れるものはないが、沈線文と結節縄文の組合せによるものが主体を占める。無文の土隔洞部・耳栓2点も出土した。石器は打製石斧・横刃型石器・凹み石があり、横刃型石器には20cmを越すものもある。

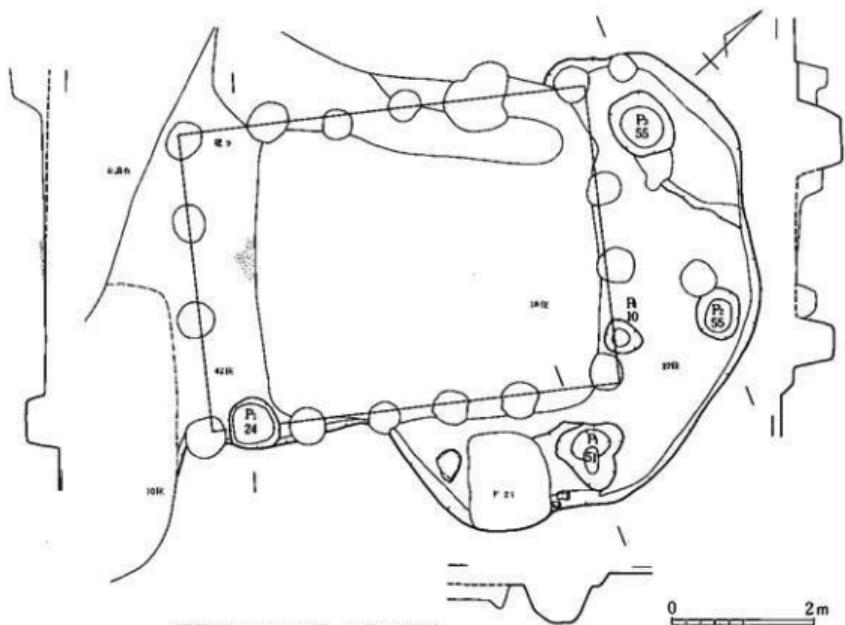
時期は中期後半終である。

⑩ 27号住居址 (挿図12)

調査区南西隅近く、D1t 5に検出し、18号住居址、据立柱建物址9、土坑21に切られる。直径6m前後の円形竪穴住居址であり、切り合いの為主軸方向は不明である。壁高は約20cmで、残存部の床面は比較的堅く良好であった。主柱穴は3本を確認した。炉址は弥生時代の18号住居址に切られて確認できなかった。



挿図11 KID 26号住居址



挿図12 KID 27号・42号住居址

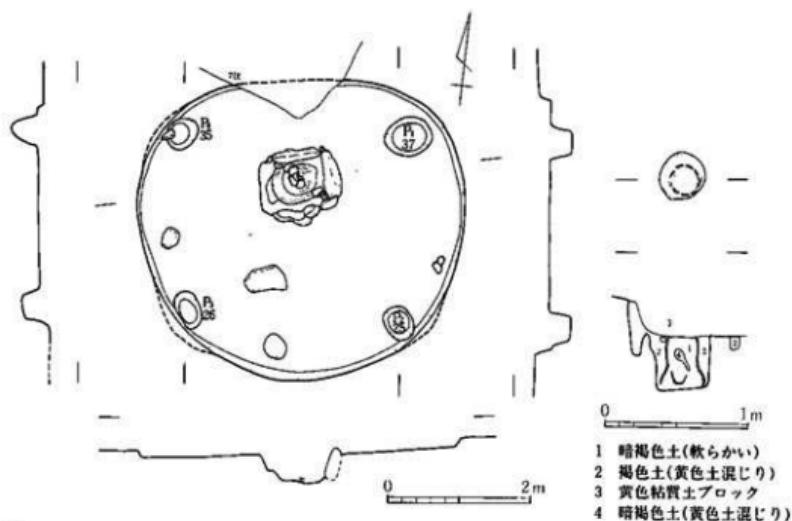
遺物の出土量は少なく全体形の確認できるものは無いが、施文は深鉢に縄文と半月形隆帯の内側を沈線でうめるものと、小形で無文のものがある。石器の出土量は多く打製石斧・横刃型石器・凹石チャート製石箋などである。

時期は中期後半前段階である。

(佐々木嘉和)

#### ⑪ 28号住居址 (挿図13)

古墳時代後期の7号・16号住居址と重複してD 2b付近で検出された。4.6×4.2mの不整円形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN 1°Wを示す。床面は堅く、壁は5~25cmを測りやや急に立ち上がる。主柱穴はいずれも壁際にあり比較的浅い。周溝もないことを考えると、壁までまだ掘り足りない可能性もある。炉址の底は赤く焼けており土器片が出土した。埋甕は南壁下にある。



挿図13 KID 28号住居址

主軸よりややはざれて蓋石があり、下に口縁を密着して埋甕が据えられていた。

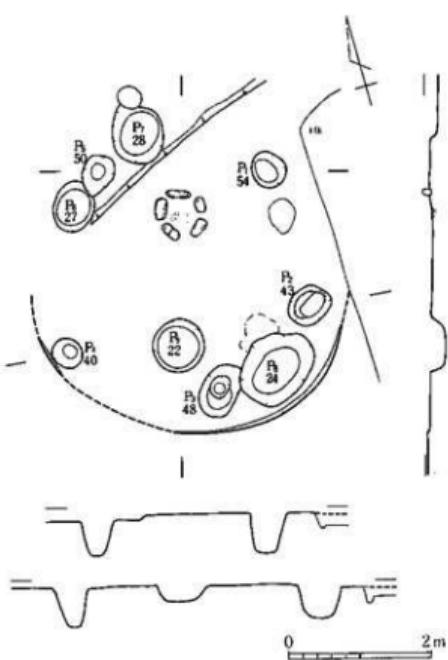
本住居址からの出土遺物は少ない。深鉢形土器4個体が出土している。沈線による円文、逆U字文内に綾杉文を充填するもの、縄文地文のものなどである。また埋甕は口縁部に楕円区画文を配し、以下沈線、蛇行沈線文が垂下し綾杉文が充填される土器である。石器は打製石斧・凹石・敲打器等が出土している。

時期は遺物から中期後半終末に比定される。

#### ④ 29号住居址 (挿図14)

C221を中心にして1号住居址の西側に接して確認された。本住居址の北側の一部は水田造成の際に削平されている。全体形・規模とも不明であるが、不整圓ないし楕円形を呈する竪穴住居址で主軸方向はN4°Eを示すと思われる。主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の5本で、柱穴底部のレベルはほぼ揃っている。P<sub>5</sub>の北側に堅い床面の一部を検出した。炉址は良好に遺存しており、底部に焼土が認められる。

遺物の出土量は少ない。土器はいずれも小破片であるが、胴部に梯形文の施文されるものなど



深鉢 2 個体が出土している。他に加曾利 E 式の土器片が P<sub>2</sub>から出土している。石器は比較的硬砂岩製フレイクが多い。時期は出土遺物から中期後半前段階の住居址である。

挿図14 KID 29号住居址

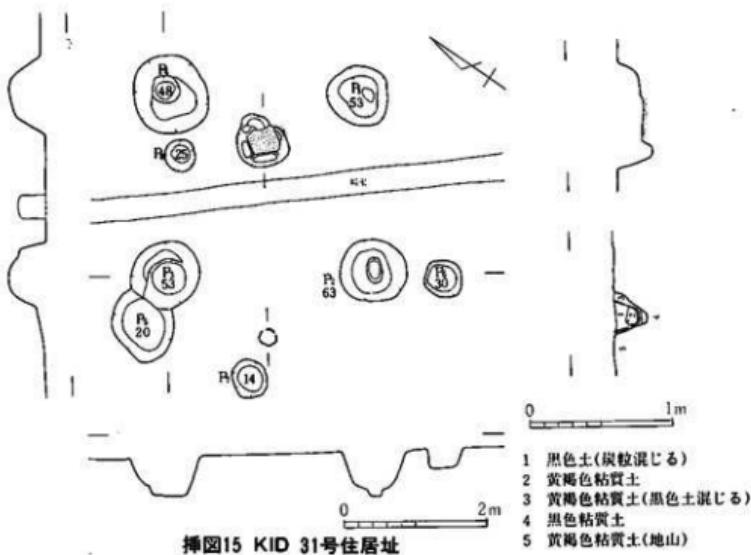
⑬ 31号住居址 (挿図15)

21・49号住居址、掘立柱建物址 1 に接して検出されたが、床面は削平されて全く残っておらず、プラン・規模等不明な点が多い。主柱は P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub> の 4 本で、P<sub>2</sub>～P<sub>4</sub> は二段の構造を呈する。掘り方はいずれも径 100 cm 前後の不整円形で底部のレベルも揃っている。穴の側壁は柔かくあまりしつかりしていない。炉址は方形に石を抜き取った痕跡があり、よく焼けた炉底が認められた。埋甕は炉址の南西 2.7 m に確認された。埋甕内部は下半部だけが埋まっていたらしく、上からの圧力で土器がこの境付近で割れて一部内部に崩れ込んでいた。

遺物は床面が削平されていたため極めて少なく、出土土器の器面は著しく荒れている。埋甕は口縁部文様帯を欠いており、沈線・蛇行沈線文の垂下する縄文地文の土器である。

時期は出土遺物等から中期後半終末に属する。

(桜井弘人・馬場保之)



挿図15 KID 31号住居址

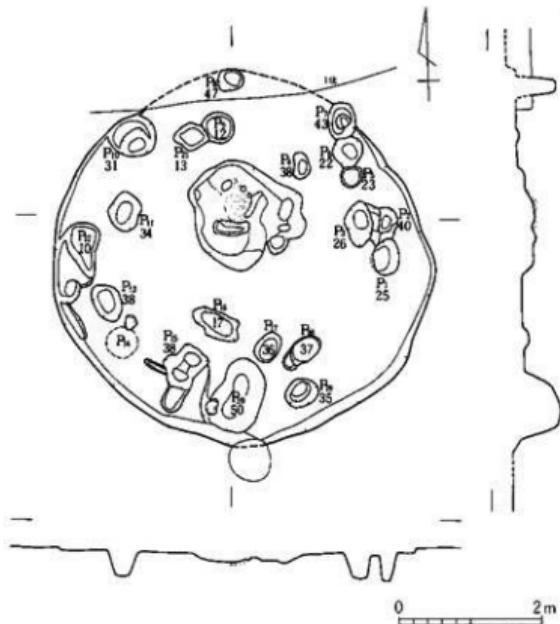
⑭ 32号住居址 (挿図16)

調査区北隅近く C2k23 に検出し、1号・2号住居址に切られる。直径 5.3 m の円形堅穴住居址で主軸は N38° E を測る。壁高は 20cm 以下で、削平を受けている。床は堅く良好であったが、主柱穴の確認はできなかった。炉址は中央やや奥壁よりにあり、石を抜いた痕跡が観察でき石組炉と推測される。

遺物出土量は多いが、埋甕は無かった。土器は床面直上から出土し、ほぼ全体形の確認できる深鉢は 9 点あり、破片は 5 点ある。手づくね土器も 1 点出土した。施文は無文もあるが沈線と細文の組合せ、口頸部に隆帯をもち、その上を刺突・沈線で飾るものなどである。石器の出土量は多く、磨製石斧・打製石斧・横刃型石器・石錐・凹石・敲打器・黒曜石製石錐・石錐（玻璃質安山岩）未製品などである。

時期は中期後半中頃である。

(佐々木嘉和)



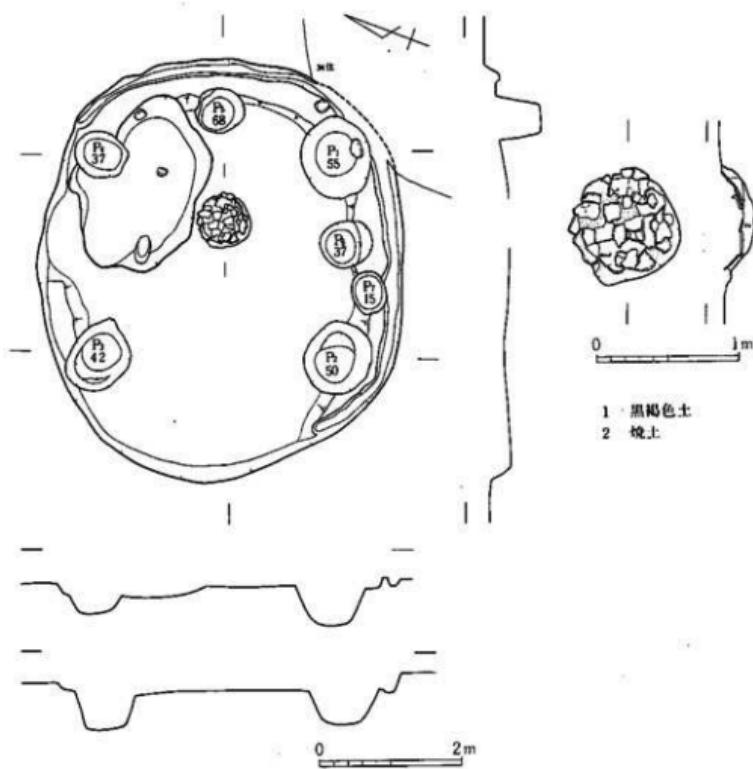
挿図16 KID 32号住居址

⑯ 33号住居址 (挿図17)

C2f19を中心とした34号住居址と重複して確認された。プランは $5.9 \times 5.1\text{m}$ の不整格円形を呈し主軸方向N72°Eを示す。床面は南壁際などに残存し、東壁側は一段高くなっている。壁はやや緩やかに立ち上がっており、東・南壁下に周溝が検出された。主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>で、西側の2本は二段の構造を呈する。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は規模、底部レベルが類似する。炉址には底に大型の深鉢1個体分が入っており、内面が上を向き焼土が付着している。土器の下は厚い焼土がみられ、土器敷設以前比較的長い存続期間も考えられる。切り合い関係から34号住居址より古い住居址である。

土器で器形の知れるものに深鉢7個体がある。口縁部に横円区画文の腰開するもの、胴部に渦巻隆帯の施文されるもの、隆帯区画から沈線文が垂下する縄文地文の土器などが出土している。また炉内出土土器は胴部以下隆沈線による区画内に縄文、結節縄文の施文される深鉢である。他に、土製円板2点がある。石器は打製石斧・磨製石斧・石錐・不定形石器が出土している。

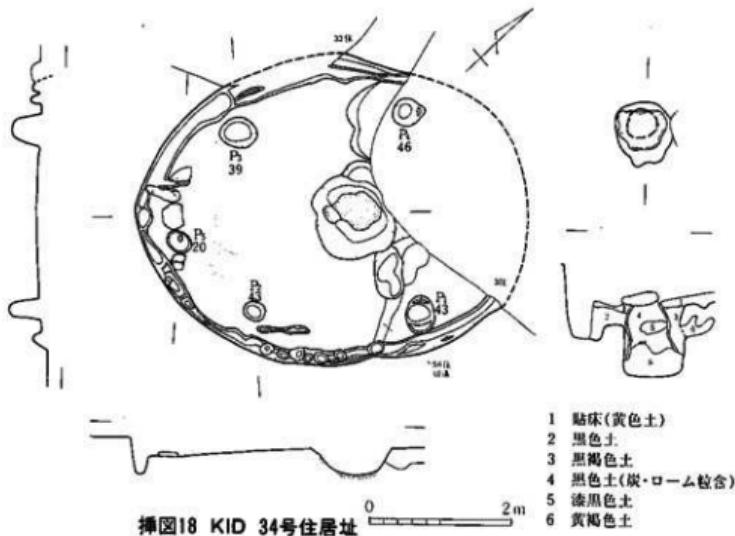
時期は遺物等から中期後半中頃の住居址である。



挿図17 KID 33号住居址

⑩ 34号住居址 (挿図18)

C2g17付近で、3・33・56・64号住居址と重複して検出された。重複のため長軸の長さは不明であるが、短軸4.3mの不整椭円形のプランをもつ竪穴住居址である。主軸方向はN405°Eを示す。非常に堅くひび割れた良好な貼床が残っており、真平らな部分と凹凸の部分がある。壁高は7~20cmを測りほぼ垂直に立ち上がっている。周溝はやや幅広で、北西部に貼床があつた痕跡がある。また東・南側の周溝内に連続した凹部がある。炉石は抜き取られ、炉底に厚く焼土が認められる。主柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>で、P<sub>2</sub>は径がやや小さいが深さは描っている。埋甕は南西壁下にあり、蓋石の両側に入口にもとなう穴が掘り込まれている。本住居址の覆土中には多量の炭火材・焼土が含まれ、部分的に赤化した床面とともに火事の住居である。

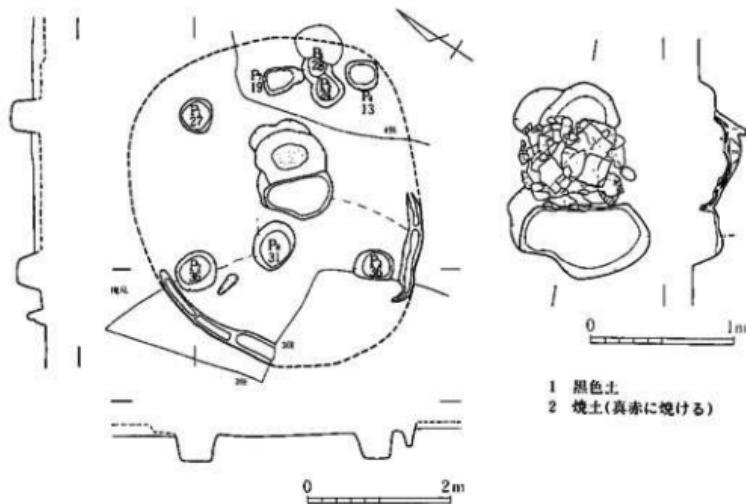


土器は遺存率が低いものの深鉢9点が出土している。炉址内出土の深鉢は波状口縁で、渦巻文の下に沈線の懸垂する繩文施文の土器である。石器は打製石斧・硬砂岩製フレイクの出土を見る。時期は出土遺物等から中期後半に属する住居址である。(桜井弘人・馬場保之)

⑯ 35号住居址 (挿図19)

調査範囲北端のC2e18付近に検出され、古墳時代の3号・4号住居址に切られ、2号住居址に接する。上部も他の住居址に切られ、削平されており、壁はほとんど残らず全体形は不明である。床面は一部が残存するのみであるが3号住居址に切られる付近が良好である。本址範囲内と考えられる位置に複数の穴があり、そのうちP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が主柱穴であり、床からの深さは30数cmである。

主柱穴以外の穴については本址との直接的関係は不明である。3号住居址と切り合う箇所の残存部に周溝を明瞭に認め、住居址南端が把握された。炉址は、北東及び南西側に石を抜き取った痕とみられる穴があり、本来石組炉であったと考えられる。炉底から炉壁は三から五重に土器を敷き、その規模は60~70cmを測る。土器下は焼土化が顕著で、土器自体もかなり二次焼成を



挿図19 KID 35号住居址

受けており、一定期間使用後に土器を敷設し、さらにその後も一定期間の住居址存続したことが判断される。

出土遺物には炉内に敷かれた深鉢が3個体以上あり、うち1つは底部を欠くが復元された。石器には乳棒状磨石斧の未整品、横刃型石器、磨石がある。また、土製品として土偶の手がある。

出土遺物等から本住居址の時期は中期後半の中頃と考えられる。

(小林正泰)

④ 36号住居址 (挿図20)

掘立柱建物址12の北側の遺構検出中にC1p13を中心として、遺物が集中出土し住居址と判断された。西側は未調査部分にかかり、上面はほとんど削平されているものと考えられる。精査した結果、南東壁を把握した。確認した壁は残存状態の良い所でも11cmを測るのみである。平面形は隅丸方形で一辺の軸方向がN51°Wを示す竪穴住居址が想定される。主柱穴は炉址等の施設が確認されず、覆土の似かよる土坑、穴が同時に検出されているため明確でないが、一本が未調査部分にかかる4本主柱穴と判断した。床面は確認した壁際にわずかにタタキ状の黄色土を認めたが、きわめて軟弱なものである。

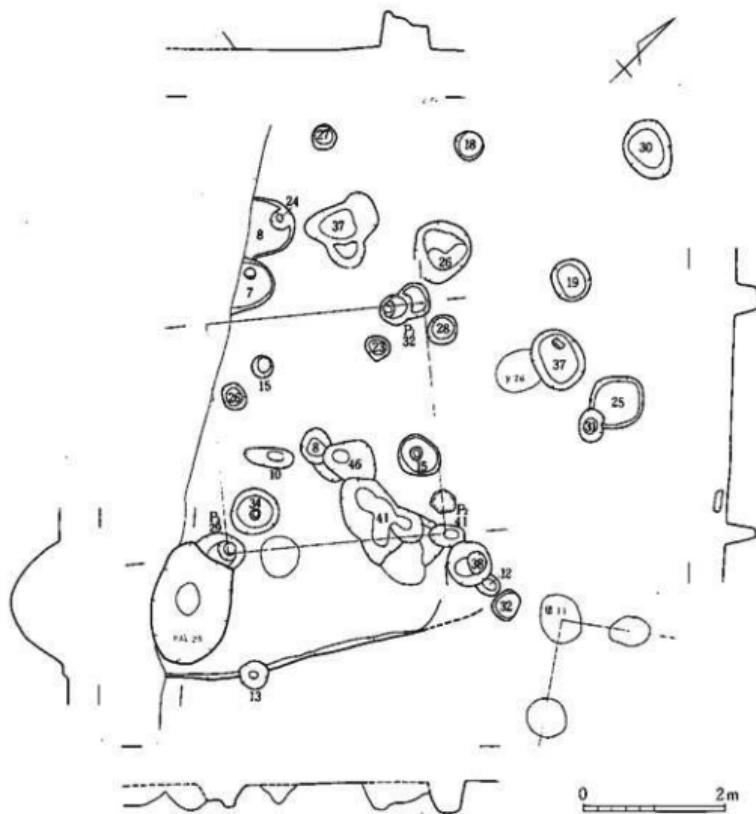
土器の出土は少なく、鉢の小破片が数点あるのみである。石器には小形の打製石斧・半磨製石斧・横刃型石器・黒曜石剥片などがある。

時期は中期後半と思われるが詳細時期は不明である。

(佐合英治)

⑩ 37号住居址 (挿図21)

調査区北東側中央近くのC2 j16に検出した。3号住居址に切られ、39・56号住居址を切る。直径5m前後のほぼ円形の竪穴住居址で主軸はN7.5°Wを測る。壁高は10~30cmで切り合い部以外



挿図20 KID 36号住居址、土坑25、周辺ピット

は高い。床は非常に堅く良好であった。主柱穴は4本で、周溝にかかる2本は、補助的な柱穴であろう。炉址は中央やや奥壁寄りにあり3号住居址に約半分切られていた。炉中に石2個が転落しており、抜いた痕跡も観察され石組炉と推測される。周溝は壁下に全周していたと推測され、巾広で深くしっかり作られていた。周溝上面に貼り床された部分もあった。

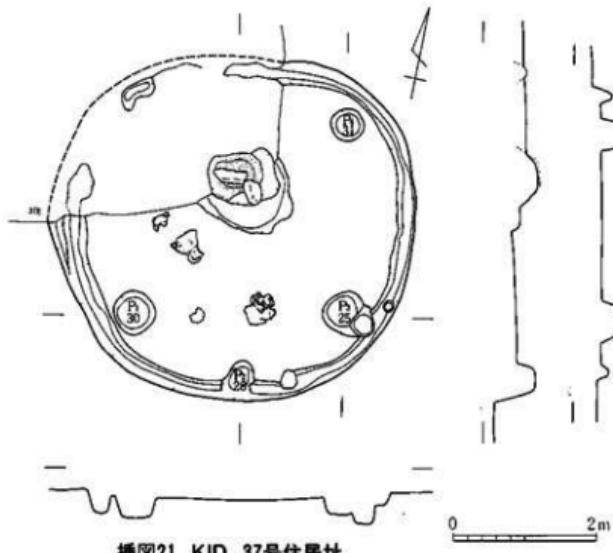
遺物出土量は多く、土器で全体形の確認できるものは大・小の深鉢と器台である。大形深鉢の施文は頸部から胴部にかけて隆帯をほどこし、隆帯の間を繩文・刻突文でうめる。小形のものは無文がほとんどである。器台は2点あり破片であるが、1点は現存部無文で透し穴6箇所と考えられ、もう1点は透し穴5箇所で、籠状工具による押し引きで沈線文を施し穴の周り、間を飾る。石器は打製石斧・横刃型石器・敲打器・石鐵・石鎧・海浜石などである。

時期は中期後半中頃である。

(佐々木嘉和)

◎ 38号住居址 (挿図22)

本住居址は4号住居址の東側、C2n14付近で検出された。住居址の東半は農道にかかり未確認のためプランは不明であるが、不整橿円形を呈すると推定される。主軸方向はN43.5°Eを示す。



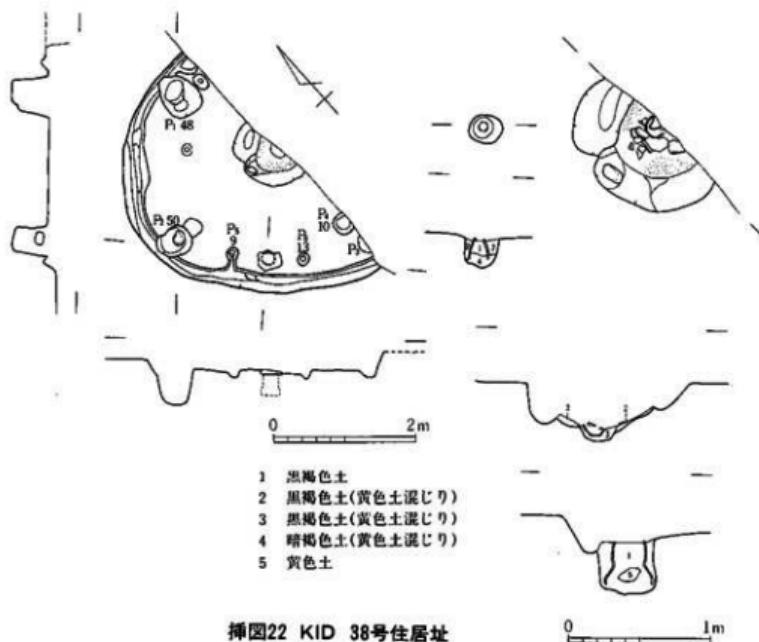
挿図21 KID 37号住居址

壁高は検出面から10~25cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は堅く締っており、しっかりとした周溝が設けられている。主柱穴は形状とともに規模も30~70cmとばらつきがあるが、底部のレベルはほぼ揃う。炉石は抜き取られているものの、炉底に埋め込まれた深鉢が遺存している。埋甕は南西壁下に蓋石を伴なって確認された。埋甕中には焼土・炭がわずかに混入していた。

遺物は比較的多い。器形の知れるものに深鉢など5個体がある。渦巻文の下に蛇行沈線文が垂下する縄文施文の土器である。埋甕は7単位の渦巻文の下に沈線で描出された唐草文が展開する。伏甕は縄文を地文とするが器面の著しく荒れた土器である。また炉址の北西から床面に埋め込まれた状態で出土した手づくね土器もある。石器には石錐・打製石斧等がある。

時期は出土遺物等から中期後半中頃に比定される。

(桜井弘人・馬場保之)



挿図22 KID 38号住居址

② 39号住居址 (挿図23)

調査区北東側中央近くのC2k15に検出した。37号住居址に切られ、41号住居址を切る。直径約5.8mの円形竪穴住居址で、主軸方向はN 10°Eを測る。壁高は残存部最高で20cm。火事の住居址で床面は赤褐色に焼け、堅く良好であった。主柱穴は6本であるが比較的浅い。床面の小さな穴2個には貼り床があったが凹んでいた。炉址は中央やや奥壁寄りにあり、石を抜いた痕跡を検出し石組炉と推測した。炉址の東隅に副炉が設けられており、これは残っていた。周溝は壁下全周に確認できた。

遺物の出土量が多い。埋甕は平板の蓋石を持ち、底を抜いて正位に埋められていた。口頸部は櫛状工具による浅く細い縦・斜の沈線を持ち、胴部は隆帯の間を沈線で埋める。埋甕のやや東寄りに伏甕があり底部に穿孔されていたが、甕内上部に空間があった。口縁部を連続押引沈線で二

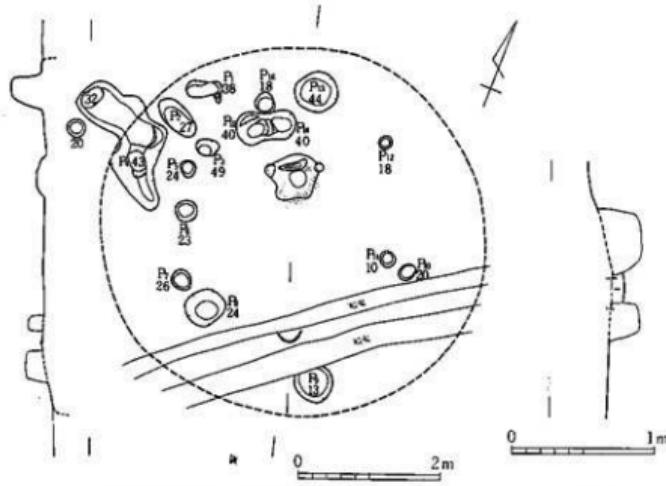


段に飾り、頸部から胴部に沈線を施し下垂部の間を櫛状工具による細かなカキ目で埋める。ほぼ完形の中形深鉢は床から約10cm浮いて出土した。無文で頸部に巾広の粘土紐を一本貼り付け、指頭で連続的に押している。周溝中から出土した小形深鉢の下部は縄文が施されている。奥壁下に器台があったが、床を振り凹めて下部を埋め、周りに貼り床してあった。下部は全周あり一部分上端まで残っていたので復元ができた。透し穴は4箇所で約1cmの小穴が、対になって8個あけられており、無文である。石器は乳棒状石斧・横刃型石器・敲打器・磁石・黒曜石剥片などである。

時期は中期後半中頃である。

#### ② 40号住居址 (挿図24)

39号住居址の南西側C2h 14に検出した。水田造成時の削平、暗渠排水工事により切られてい る。想定規模5.5mを測り、円形竪穴住居址と考えられる。主軸方向は炉址と埋甕の位置からN 22°Eであろう。床面まで削平されており軟らかい。主柱穴と確認できるものは、炉址の北側の1本のみである。他の穴は浅く、炉址の北西側3個の穴の上面には貼り床が確認された。炉址は石組炉と推測され、小さな石2個と石を抜いた痕跡があった。石を抜いた痕跡は長楕円形で、炉址



の底部よりもやや深い。埋甕は造成時に壊されていたが、わずかに残っていた。

遺物の出土量は少なく、土器には深鉢片が2個体ある。施文は沈線である。石器は横刃型石器と黒曜石剥片などである。

時期は中期後半中頃である。

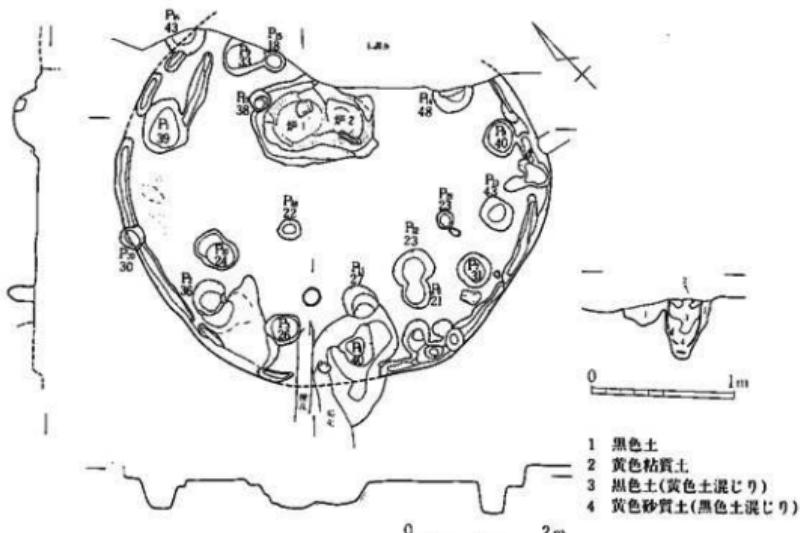
(佐々木嘉和)

#### ◎ 41号住居址 (挿図25)

調査用地東端のC2k12を中心的に検出された。5号住居址に切られ、37号住居址を切り、43号住居址と接する。東側1/4程が未調査部分となる。平面形は橢円形で、周溝・主穴・炉址の状況から建て替えのある豊穴住居址である。規模は主軸に直交する長さが6.1mを測り、主軸方向が5.2mと想定される。主軸方向はN63.5°Wを示す。壁は南東部分で30cmを測り、垂直に立ち上がる。北西側は37号住居址と切り合い、地山面の自然傾斜もあるため8cmほど確認できたに止どまり、周溝のみ把握した部分もある。周溝は壁直下にあり部分的に絶続する。深さ3~16cmを測る。北側では2本検出された。床面はほぼ平坦できわめて堅く良好なものである。37号住居址を切る部分は厚く貼り床されている。複数の柱穴を検出し建て替えているものと判断した。 $P_9$ ・ $P_{10}$   $P_{12}$ ・ $P_{13}$ ・ $P_{14}$ は完全に貼り床されている。未調査部分に1本が想定でき、6本主柱穴であったものを、 $P_1$ ~ $P_4$ ・ $P_7$ ・ $P_8$ と未調査に想定できる2本を加えた8本主柱穴にしたものと考えられる。しかし南側の柱穴は新旧とも間隔が狭く、不規則であり、同規模の穴との切り合いも見られる。4本主柱穴から8本主柱穴にしているなど複数の建て替えも考えられる。埋甕は南西壁側に確認され、壁から少し離れた位置に深鉢が正位の状態で埋められていた。蓋石は取り除かれていた。炉址は住居址中央部よりやや北に2個確認された。ほぼ同位置に造り替えられている。主軸上から見て右が古く、左が新しい。旧炉址は深さ30cmを測る。覆土は黄色土を多量に含んでおり、一気に埋められたと考えられる。底部面より掘方面が良く焼けている。新しい炉址は旧炉址に比べ壁面がややゆるやかに掘り凹められている。深さ36cmを測り、規模も少し大きくなる。旧炉址同様に壁面が良く焼けている。新旧炉址とも石を抜いた痕跡を認め、石組炉であったと判断される。遺物の出土量は比較的少ない。埋甕に使われていた深鉢のはかは皆破片であるため正確な個体数は不明である。施文のわかるものはほとんど沈線文と縄文の組合せによる施文がなされており、底部片には施文が見られない。石器には乳棒状石器破損品・打製石斧・横刃型石器・敲打器・黒曜石剥片のはか握り拳などの河原石などがある。

時期は中期後半中頃に位置付けられる。

(佐合 英治)



挿図25 KID 41号住居址

◎ 42号住居址 (挿図12)

調査区西隅近く D1r 5に検出し、10号・18号住居址・掘立柱建物址 9に切られる。調査範囲はわずかであり、規模・プラン・主軸など不明である。壁高は残存部で20cmを測る。床面はほとんどが削平されており、残存部も軟らかい。42号住居址に付属すると思われる穴は1個であり、深い。床面に赤褐色に焼けた所があり、炉址の位置であろう。

遺物はごく少量の出土で、土器は深鉢片の底部と胴下部の小片であり、現存部は下垂した沈線文のみである。

時期は中期後半中頃である。

(佐々木嘉和)

◎ 43号住居址 (挿図26)

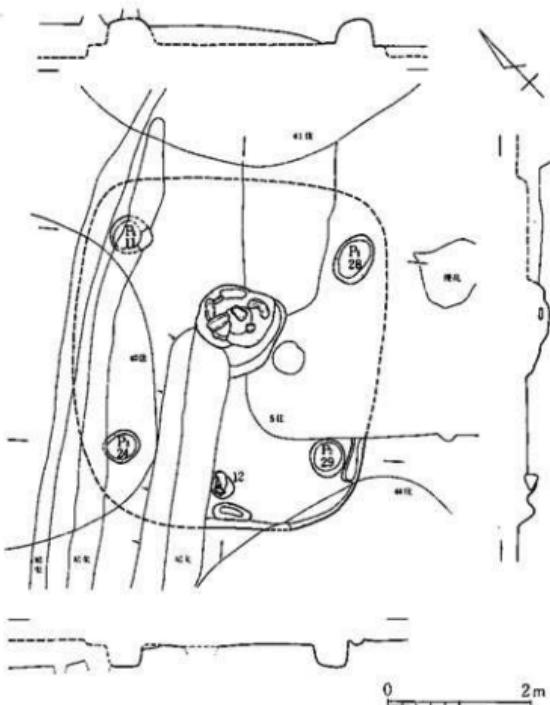
C2h13を中心にして5号・40号・44号住居址と重複して検出された。本住居址の西半は暗渠に切れ、また北側は5号住居址とともに削平をうけており、一部を検出したにとどまる。プランは隅丸方形をなすと推定され、主軸方向はN 50°Eである。部分的に遺存する床面は堅く締っている。

壁はやや緩やかに立ち上がり、一部検出された周溝はあまりしっかりしていない。主柱はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本であり、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は暗渠に切られる。P<sub>1</sub>を除き径50cm前後の円形の掘り方をもち、各柱穴の底部レベルはほぼ揃う。炉石は抜き取られ、炉址内に石が転落している。そのうちの1つは半円のリング状をなしており、花崗岩製の加工品で副炉用材の可能性が強い。また、埋甕は南西壁下に確認され、内部には斜めに石が落ち込んでいた。

出土遺物は少ない。埋甕に使われていた深鉢は胴部下半から底部にかけ沈線が垂下する縄文地文の土器である。石器には磨製石斧があり、覆土中から出土した。

時期は遺物等から中期後半中頃に属する住居址である。

(桜井弘人・馬場保之)



挿図26 KID 43号住居址

#### ⑧ 44号住居址 (挿図27)

調査区東隅近くC2f11に検出し、43号住居址・掘立柱建物址8・土坑13に切られる。4.6×5mの円形にちかい隅丸方形の竪穴住居址であり、主軸はN 15°Wを測る。壁高は30cmあり、床面は比較的良好である。南壁下から炉址に向って小石が少量敷かれており、その巾は約80cmである。床のこの部分に意図的に入れたものと考えられるがいわゆる敷石住居とは異なる。主柱穴は4本

で、各隅近くに検出した。炉址は中央やや奥壁寄りにあり、石組炉である。南側の石が割れて、炉中に転落していた。北東隅には、砂岩3個で組んだ副炉が設けられている。周溝はほぼ全周しているが比較的浅い。平板の蓋石を持つ埋甕が周溝ぎわにあり、底を抜いて正位に埋められていた。

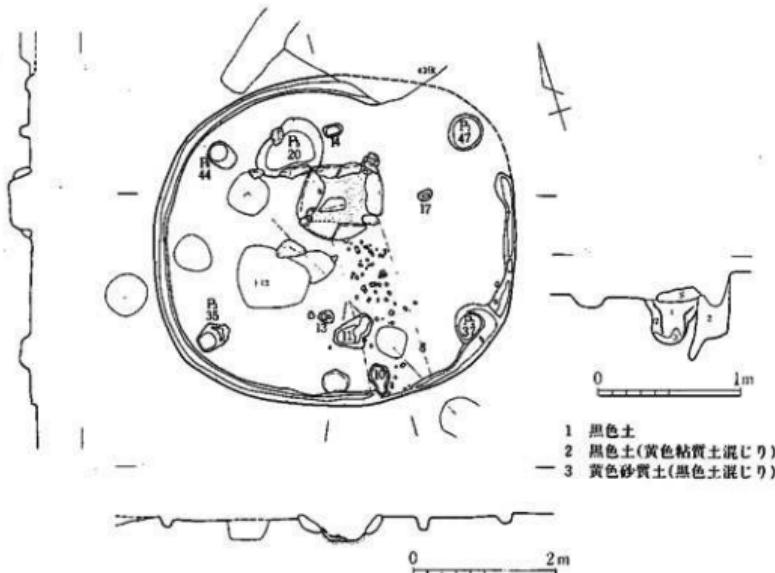
遺物の出土量は多く、大きな土偶の足が炉址の覆土中から出土している。埋甕は口縁部に、隆帯と肉彫りで唐草文を施し、頸部は無文である。炉中から出土深鉢片は4個体あり、沈線文・繩文・櫛状工具による浅く細い縦のカキ目で飾っており、底部片には木葉が残っている。石器は磨製・打製石斧・横刃型石器・敲打器などである。

時期は中期後半中葉である。

(佐々木嘉和)

◎ 45号住居址 (挿図28)

調査用地南東のC2c9を中心検出した。掘立柱建物址7・8に北側を部分的に切られているが、地形の傾斜にともない床面まで削平された部分に当る。全体を調査できた住居址であるが上面は、ほとんど削り取られており、周溝により規模を把握した。平面形は南北にやや長い円形の竪穴住居址である。規模は5.75×5.4mを測る。主軸はN33°Eを示す。周溝は深さ7~23cmを



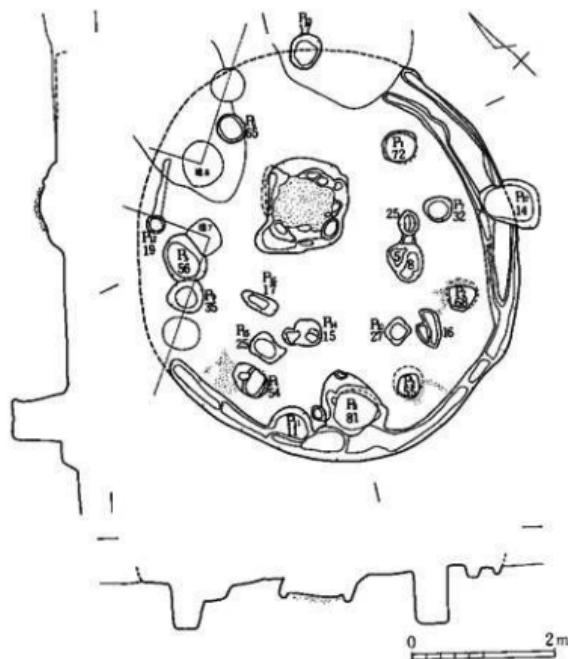
挿図27 KID 44号住居址

測る。炉址より北側の部分で確認しただけであるが全周していたものと考えられる。東側では2本に分かれており、増築を行なっていると思われる。床面は凹凸があるものの削平されている北側を除きわめて良好な堅いものである。床面全体に焼土が認められ火事の住居址である。柱穴は6本確認された。柱掘方上面には中央に向かってわずかに盛り上がる貼り床が認められ、柱ぎりぎりまで叩き締められていたものと思われる。埋甕は無いが入口部と考えられる南壁際に深さ81cmを測る深い穴が確認された。袋状の掘り方で、いわゆる埋甕と同じ意識を持ってつくられた施設とも考えられる。炉址は住居址中央部よりやや北に位置する。方形のプランで石を抜いた痕跡が認められた。深さは25cm前後を測る。

遺物は上面が削平されているため少ない。器形の知れるものとして、無文の底部と口縁部が内湾する深鉢がある。胴部のくびれた部分に把手を4個配し、連続刺突のある横位の隆帯で装飾し上部に縦位の波状の沈線文を施したものである。石器には乳棒状石斧破損品、横刃型石器、凹石石匙・黒曜石剝片などがある。

時期は中期後半中頃に位置付けられる。

(佐合英治)



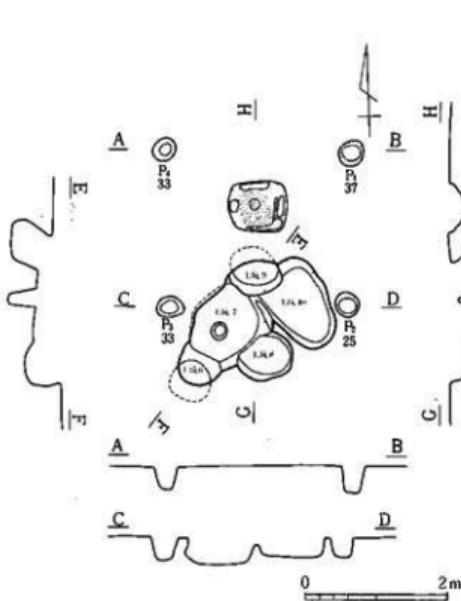
挿図28 KID 45号住居址

◎ 46号住居址 (挿図29)

C2d14を中心には6号住居址の北側に接して検出された。削平をうけて壁・床面・周溝は全く遺存しておらず、プラン・規模とも不明である。主軸方向はN1°Eを示す。主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本で、径30～40cmのほぼ円形を呈し底部レベルも揃う。炉址は小規模で底部は赤く焼けている。炉石の抜き取り痕から炉址は方形を呈すると思われる。なお、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>間に本住居址に付属すると思われる土坑6～10がある。このうち土坑6・9は斜めに掘り込まれ、また土坑7は底が広がり中央に穴が掘り込まれている。

遺物の出土量は少ない。皆破片で炉址内からの出土が多く、口縁部に沈線で渦巻文が施される地文繩文の土器などである。また土坑6より繩文時代中期の土器片が出土しており土器は本址に伴なうものと思われる。石器群はきわめて貧弱であるが、側縁に連続した細かい敲打痕のある石器などがある。

時期は出土遺物等から本住居址は中期後半中頃に位置づけられる。

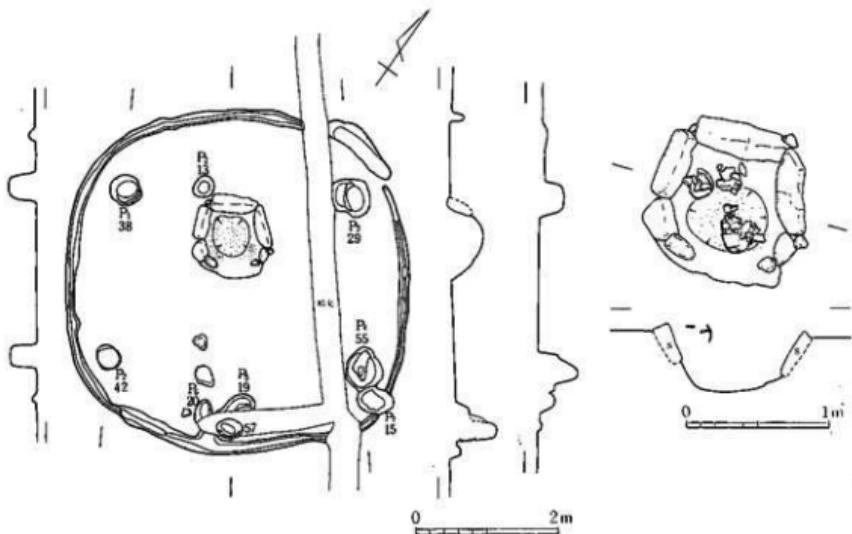


挿図29 KID 46号住居址、土坑6・7・8・9・10

◎ 47号住居址

(挿図30)

方形柱列址1の北西側C2a15を中心に検出された。近代の暗渠により部分的に切られる。壁はすべて削平されているため周溝により全体を把握した。平面形は隅丸方形の整穴住居址と考えられる。規模は4.8×4.8mを測る。主軸方向はN37°Wを示す。周溝は深さ1～19cmを測るが北側は床面までも削平されており本来の深さは不明である。床面は炉址より南側で確認された。ほぼ平坦で堅く良好なものである。主柱穴は4本で比較的小形の掘り方である。埋甕は南北壁直下の暗渠に切られている部分に確認された。底部を欠く



挿図30 KID 47号住居址

深鉢の1/3程が逆位で残存していた。又同様に暗渠に切られているが小形の穴も確認され入口施設の一部と考えられる。炉址は住居址中央よりやや北西に位置する。深さ47cmを測る石組炉である。南東側の石は抜き取られていた。底部は丸くつくられ堅く締った焼土が確認された。出土した遺物は上面が削平されているためほとんど炉址覆土中からのものである。

土器は器形の知れるものとして深鉢2点がある。口縁部が折り返され、細かな櫛状工具による施文が全体に見られるものと、頸部に横位の波状の沈線文を施し胴部全体を繩文のみで施文するものがある。前者は埋甕に使われていたもので、ほとんどの破片はこの施文である。ほかに装飾把手、沈線文と繩文の組合せによる施文の土器片も少ないが見られる。石器には小形の打製石斧・横刃型石器・敲打器がある。

時期は中期後半中頃に位置付けられる。

(佐合 英治)

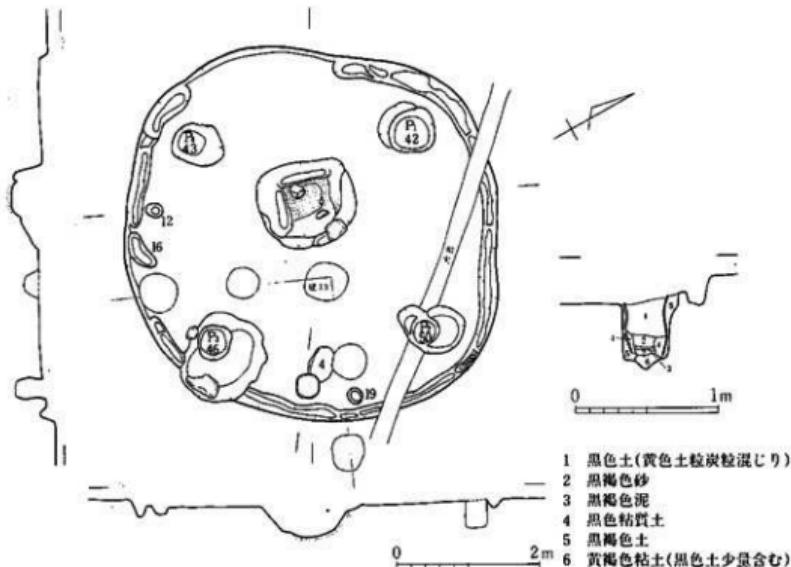
㊭ 48号住居址 (挿図31)

C1w16 を中心に検出され、47号・49号住居址、掘立柱建物址1に接し、掘立柱建物址13と重複する。西壁はロームマウンドに切られているが、 $5.1 \times 5.3\text{ m}$ の不整円形を呈し、主軸方向N  $66^{\circ}\text{W}$  を示す竪穴住居址である。壁高は検出面から $10\sim 15\text{ cm}$ を測り、壁下には周溝が認められた。主柱穴は4本で、規模、平面形はばらつきがあるが、深さはほぼ一定である。炉石は抜き取られているものの、形態は方形をとると思われる。炉底はよく焼け、厚く焼土が認められた。また覆土中に土偶脚部および深鉢が落ち込んでいた。埋甕は南東壁下に据えられており入口部と考えられる。

遺物の出土量は多く、深鉢9個体のほか浅鉢がある。深鉢には連続刺突の施された隆帯や波状隆帯から垂下した沈線間に綾杉文を充填したもの、渦巻隆帯間に沈線が充填されたもの、縄文地文のものなどがある。埋甕も同一の型式学的特徴を備えている。ほかに土偶脚部がある。石器には打製石斧・石鏃などがある。

時期は出土遺物等から中期後半中頃に比定される。

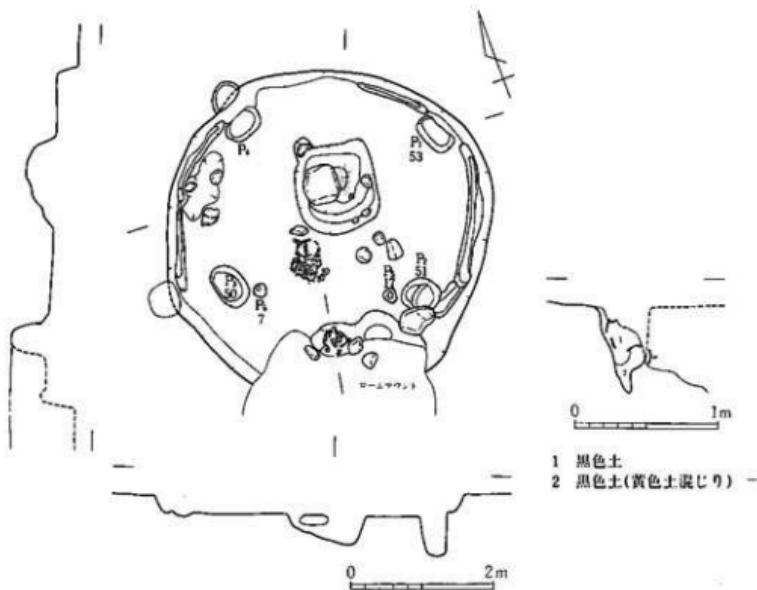
(桜井弘人・馬場保之)



挿図31 KID 48号住居址

◎ 49号住居址 (挿図32)

調査した範囲のはば中央C1g 19を中心的に検出した。掘立柱建物址1に北西側を部分的に切られ、南壁はロームマウンドに切られている。ほぼ全体が調査できた。平面形はロームマウンドに切られる南側がやや歪むがほぼ円形の竪穴住居址である。規模は $4.4 \times 4.5\text{ m}$ を測り、主軸方向はN 22.5°Eを示す。南側の覆土中には直径20~30cmの石が混入しており、掘り下げる中に堅く締まった焼土が部分的に認められたが性格は不明である。壁は27~30cmを測り垂直に近い立ち上がりを成す。周溝は深さ4~11cmを測り、部分的に途切れるが壁直下に検出された。床面は平坦で壁際まで堅い良好なものである。柱穴は4本主柱穴で、壁の方向にやや長い掘り方を持つ。西の1本以外は壁際には接する様に検出された。又南側の2本には底部の中央部にきわめて浅い凹み部分があり柱痕と考えられる。埋甕は南壁下に確認された。ロームマウンドに切られており原位を止どめていない。深鉢を逆位に埋設していたと考えられる。炉址は住居址のはば中央からわずか北寄りにあり、住居址の大きさに比して大形のものである。三方の石は抜き取られており残存する一個も炉址中に落ち込んでいる。北西隅に副炉を持つ方形の石組炉であったと考えられる。底部は東側が深く40cmを測り底部のみに焼土を認めた。遺物は炉址南西側の床面近くから多く出土した。



挿図32 KID 49号住居址

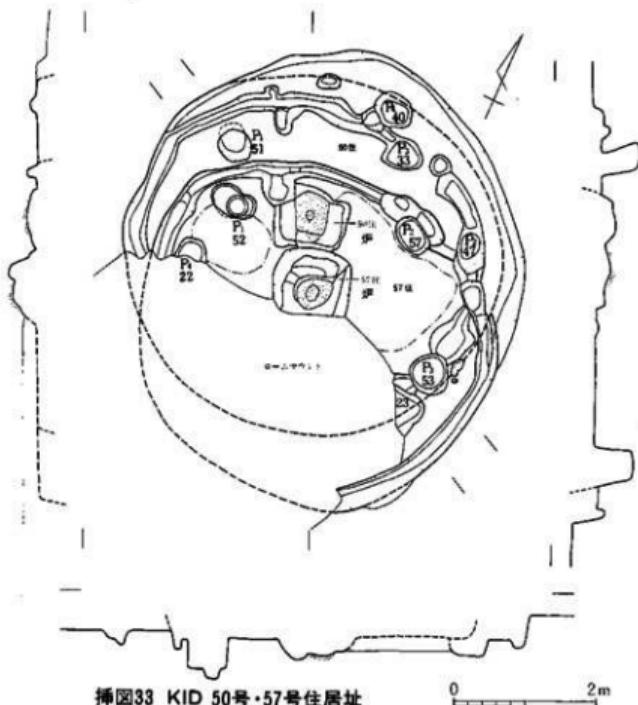
遺物の出土量は比較的多い。器形の知れるものとして深鉢6点がある。埋甕に使われていた土器と口縁部が内傾する土器は縄文のみの施文である。装飾把手のあるものは低い隆帯と沈線文に刺突文を組合せた施文で、胴部がくびれる。ほかの3点と破片は沈線文と縄文の組合せにより施文されるものである。石器の出土量も多い。打製石斧・横刃型石器・敲打器・チャート及び黒曜石の剥片などのほか握り拳ほどの安山岩の河原石がある。

時期は中期後半中頃に位置付けられる。

(佐合 英治)

◎ 50号住居址 (挿図33)

調査区西隅近くD1r2に検出し、57号住居址・ロームマウンドに切られる。推定直径5mの円形堅穴住居址で、主軸はN12°Eであろう。壁高は切り合い残存部で20cmを測る。床はわずか残



挿図33 KID 50号・57号住居址

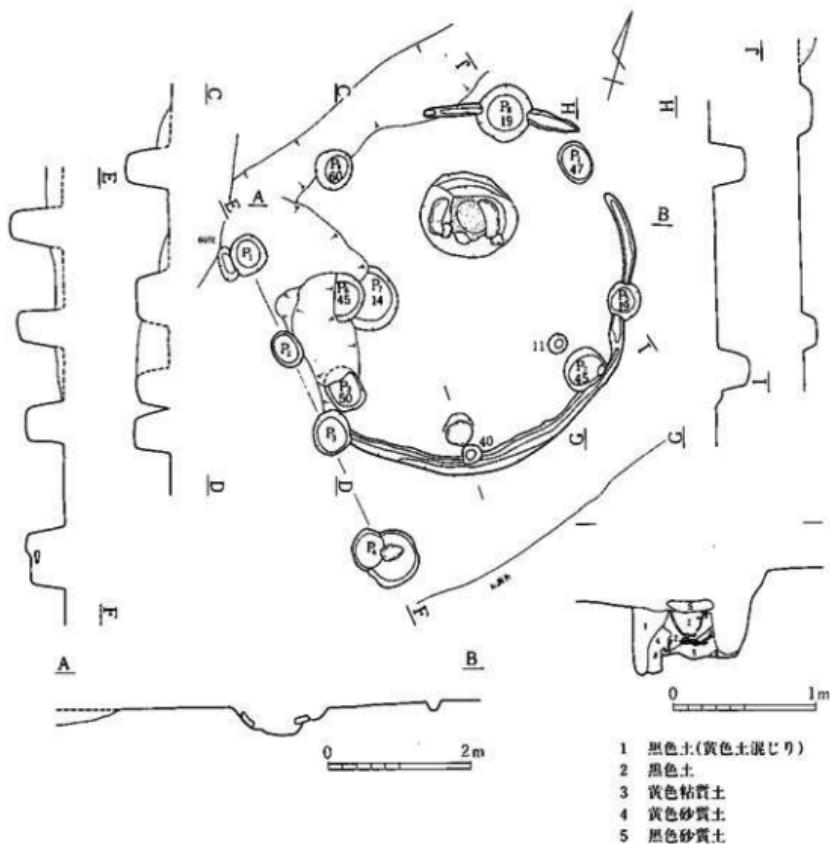
0 2m

っていただけであるが、軟らかかった。主柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が良いと思われる。炉址は57号住居址に切られていたが確認でき、石組炉の痕跡が残っていた。周溝は切り合いのない部分のみで検出し、全周していたと思われる。

遺物の出土量は少なく、最初切り合いがつかめずに同時に掘り下げたので、57号住居址の遺物と混入してしまった。土器は小片であり施文が主体である。石器は打製石斧・横刃型石器・敲打器などである。

時期は中期後半中頃である。

(佐々木嘉和)

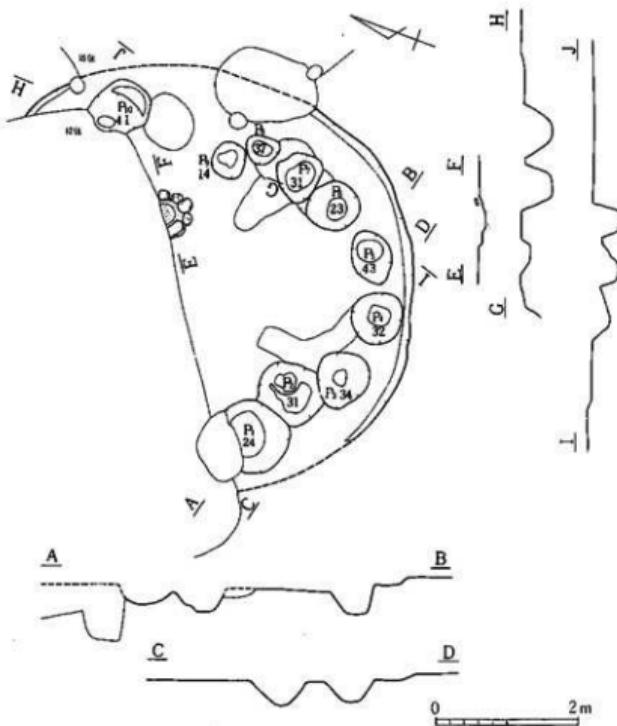


挿図34 KID 51号住居址, 建物址 25

◎ 51号住居址 (挿図34)

C106を中心にして60号住居址の東側で掘立柱建物址25に切られて確認された。西壁および北壁の一部は他の遺構に切られ不明であるが、径5.1mほどのほぼ円形を呈すると思われる。主軸方向はN16.5°W、主柱穴は壁際に検出されたP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本である。掘り方は径60cm前後で形状も類似するがP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は底レベルが低い。炉址は主軸方向に対する両側縁に炉石が残り、炉底はよく焼けていた。南壁下に埋甕があり、蓋石を伴う。その埋甕の下からこれより古い時期の埋甕が破損した状態で出土している。

本住居址からは多くの遺物が出土している。深鉢は、口縁部文様帯に渦巻文や隆沈線による区画文が展開し、胴部には縄文地文に沈線、蛇行沈線が垂下するものや壓垂沈線間に綾杉文が充填されるものである。石器群は多様で、石皿・石匙・打製石斧・磨製石斧等が出土しており、なか



挿図35 KID 52号住居址

でも打製石斧の数は多く、磨製石斧とともに受熱したものが認められる。

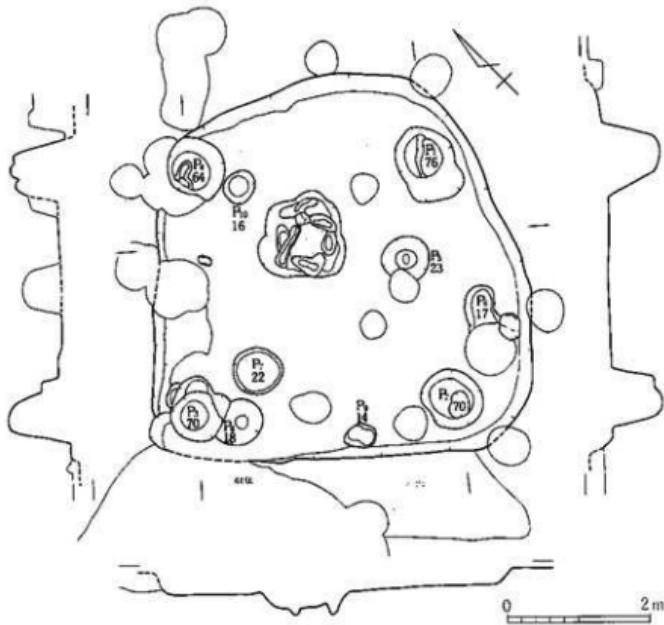
時期は出土遺物等から縄文時代中期後半中頃に位置づけられる。 (桜井弘人・馬場保之)

㊭ 52号住居址 (挿図35)

調査区南西境中央のC1q16に検出した。12・15号住居址に切られ、約半分を調査した。推定直径6mの円形竪穴住居址であり、主軸は推定N46°Eを測る。壁高は残存部で10cm以下である。床面は比較的軟らかく凹凸が著しい。壁近くの床面に多数の穴を検出したが、主柱穴と確認できない。炉址は半分切られていたが、中央や奥壁よりに位置するとと思われる。小型の石を円形に並べた簡素な石組炉であり、床面から底まで約10cmと浅い。

遺物は検出面から床面まで浅いので少なく、土器もほとんどが小片で、無文が多く隆帶の付くものも少量ある。石器は打製石斧・横刃型石器・敲打器などである。

時期は炉址の形態から中期後半の早い所と思われるが詳細は不明である。 (佐々木嘉和)



挿図36 KID 53号住居址

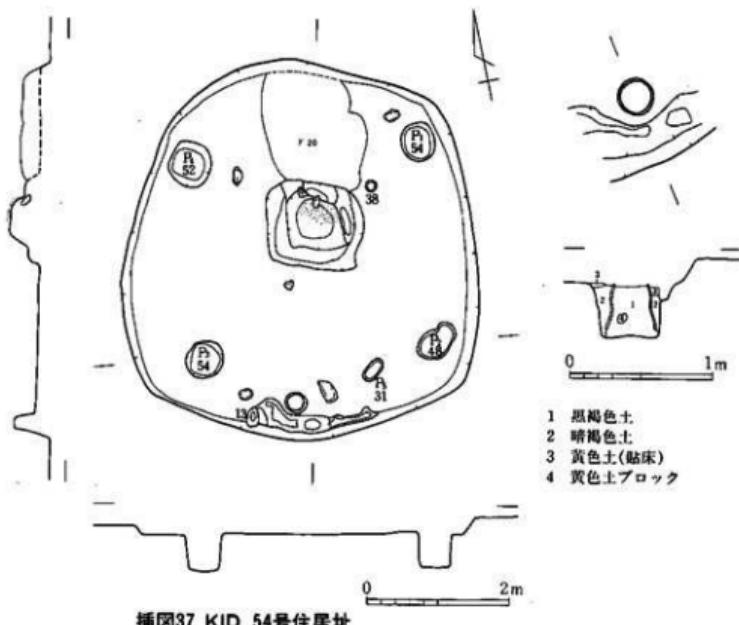
㊯ 53号住居址 (挿図36)

C1p11を中心とする61号住居址、掘立柱建物址14~16・23に切られて検出された。5.2×5.2mの不整隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN41°Eを示す。壁はやや緩やかに立ち上がり四隅壁際に主柱穴が掘り込まれている。各穴の形状、深さ等は類似する。炉石は抜き取られているが、抜き取り痕から炉が切り直されているとも考えられる。

遺物が多く出土している。深鉢形土器4個体は隆沈線による区画内に繩文・結節繩文が施されている。ほかに釣手土器の釣手部分がある。石器類は質量とも豊富で、打製石斧12点・磨製石斧・石鎌・石匙・横刃型石器・凹石・磨石・石皿・石製円板が出土している。

時期は出土遺物等から、本住居址は中期後半中頃に位置づけられる。

(桜井弘人・馬場保之)



◎ 54号住居址 (挿図37)

調査範囲内の西寄りC1s16付近に検出された。北側が土坑20と重複し、やや狭くなり突出して不整形であるが、基本的には隅円方形の竪穴住居址で、 $5.0 \times 5.2$ mを測る。各隅部に径50cm前後で深さ48~54cmを測る柱穴があり、柱間は $3.2 \times 2.8$ mである。炉址は中央のやや奥寄りにありほぼ方形を呈する。炉石はほとんど残存しないが、抜き取り痕が認められ、本来石組炉であった。また、炉址埋土中より湾曲した石が出土し、副炉材料と考えられその存在が推測される。炉底は北側部分の焼土化が顕著であった。床面は全体に堅い面を成し良好であり、一部ははり床されていた。埋ガメが南壁下に底部を欠く深鉢が逆位に納められていた。埋ガメ周囲の上面ははり床され堅い床面であったが、埋ガメ内部は軟らかく、内部の土はほぼ単一であり、本来は空洞であったと考えられる。

出土遺物には、埋ガメとして埋置されていた深鉢の他は、全器形を知れる土器はない。石器もあまり量は多くないが、打製石斧・磨石・横刃型石器・乳棒状磨石斧など各種ある。

出土遺物及び住居址形態等から、本住居址の時期は中期後半の中頃に位置づけられる。

(小林 正春)

◎ 55号住居址 (挿図38)

C2g6を中心とする、方形柱列址2の南側で確認された。南東壁の一部を検出したにとどまるが、ほぼ円形を呈すると考えられる。一部遺存する床面は堅く締っており、やや幅広な周溝を備えている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。小穴群のはば中央に位置する二段の構造をなす穴には焼土が含まれており、本住居址の炉址である可能性がある。

出土遺物は非常に少なく、深鉢形土器の破片・打製石斧1点などが出土している程度である。

時期は遺物等から中期後半前段階の竪穴住居址である。

(桜井弘人・馬場保之)



挿図38 KID 55号住居址

◎ 56号住居址 (挿図39)

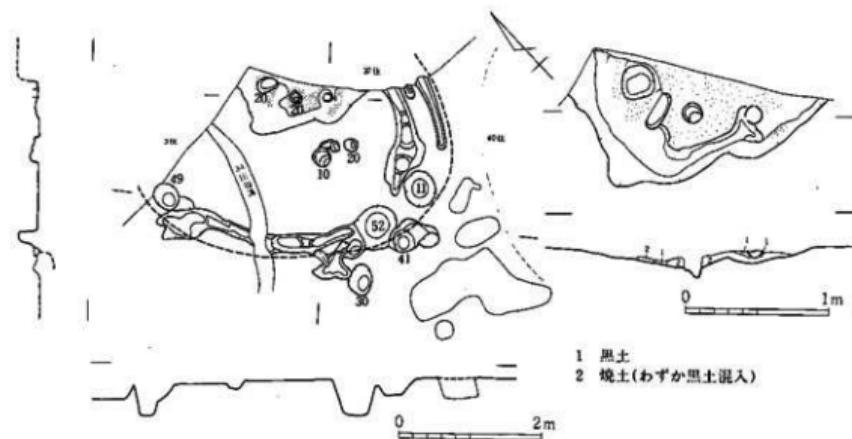
調査区中央からやや東より C2h16に検出した。3・34・37号住居址に切られ、わずか調査したのみである。推定  $4 \times 4$  mの小型の隅丸方形堅穴住居址と思われ、主軸方向は不明である。検出時に炉址を確認した。37号住居址の壁上に焼土の入る部分があり、その時点で床面はほとんどいたと思われる。主柱穴は床面から49・52cmを測る2本が該当すると思われ、推定4本の主柱穴であろう。炉址は地床炉と思われるが確認できない。炉址の中央からやや離れた位置に小型深鉢が正位で埋められていた。周溝はわずか確認したのみであるが、20~30cmと深く3本になる部分がある。

遺物は焼土中の深鉢の他はごく少量である。深鉢も口縁部の破片であり口唇部から半月形の隆帯を施し内を沈線で埋めている。石器は打製石斧・横刃型石器・石匙片・黒曜石剥片などである。

時期は中期後半中頃である。

◎ 57号住居址 (挿図33)

調査区西隅より D1r2に検出した。50号住居址を切りロームマウンドに切られ約半分調査した。推定直径5m前後の堅穴住居址であろう。推定主軸方向は N 12° Eである。壁高は50号住居址と同時に調査したので確認できなかった。床面は堅く良好であった。主柱穴の確認はできなかったが、50cm以上の深いものは良いと思われる。炉址は中央やや奥壁寄りに位置すると推測され、石組炉で石を抜かれた痕跡が残っていた。周溝は全周していたと思われ、深さは10~15cmである。



挿図39 KID 56号住居址

遺物はやや多いが50号住居址のものが混入している。土器で全体形の知れるものはない。波状口縁になり口頭部に半月形の隆帯を施し、内を沈線で埋めるものと、口頭部無文で頭部から胴上部に沈線文を施す2点の深鉢片がある。石器は磨製・打製石斧・横刃型石器・敲打器・石皿・凹石・石錘・黒曜石剥片などである。

時期は中期後半中頃である。

(佐々木嘉和)

④ 58号住居址 (挿図40)

48号住居址の南東

側、掘立柱建物址13

に切られ、C1x13

を中心で検出された。

本住居址の北半は削

平を受け、同時に暗

渠に切られて全体形

は不明であるが、ほ

ぼ円形を呈すると思

われる。主軸方向N

80.5°Wを示す。床

面は南側の一部が遺

存しており、土坑17

の上面には貼床がさ

れていた。やや緩や

かな壁と幅広な周溝

をもつ。主柱はP<sub>1</sub>~

P<sub>4</sub>の4本で、径45~

60cmの不整円形の掘

り方を持ち、底部レ

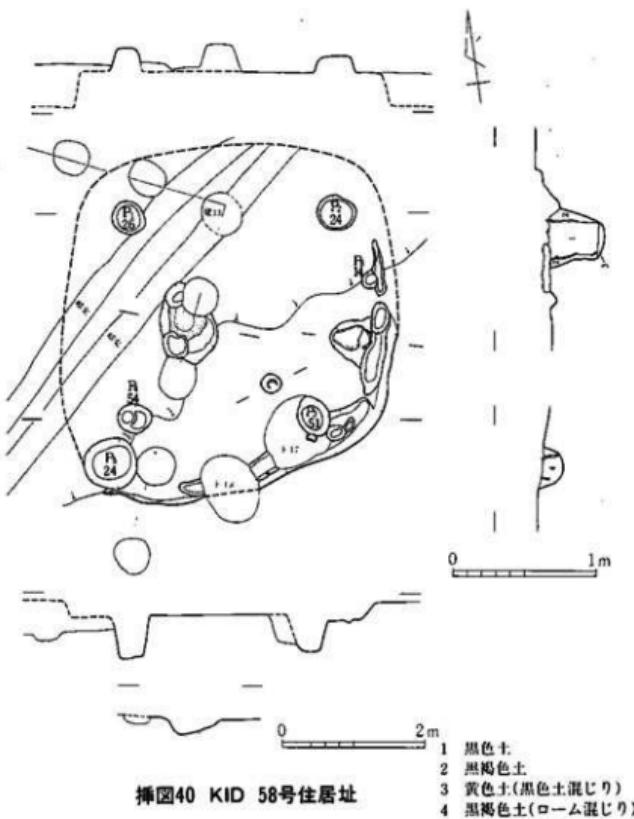
ベルも大体揃う。炉

址の両側縁には炉石

の抜き取り痕が認め

られた。東壁際に埋

甕が据えられていた。



挿図40 KID 58号住居址

遺物は少ない。埋壺・伏壺・手づくね土器のほか炉址から深鉢1個体が出土している程度である。手づくね土器は条線文が施される。石器には打製石斧のほかに硬砂岩製フレイクがあり、2基の埋壺のうち主軸上の埋壺の覆土中から出土した。

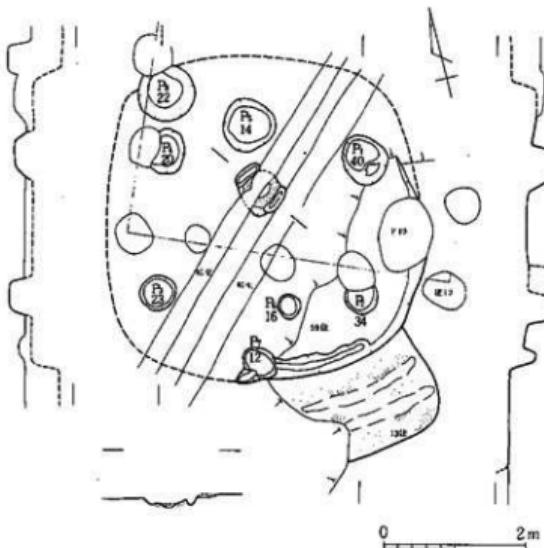
時期は出土遺物等から、中期後半中頃に比定される竪穴住居址である。

④ 59号住居址 (挿図41)

C1u14を中心として、48号住居址の南側58号住居址と接して検出された。58号住居址と同様暗渠に切られて南北を確認したのみであるが、プランは $4.3 \times 4.5\text{ m}$ のはば円形を呈すると思われる。主軸方向はN $14^\circ\text{ E}$ を示す。壁はやや緩やかに立ち上がり、床面・周溝のごく一部が遺存する。主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本で、径45～70cmの不整円形の掘り方である。炉址の両側縁に抜き取り痕があり、炉底はよく焼けていた。

土器は楕円区画文の配されるものや炉内から出土した垂下沈線に条線文の組み合うものがあるが、出土量は少なく、いずれも小破片で器面が著しく荒れている。また埋壺内から土器片が出土している。

所属時期の詳細は不明であるが、中期後半に位置づけられる。



挿図41 KID 13号・59号住居址

◎ 60号住居址 (挿図42)

C1n8を中心いて、51号住居址の西側、掘立柱建物址25に切られて検出された。本住居址の西南半は未調査区と水田造成の際削平された部分にあたり、全体形は不明であるが不整円形を呈すると思われる。主軸方向はN6°Wである。壁は検出面から3~23cmの深さを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴は2本が確認され、おそらく4本柱を構成すると思われる。炉底はよく焼けており、厚い焼土が認められる。

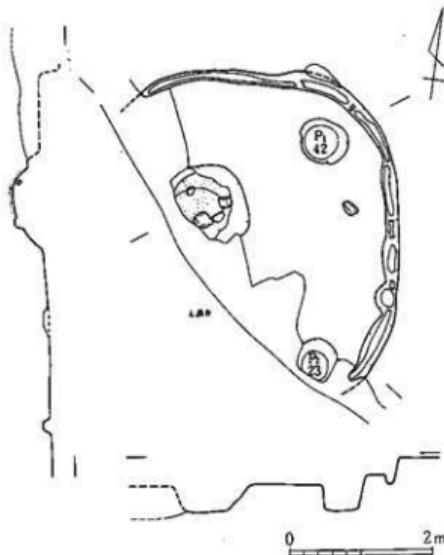
出土遺物は少なく、垂下沈線・縄文の施文された土器や底部破片のはか、炉内から渦巻文や梢円区画文が施された破片が出土した程度である。いずれも小破片で器面が荒れている。

時期は出土遺物等から中期後半中頃に比定される。

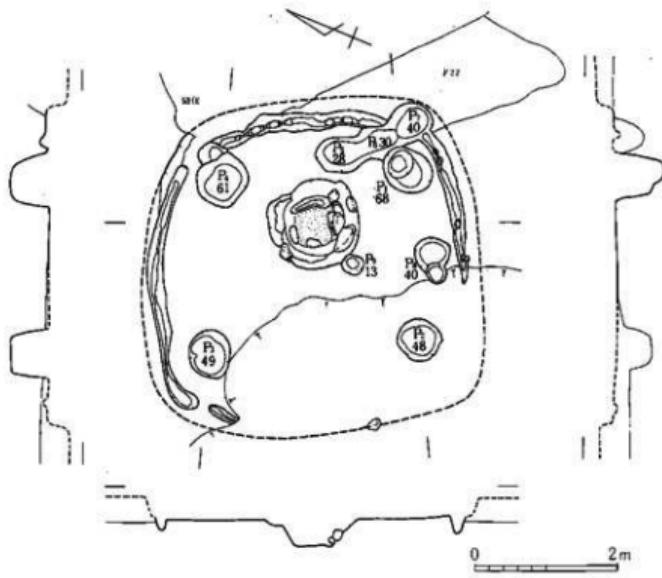
◎ 61号住居址 (挿図43)

C1n12を中心いて53号住居址と一部重複して検出された。本住居址の西側部分は削平をうけている。推定4.6×4.7m、主軸N66°Eの隅丸方形を呈すると思われる竪穴住居址である。深さ2~13cmの緩やかに立ち上がった壁をもち、壁下にはやや深い周溝が認められた。主柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4本で、いずれも径60~70cmの不整円形である。

遺物は非常に少なく所属時期の判断は難しいが、中期後半に比定される。



挿図42 KID 60号住居址



挿図43 KID 61号住居址

④ 62号住居址 (挿図44)

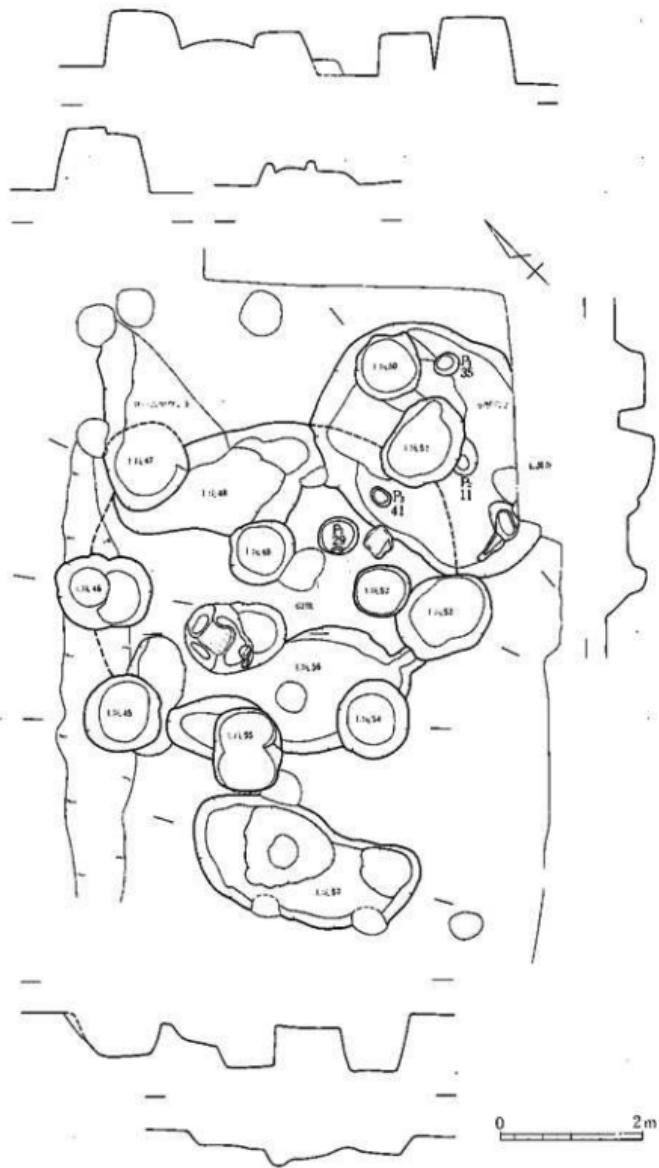
C1s 6を中心に、小堅穴 2 の西側に炉址と床面の一部のみを確認した。推定で規模  $5.1 \times 4.6$  m の不整橢円形を呈すると思われる堅穴住居址で、主軸方向は N87°W である。炉址の東側に床面の一部が残っており、この周間に焼土がみられた。炉石は抜き取られているが、抜き取り痕から方形に組まれていたと考えられる。炉址の底部はよく焼けていた。炉址周辺に検出された土坑のうち、何基かは本住居址に伴なう可能性もある。

遺物は少ない。土器は渦巻文や、隆帶によるH状文などの区画文と綾杉文・縄文・結節繩文が組み合って施文された深鉢などが出土している。石器には打製石斧・石刀・不定形石器などがある。

時期は出土遺物等から中期後半中頃に属する。

(桜井弘人・馬場保之)

插图44 K1D 62号住居址, 小壁穴2, 土坑45·46·47·48·49·50·51·52·53·54·55·56·57



⑤ 63号住居址 (付図1)

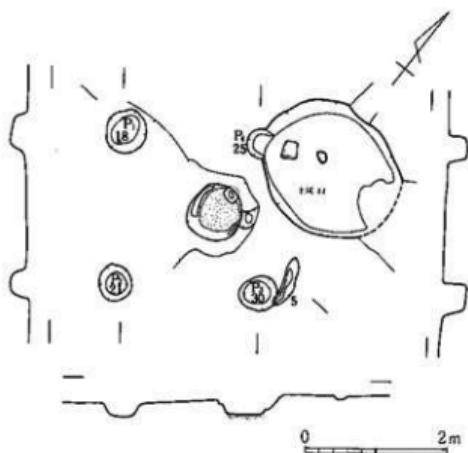
調査範囲の東端D2k8に検出した。復原住居址の建てられる用地にほとんどの部分がかかっており、掘り下げなかった。南西壁の一部を検出し、確認した最大長は2.7mを測る。円形の竪穴住居址と思われるが詳細はすべて不明である。

時期はわずかに出土した土器から中期と考えられるが、小片で出土量も少ないため詳細は不明である。

⑥ 64号住居址 (挿図45)

土坑44の南側C2c17を中心とする住居址である。床面までも削平されている。精査したが周溝、埋甕の有無などは不明で、炉址と柱穴のみを確認した。平面形は不明である。主柱穴の位置から主軸はN55°Eを示し、規模は一辺4m程を測る竪穴住居址が想定される。4本主柱穴で北の1本は土坑44と切り合って確認された。炉址は、石を抜いた痕跡が認められ石組炉であったと考えられる。確認した掘り方は円形であるが、上面が削られているため本来の姿は不明である。底部は平坦で焼土が良好に残っていた。

遺物の出土はきわめて少ない。  
土器は無文の底部、沈線文と縄文の組み合わせによる施文をされた破片、石器は横刃型石器・  
黒曜石剥片が各1点ずつである。  
時期は中期後半と判断される  
が実証に乏しい。



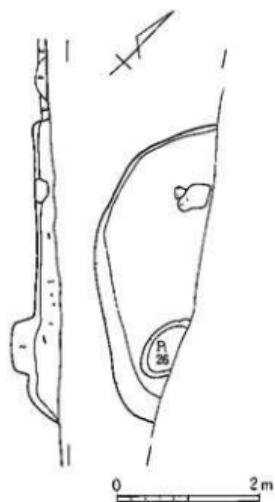
挿図45 KID 64号住居址、土坑44

④ 66号住居址 (挿図46)

4号住居址の北側、C2p19を中心に検出された。北東側のほとんどの部分は未調査部分にかかり、全体の1/3程度を調査した住居址である。平面形は円形ないし、隅丸方形の竪穴住居址である。規模は一辺4.5m程と考えられるが、主軸は不明である。覆土は暗褐色土のほぼ一層である。壁は南側で44cm、北側で24cmを測る。壁面は南側が緩やかなのに対し北側ではほぼ垂直面を成す。床面は凹凸があり、軟かいものである。周溝、柱穴等の施設は確認できなかった。

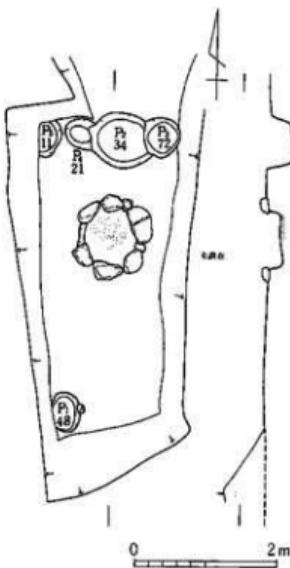
遺物の出土量は少ない。器形の知れるものは地文の縄文を施し、波状の沈線と縁位の波状文の組み合わせによる鉢と無文の底部がある。石器には小形の打製石斧・横刃型石器・石錐・安山岩の河原石などがある。

時代は中期中頃に位置付けられる。



- 1 暗褐色土
- 2 褐色土(黄色粘質土混じり)
- 3 黄褐色土
- 4 噴褐色土(ビット状土)

挿図46 KID 66号住居址



挿図47 KID 67号住居址

④ 67号住居址 (挿図4?)

南東のトレンチ調査でC2e2に炉址が検出された。時間等の制約から炉址の周辺を部分的に広げただけの調査に止どった。壁は検出されず主柱穴も確認できなかった。平面形、規模、主軸方向等はすべて不明である。確認した床面は平坦で良好なものである。炉址は直径15~40cm程の自然石を使った石囲いの炉で、20cm程掘り凹められている。底部は平坦で中央部分に焼土が厚く認められた。

遺物は少なく土器は破片のみで器形の知れるものはない。縄文を地文とするもので刺突文が施されている破片もある。石器には打製石斧・横刃型石器・敲打器がある。

時期は中期中頃と思われるが断定できない。

⑤ 68号・69号住居址 (挿図99)

方形柱列址3の確認された西の調査区の遺構検出中に確認された。B2f9に炉址が2個並んで検出され、68号住居址と69号住居址とした。炉址の深さは68号住居址が12cm、69号住居址が3cm程を測る。炉址の底部のみが確認されたもので、本来の炉址の形態等は不明である。周辺を精査し主柱穴の可能性のある穴を複数検出したが、確実に住居址に伴うと考えられる施設は把握できず断定できなかった。又2軒の住居址としたが炉址と炉址の間隔は60cmで1軒の住居址の炉址造り替えの可能性もある。

68号・69号住居址に直接伴う遺物はない。

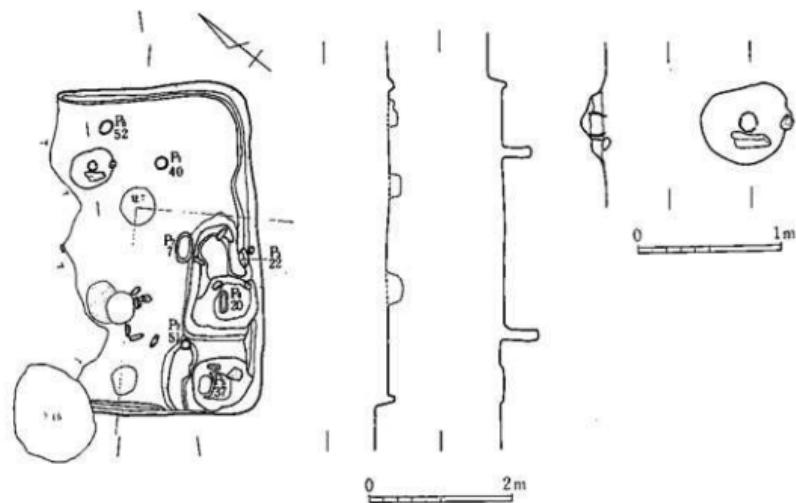
時代は中期の竪穴住居址と考えられるが状況判断のみで、詳細な時期は不明である。

(佐合 英治)

(3) 弔生時代後期

① 6号住居址 (挿図48)

方形柱列址1の東側、C2c12付近で掘立柱建物址7に切られて確認された。南北4.5mを測る隅丸方形の竪穴住居址で主軸方向はN50°Eを示す。床面は堅く繋っており、壁はほぼ垂直にたち上がる。主柱穴は暗渠に切られ2本検出したにとどまるが、径12~15cmの円形の掘り方で黒色土が入っていた。炉址は炉縁石を伴ない、掘り込み内には焼土・炭がかなり認められ、埋設土器は口縁部および底部が損壊している。東壁のやや南寄りには入口施設があり、内部に梯子ピット底



挿図48 KID 6号住居址

部と思われる凹みがある。入口部土手は高さ5cm、幅10~20cmでしっかりしており、コの字状を呈する。炭化材・焼土が主軸上に集中し、また床面も焼けて堅い赤色の面となっており、火事の住居址である。

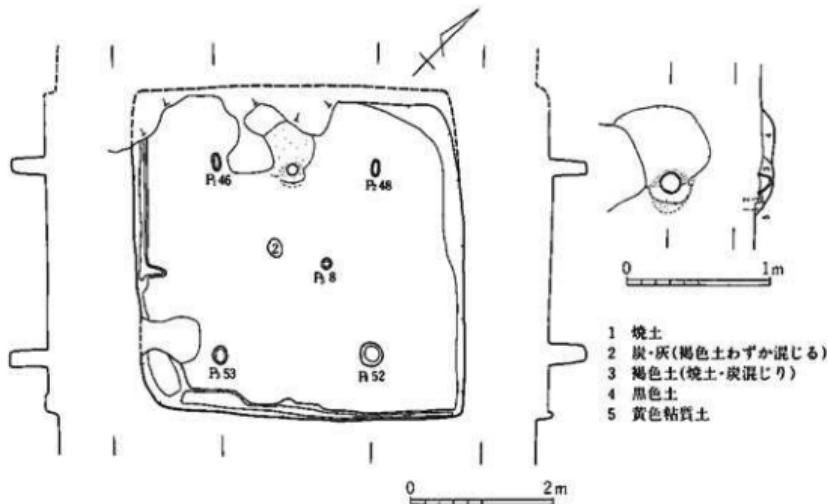
出土遺物は少ない。中島式の壺・壺のほか、西隅覆土上層から手づくね土器、南隅の穴から土師器壊などが出土地している。なお北隅の覆土中には壺が流れ込んでいた。石器組成は黒曜石製石鎌・不定形石器のほか硬砂岩製の不定形石器・剥片などである。他に床面および土手上に密着して編物石状の自然石が出土している。

時期は出土遺物等から後期後半に比定される。

(桜井弘人・馬場保之)

## ② 9号住居址 (挿図49)

調査範囲内中央部のやや西寄りのD1a1付近に検出された4.2×4.3mを測る方形の竪穴住居址である。北西側は擾乱を受け不明であるが、他の壁高は10数cmを測り、南東、南西壁下には周溝を検出した。南隅部に深さ14~19cmの不整形な穴があり、入口部施設の存在が考えられるが、掘立柱建物址2の柱掘方に切られ全体形は不明である。柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>であり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は幅10cm長さ20cmの梢円形を呈し、割材使用の柱と考えられる。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は径20~30cmの円形であるが、



挿図49 KID 9号住居址

$P_1 \cdot P_2$ と同様に割材使用の柱であったと考えられる掘方を示すもので、 $P_1 \cdot P_2$ についても、掘方は $P_4$ と共通する。炉址は、攪乱のため全体形不明であるが $P_1 \cdot P_2$ 間に径80cm程の円形状に焼土が入る凹部があり、その内部に壺洞部以下を埋めており、土器埋設炉である。遺構検出作業時に、この付近より $5 \times 10 \times 20$ cmの緑色片岩の礫が出土しており、本炉址に関連する炉縁石であった可能性が強い。炉址内部には、焼土粒・炭化物が混入し、炉底は焼土化が著しく、炉址前側は床面まで焼土化していた。

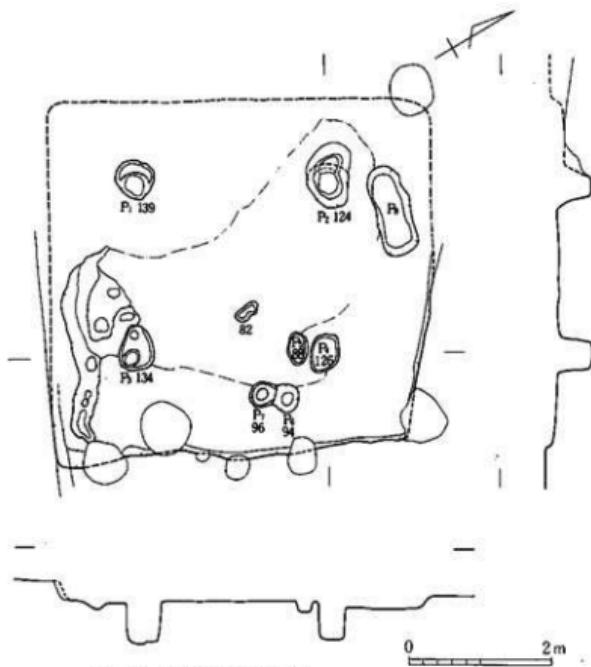
出土遺物は炉に埋設された壺のほかは、壺破片若干と抉入打製石庖丁の半欠品、紡垂形に両端を削った緑色片岩製の工具がある。

(小林 正春)

#### ⑩ 14号住居址 (挿図62)

調査区北西境中央D2c 9に検出し、8号住居址を切り7号住居址に切られる。 $(5) \times 5$ mの方形堅穴住居址であり、主軸はN44.2°Wを測る。壁高は残存部で30cm残る。床面は主柱穴より内側が堅く良好であったが、壁下は軟らかで凹凸が著しい。主柱穴は4本で比較的深い。本址に伴う諸施設は、7号住居址によりほとんど削平されており、床面の一部と柱穴を確認したのみである。また、床面の一部に焼土の散布した箇所があり、炉址があったとも考えられる。

出土遺物はほとんど無く、弥生時代の小破片があつたのみである。  
住居址形態等から見て、後期終末期の住居址である。  
(佐々木嘉和)



挿図50 KID 14号住居址

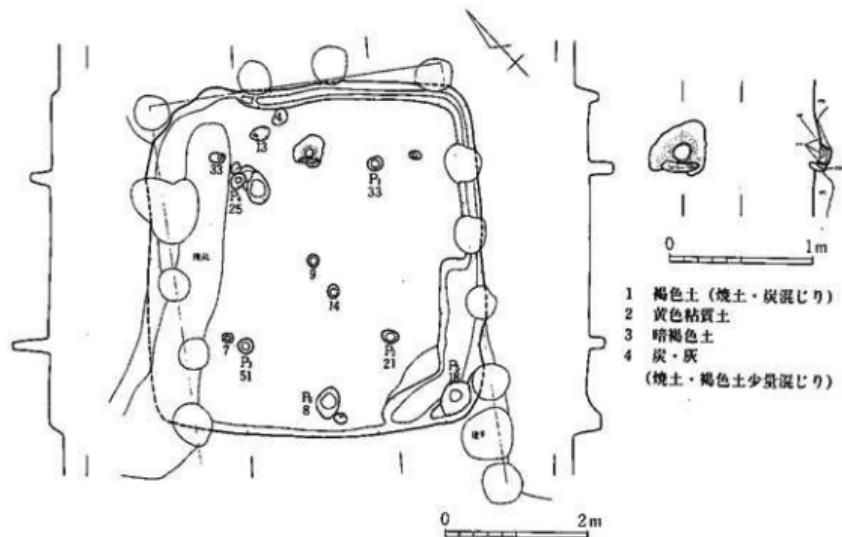
#### ④ 18号住居址 (挿図50)

調査区西隅よりD1s5に検出し、掘立柱建物址9に切られ、27・42号住居址を切る。4.8×4.5mの方形堅穴住居址である。主軸はN38.5°Eを測る。壁高は10~20cmで、床面は堅く良好であった。主柱穴は4本でありやや浅い。南西壁下中央の穴は入り口施設であろう。炉址は床中央側に炉縁石を持つ埋壠炉で、壠底部には穿孔があった。周溝は2方向に確認した。北西側周溝内に高坏片・壠底部片・壠・炭など入っており、開いた周溝であったと推測できる。

遺物は該期としては多い方であり壠・台付壠・壠・高坏で、石器は磨製・打製石庖丁・有肩刃状石斧などである。壠片には波状文がありやや大形である。炉址に使われていたものは脚部が球形で頸部の締る器形である。高坏のはば完形品は脚部無穴でハの字にひらく、壠部と脚部をもっている。石庖丁は3個共に磨滅しておりロー状光沢を認めるものもある。有肩刃状石斧は刃部表裏にロー状光沢を認めた。

時期は後期後半である。

(佐々木嘉和)



挿図51 KID 18号住居址

⑤ 65号住居址 (挿図51)

調査範囲内北西寄りのC2g24付近に検出された住居址であるが、攪乱及び削平のため床面はまったく残らず全体形は不明である。柱穴等の位置から4.2m四方程度の方形竪穴住居址と考えられる。主柱穴のP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が2.1mの間隔で方形に並び、各柱穴はしっかりと掘られ、壁面及び底面はともに住居址の床面状に堅くしまっていた。炉址は不明であるが、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間にわずかではあるが焼土粒が認められ、この位置に炉址のあった可能性が強い。P<sub>4</sub>の南東側の壁下と考えられる位置に45×120cmの範囲で周囲より5cm程凹み、その内部に更に深くなる穴を持つ部分があり、入口部施設であったと考えられる。

出土遺物はほとんどなく、入口部施設と考えられる穴より弥生時代後期土器片、P<sub>1</sub>内部より台付臺台部片が出土したのみであるが、形態・規模等も含め、本址は6・9・14・18号住居址と同時期の後期終末期の住居址と考えられる。

(小林 正春)

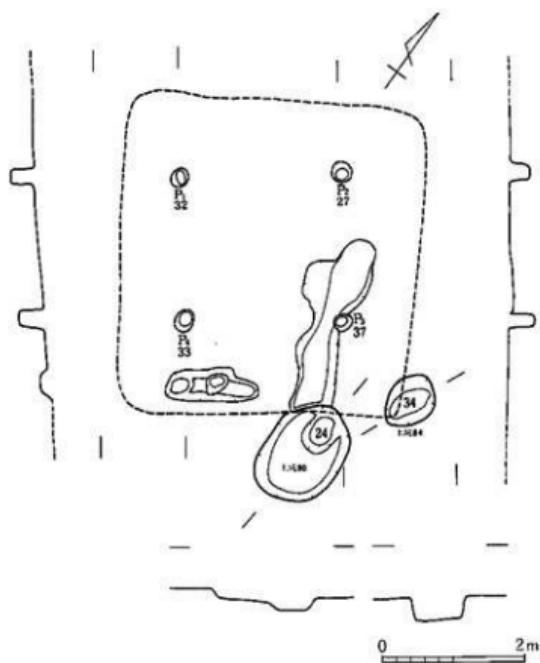


插图52 KID 65号住居址, 土坑80-84

#### (4) 古墳時代後期

##### ① 1号住居址 (挿図52)

本住居址は遺跡の北端に於て、明褐色土を掘り込み炭化物を多く含む黒色土の落込む遺構として検出された。住居址の東端を南北に走向する1号溝により切られ、北壁に接して5号土坑が西壁にて縄文時代中期の29号住居址を、また南壁側で同じく32号住居址が本住居址により切られている。住居址の規模は東西6.0m、南北6.2mで、北壁中央部に粘土カマドが設けられ、主柱穴4本をもつ隅丸方形窓穴式住居址である。その主軸方向はN2°Wではほぼ真北を示す。壁は東壁の一部が1号溝により破壊されているものの他は良好であり、壁高は東壁10cm、西壁15cm、南壁5cm、北壁25cmを測る。床面は硬く敲きしめられ、壁直下を幅10~15cm、深さ5~10cmの周溝が全周する。南東隅の南壁より主柱穴P<sub>4</sub>に向って細い溝がみられ、その形状、規模共に周溝と同類であり、間仕切周溝と想定される。主柱穴P<sub>2</sub>に接した東側中央部に、炭化材、炭化物及び焼土が多く散在し、火災にあったものと思われる。主柱穴の深さはP<sub>1</sub>71cm、P<sub>2</sub>66cm、P<sub>3</sub>75cm、P<sub>4</sub>70cmを測る。カマドの西側に1.3×0.85m、深さ43cmの穴があり、灰落し穴と比定される。中から炭化物、灰、土師器壺破片などが出土している。カマドの東側、主柱穴のP<sub>3</sub>の北に接したP<sub>6</sub>は深さ55cmであるが性格は不明である。カマドはつぶれた形で検出されたが、両袖の部分は粘土で構築されており、石組及び石芯の検出がみられず、いわゆる粘土カマドである。片袖部の幅約30cm、長さ70cmで、焼成炉部は50×80cmを測り、土師器壺破片と共に焼土や炭化物がみられた。

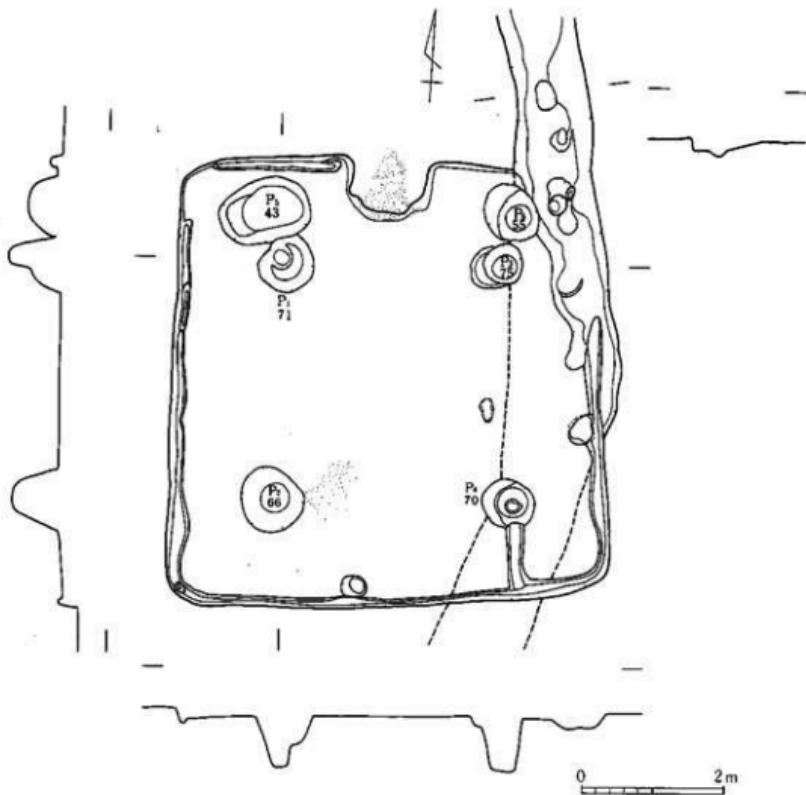
遺物は粘土カマドの周辺一帯と東南隅にみられ、土師器、須恵器、石器が出土地した。變形土器7個体分、高杯の内黒の坏部2個体、内黒の鉢1個体及び内黒の杯8個体分がある。また、須恵器は小片ばかりであるが器形からみて瓶片3点及びはそうの口縁部片2点が出土している。石器は砂岩製の砥石1点、編物石に比定されるもの2点がある。

時期は出土した土器から後期後半に比定される。

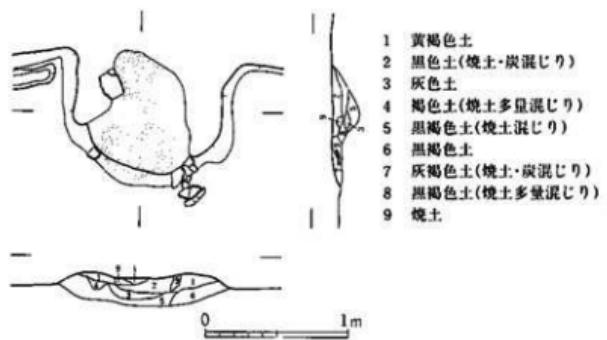
(岡田 正彦)

##### ② 2号住居址 (挿図53)

調査区中央からやや北よりC2k22に検出し、30・32号住居址を切り溝1に切られる。(5.8) × 6mの方形窓穴住居址であり、主軸はN18°Wを測る。壁高は10~25cmを測るが、北壁は水田造成で削平されている。火事の住居址であり、炭化材が入っていた。カマドと周辺の床は削平されているが、残った部分は堅く良好であった。主柱穴は4本で掘り方は大きい。南壁下中央の穴は入り口施設であろう。カマドは無くなっていたが、北壁中央部の床が深さ5cmの所まで焼けており、位置は推測できた。周溝は3方向の壁下に検出した。該期住居址と同様に傾斜面に対して、



- 1 黄褐色土
- 2 黒色土(焼土・炭混じり)
- 3 灰色土
- 4 褐色土(焼土多量混じり)
- 5 黑褐色土(焼土混じり)
- 6 黑褐色土
- 7 灰褐色土(焼土・炭混じり)
- 8 黑褐色土(焼土多量混じり)
- 9 焼土

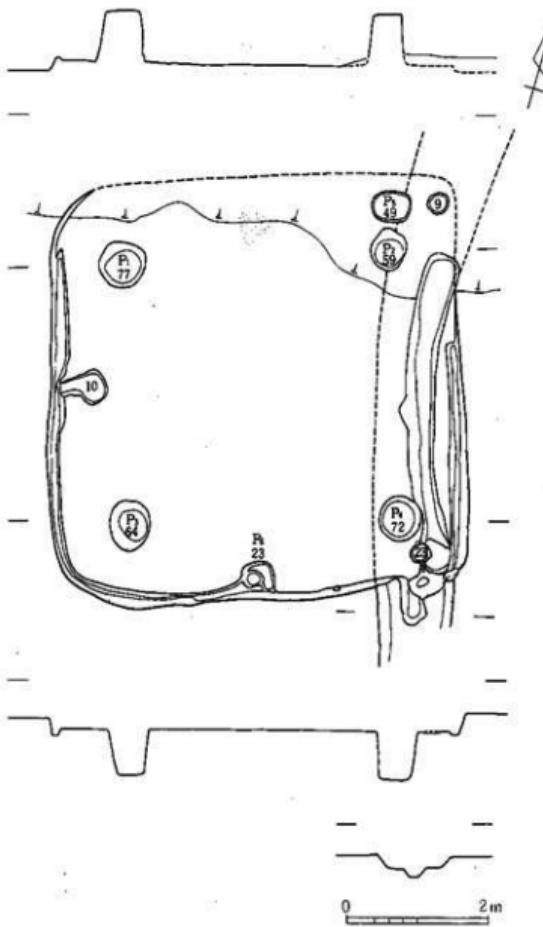


插図53 KID 1号住居址, 溝址 1

入り口部が高い方向にあり、何らかの規制が類推できよう。

遺物の出土量は少ない。カマド位置の焼土上部から土師器内黒坏片が出ている。他に土師器甕・須恵器甕・短頸壺口縁・高坏・蓋などの破片が出土している。須恵器は甕片をのぞいて、胎土が良く白灰色を呈している。石器は砥石・編物石であり、混入遺物の粗製石匙・石鍬がある。時期は後期後半である。

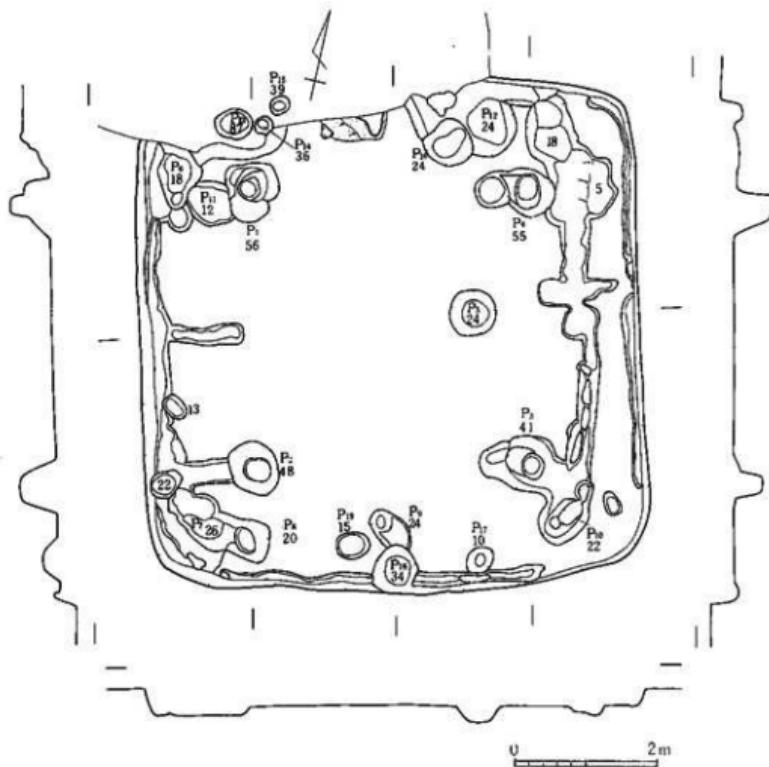
(佐々木嘉和)



挿図54 KID 2号住居址、溝址 1

③ 3号住居址 (挿図54)

調査範囲の西側、C2 i18を中心に検出した。北壁を2号住居址に切られ、東側上面を溝址1に切られている。北東隅が35号住居址を切り、南壁が34・37・56号住居址を切っている。ほぼ全体が調査できた住居址である。規模は7×7mを測り、隅丸正方形の竪穴住居址である。周溝、主柱穴の状況から東へ70cm程拡張しているとも考えられる。周溝は2号住居址に切られる北壁側は不明となるが南隅を除き壁直下を全周していたと考えられる。深さは2~15cmを測る。また東側の2本の主柱穴を繋ぐ様な状態で溝が検出された。幅は広いが周溝と考えられる。深さは5~22cmを測る。さらに西壁からP<sub>2</sub>までの間と周溝の中央、幅広の周溝から外側を除き、きわめて堅く



挿図55 KID 3号住居址

良好である。主柱穴は4本であるが、北東隅のP<sub>4</sub>は住居址内側に貼り床された同様の穴を伴う。ほかの3本も掘方上部が歪んで大きく広がっており、柱を建て替えていたものと考えられる。ほかに本住居址に伴なうと判断される施設にP<sub>5</sub>とP<sub>13</sub>がある。P<sub>5</sub>からは壺破片が、P<sub>13</sub>からは壺の完形品が出土している。P<sub>13</sub>は2号住居址に切られる部分であるが貼り床されており本址の穴と判断した。カマドは北壁の中央部に存在したと考えられる。2号住居址に切られほとんど壊されている。焼土は広範囲に認められたが、黄色粘土の高まりをわずかに把握した。粘土カマドであったと考えられる。土器はP<sub>5</sub>、P<sub>13</sub>のはかはカマド周辺の床面上に集中出土した。

遺物には土師壺11点・壺4点、須恵器壺・壺・蓋壺・はそうがあり須恵器は皆破片である。壺のうち器形の知れるものは7点で長胴のものと胴のあまり長くない2者があり後者が主体となる。壺は内面黒色処理されたものが3点ありうち2点は底部が平らな皿状のものである。石器は編み物石5点と半磨製石斧1点がまとめて出土し後者は再利用されていたものと思われる。ほかに縄文時代の混入品が数点ある。

時期は後期後半である。

(佐合 英治)

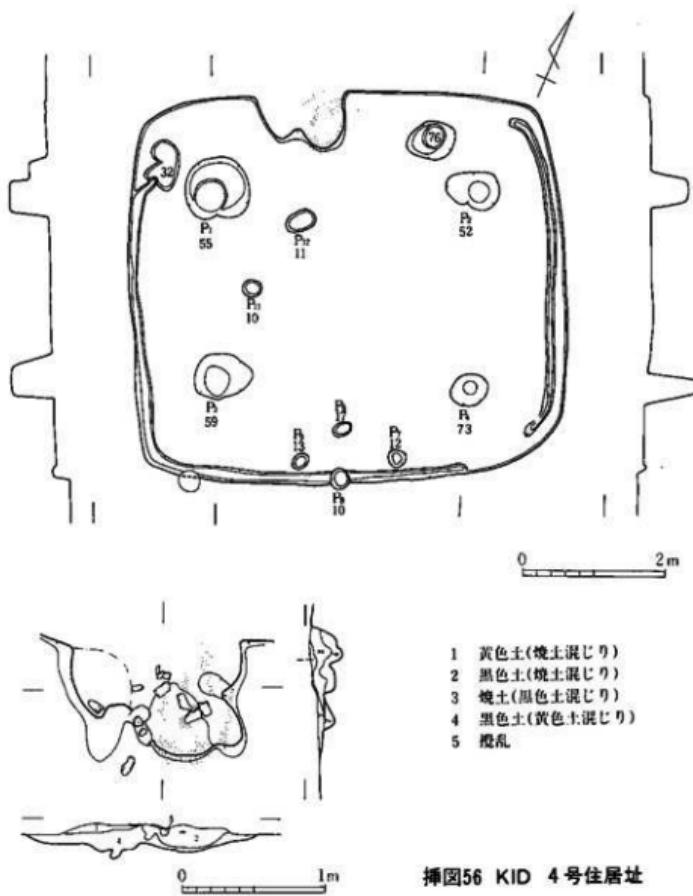
#### ④ 4号住居址 (挿図55)

調査区北東境中央C2r17に検出し、35号住居址を切る。5.4×6.1mのやや長方形の竪穴住居址であり、主軸はN22°Wを測る。壁高は南東側で20cm、北西側は削平されている。火事の住居址であり、堅く良好な床面上に黄色土混り黒色土層が5~2cmのり、その上に炭の混じる層がのっていた。主柱穴は4本であり、P<sub>3</sub>の掘り方中には、炭層が10~5cm低い所に検出された。カマド右の穴には、底部に炭と焼土が入っており灰溜穴と思われる。カマドは削平されているが焼土、壺片など出土し位置は確認できた。該期の他住居址と同じく、傾斜面の低い方向北西壁やや西よりに設けられている。周溝は3方向の壁下に検出した。

遺物の出土量は少ない。土器はほとんど壺の破片で粗製である。壺片の内面は箆磨きされている。カマドの下から混入品と思われる横刃型石器が出ている。

時期は後期後半である。

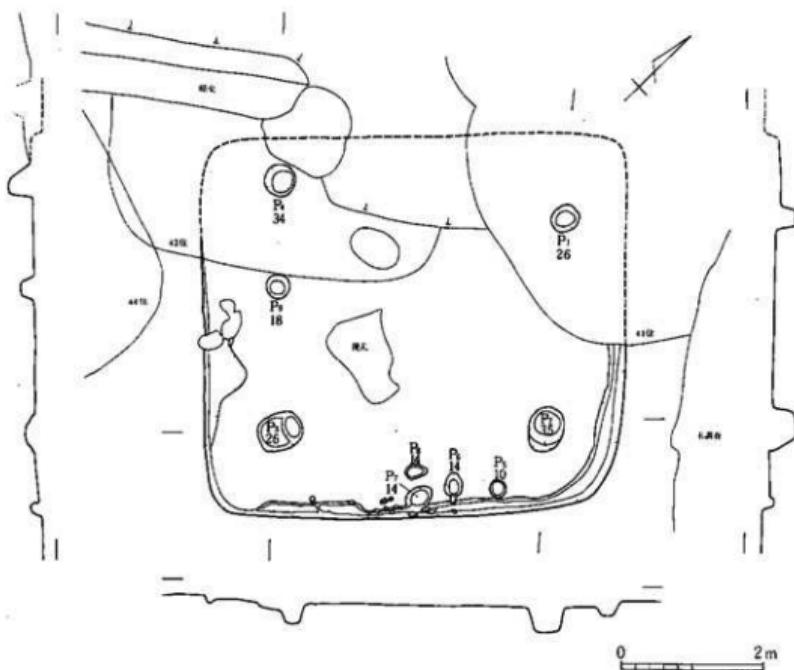
(佐々木嘉和)



挿図56 KID 4号住居址

⑤ 5号住居址 (挿図56)

縄文時代中期の住居址41・43号住居址と重複し、C2±11付近で確認された。重複のため西壁は検出できなかったが、規模は推定  $5.8 \times 5.2$  m の隅丸方形を呈する竪穴住居址である。主軸方向は N  $47^{\circ}W$  を示す。中央の一部および西壁中央付近は削平をうけて床面を検出できなかった。壁は検出面から 5~13 cm の深さを測り、やや緩やかに立ち上がり、東・北壁下に周溝の一部を検出



挿図57 KID 5号住居址

した。主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本で、径40～60cmの円形ないし梢円形の掘り方である。P<sub>9</sub>上面には貼床が施され、また南壁際には溝跡1の基底部がおよんんでいる。

出土遺物は少ないが、土師器壊・内黒壊・甕、須恵器壺、砥石などがある。ほかに東壁下の周溝上に織物石が出土している。

出土遺物等から後期後半に属する住居址である。

(桜井弘人・馬場保之)

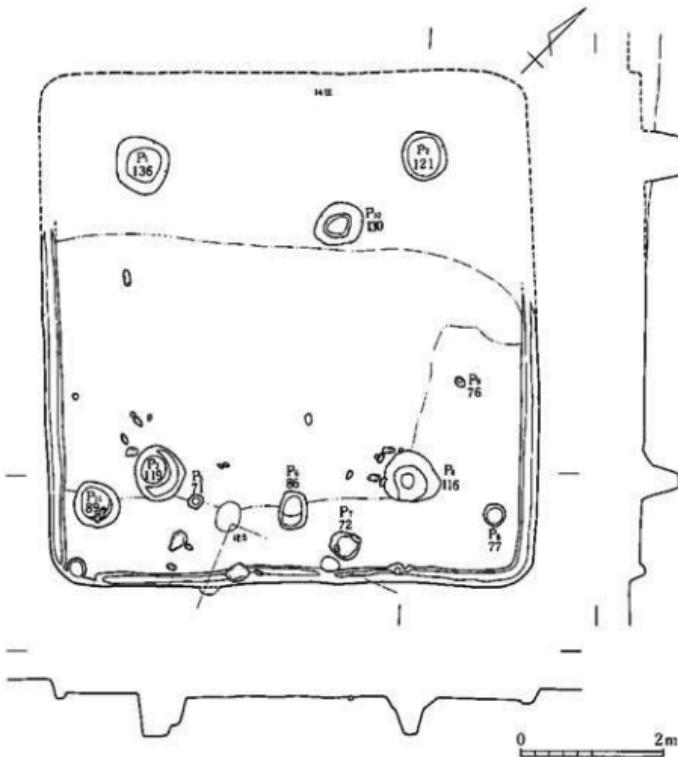
#### ⑥ 7号住居址 (挿図57)

調査区北西境中央D2c3に検出した。8・14号住居址を切り、掘立柱建物址5に切られ水田造成時の削平にあう。(7.2)×6.7mの方形堅穴住居址でやや大きく主軸はN47.2°Wを測る。壁高は残存部で20cmあり、床は14号住居址を切り貼り床をしている。床面は比較的堅いが凹凸が著し

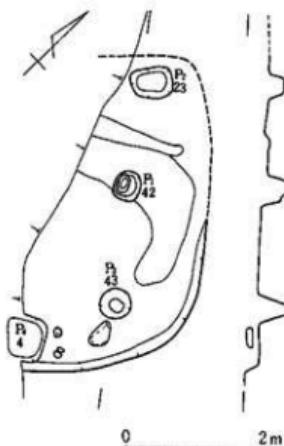
い。主柱穴は4本で掘り方は大きい。カマドは該期他住居址と同じく傾斜面下方に設けられていると推測される。周溝は壁下に掘られ整っている。

遺物の出土量は少ない。土師器壺・壺・高壺・須恵器高壺・蓋壺の身などが出ている。須恵器高壺は壺部のみと脚上部がわずか残っていただけであるが、壺部に2段の棱をもちシャープに整形されており、脚部は3方に透しをもつ。鉄鑓が1点あるが、平根の無茎である。紡錘車は2点あり1点は土製ではぼ完形、もう1点は石製で残っている。石器は磁石と礫物石である。礫物石は床面に多数散布していた。

時期は後期後半である。



挿図58 KID 7号住居址



挿図59 KID 10号住居址

#### ⑦ 10号住居址 (挿図58)

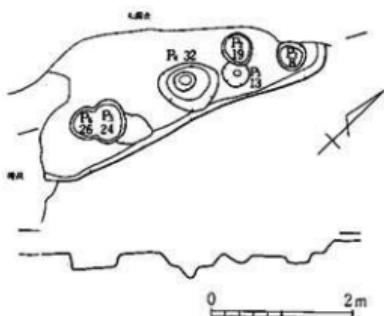
調査区西隅よりD1q 4に検出した。42号住居址を切り水田造成に壊されわずか調査しただけである。推定4.5m前後の隅丸方形竪穴住居址で、主軸方向は不明である。床面は削平されていると思われるが比較的良好であった。主柱穴は東北壁ぎわの3本が良いと思われる。

遺物の出土量は少ない。甕は半個体あり器壁が厚く粗製であり時期の決め手に欠ける。石器は砥石・編物石で、砥石は砂岩の自然石であり使用痕が著しく凹み刃物痕が残っている。小さな鉄製品もあるが、茎か釘であろう。

時期は古墳時代後期と思われるが、確証はなく、弥生時代の可能性も捨て切れない。

#### ⑧ 11号住居址 (挿図59)

調査区北西側の試掘トレンチ D2c 9に検出し、拡張調査したが、井水設置の攪乱のためわずか調査できたのみである。方形竪穴住居址であろうが、規模・主軸方向は不明である。火事の住居址で検出時覆土中に焼土が混入していた。床面は堅く穴の回りの床が良く焼け赤褐色を呈していた。穴はすべて浅く主柱穴と確認できるものはない。



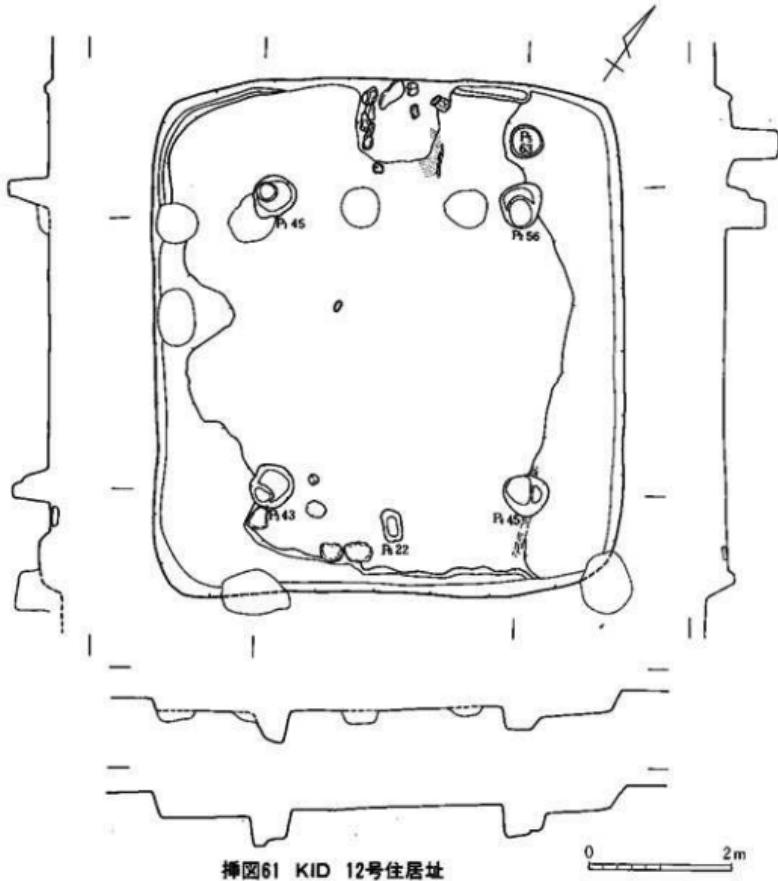
挿図60 KID 11号住居址

調査範囲は狭いが遺物の出土量は比較的多い。土師器甕・壺・高环があり、甕は胴部一個体で半分位あるが復元は不可能であった。壺・高环の壺部が6個体あるがほとんど黒色処理され、底部近くに緩い棱をもつものもある。

時期は後期後半である。

⑤ 12号住居址 (挿図60・61)

調査区南西側境中央付近C1q18を中心に検出した。52号住居址を切り掘立柱建物址12に切られる  $7.1 \times 6.5$  m のやや長方形窪穴住居址である。主軸は N34°W。壁高は 30~20 cm を測り比較的高い。火事の住居址であり炭化材が散布していた。床面の中央部は堅く良好であるが、壁下はやや深く下げられ、はり床がなされておりその部分はやや軟らかであった。主柱穴は 4 本で床面から約 50 cm と深く底部に柱痕らしい凹みがみられた。カマドは奥壁ほぼ中央に位置し該期の他の住居址と同じく、傾斜面の下方に設置される。石芯粘土カマドで天井石と推測される石もあり、周囲に



は遺物も多く右袖の壁ぎわには、土師器壺が原形を保っていた。南東壁下床面に偏平な石2個が並んでおり入り口施設に関係すると思われる。

遺物の出土量は比較的多く、土師器壺・坏であり壺はほぼ完形3点と、破片が4個体ある。ほぼ完形2点は長胴であり、カマド右袖ぎわにあったものは下ぶくれである。胴部が球形で頸部が直に立ちあがる破片もある。坏は2点で、1点は黒色であり平底で湾曲して開いている。石器は編物石と混入の石鐵である。

時期は後期後半である。

(佐々木嘉和)

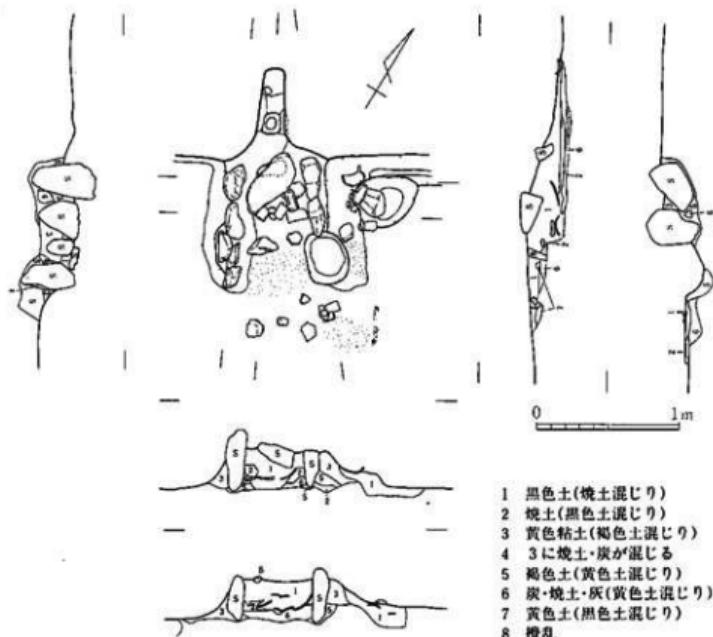
㊯ 13号住居址 (挿図41)

C1t13付近で59号住居址に重複して確認された。隅丸方形を呈すると思われるが、南東隅のぐく一部を検出したにとどまり、その他一切不明である。

本址は火事の住居で、床面には炭の入った黒色の部分が縞状にみられ、よく焼けている。

出土遺物から後期後半に属する住居址である。

(桜井弘人・馬場保之)



挿図62 KID 12号住居址カマド

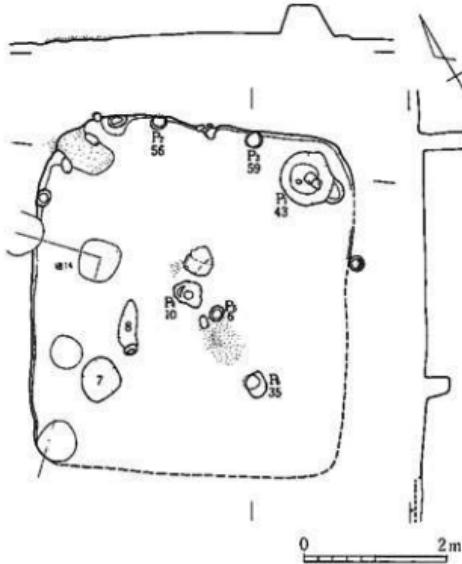
⑩ 15号住居址 (挿図63)

調査範囲内南東側のC1p1付近に検出された。上部は削平され全体の残存状態は悪いが、4.4×4.8mを測るほぼ方形の竪穴である。東側で壁高10数cmを測るが、西側ではほとんど残存しない。床面全体に焼土・炭化材が分布し火事の遺構である。南隅部の床面から壁にかけて焼土が厚く検出され、その焼土をはさむように石を抜き取ったともみられる穴がありカマドの可能性が高い。一般的な住居址にみられるような上屨の構造を推測すべき柱穴等は不明であり、以下のような特殊な点がいくつかみられる。

南北壁のはば中央に壁ぎわ及び壁上に焼けた跡が点在し、その西側に1.4mの間隔を持ち、径20cm、深さ56・59cmを測るP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>があり、何らかの上部施設があったと考えられる。P<sub>1</sub>は径約80cm、深さ40余cmを測るほぼ円形の穴で、内部に疊・炭が入る。P<sub>1</sub>内部から出土した炭は、一般的にみられる建築部材の炭化したものではなく、いわゆる堅炭状である。P<sub>4</sub>は径20cm、深さ10cmの不整形な穴であり、内部には炭粒がつまっており、それに混じって鍛鉄時に生じると考えられるスケールが層を成して検出された。また、この穴の周囲にも炭・スケールが散布しており、それに接して径40cm程の花崗岩自然石が置かれており、鍛鉄時に使用する台石=金床的な性格の考えられるものである。床面は全体

的には良好とはいえないがP<sub>1</sub>周辺には焼土化して硬くなった箇所もある。東隅寄りの床面上に深さ7cm程の深い穴があり、内部から焼土・炭が出土している。また、それに接して小さな穴を連絡したかのような幅20cm長さ80cm程の溝状の施設がありこの内部からも炭・焼土が出土している。

遺物の出土は少なく、小刀と鉄鎌の他は土師器小破片が出土したのみではあるが、本址は古墳時代後期後半の遺構といえる。また、本址は、全体形が方形を呈する竪穴という以外本遺跡で検出された他の該期住居址との共通点は見い出し難く、極めて特殊な遺構といえる。更にいえ



挿図63 KID 15号住居址

ば、諸々の状況から本北田遺跡の古墳時代後期集落において一定の位置を与えられた鍛冶工房とすることが可能である。

(小林 正春)

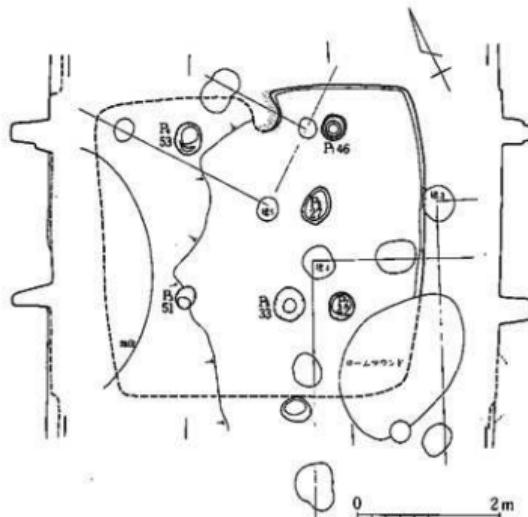
⑬ 16号住居址 (挿図64)

D2c 4付近で28号住居址、掘立柱建物址3~5と重複して検出された。本住居址の南東隅はロームマウンドにより切られている。推定規模4.5m×4.1mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN23°Eを示す。わずかに床面と思われる部分が残っているにすぎず、周溝はない。主柱穴は4本確認され、径30~45cmの円ないし椭円形を呈しており、このうちP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>は二段構造の掘り方をもつ。北壁は中央にカマドが設けられているが、火床部分にわずかに焼土が残るのみである。

出土遺物は少なく、土師器高壺などがあるが、P<sub>4</sub>から縄文土器片、覆土から弥生土器の壺・壺が混入し出土している。

時期は出土遺物等から後期後半に属する住居址である。

(桜井弘人・馬場保之)

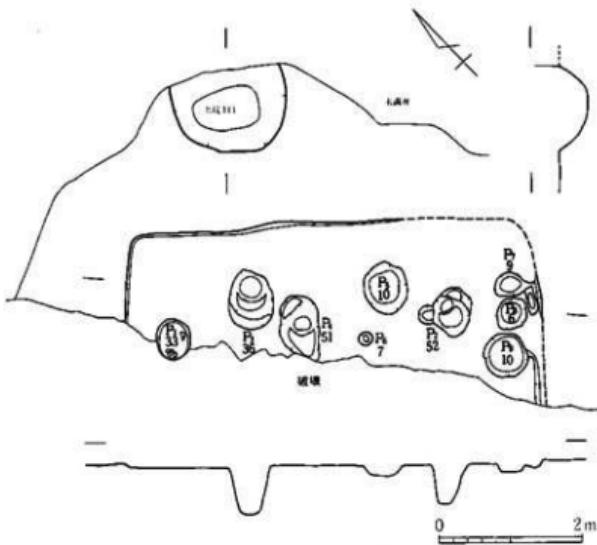


挿図64 KID 16号住居址

⑭ 17号住居址 (挿図95)

調査範囲内西端部の土坑15を切って焼土・礫が検出された。傾斜が急になる台地端部にあたり、旧水田造成にかなり削平されており、住居址の大半は残らず、カマドの一部のみが残存したものと考えられる。

出土遺物はなく、時期決定は困難であるが、カマド状況などから当遺跡内で検出された他の古墳時代住居址と同時期の可能性が強い。(小林正春)



挿図65 KID 70号住居址, 土坑III

#### ④ 70号住居址 (挿図65)

調査範囲の南西端、C1f24を中心検出した。道路建設予定部分に当り、西側のほとんどは切り取られている。全体の $\frac{1}{3}$ 程が調査できた竪穴住居址である。平面形は隅丸方形と考えられる。確認した北東壁は5.7mを測り、N48°Wを示す。壁は北隅で6cmを測り東隅は削平されている。周溝状の落込みを南東壁下に検出したが土坑と切り合う部分のため断定できない。床面は凹凸はあるものの比較的良好なものである。柱穴は2本確認し4本主柱穴と考えられる。P<sub>1</sub>からP<sub>10</sub>などが出土し、本址に伴なう穴と考えられる。カマドは調査できた部分では痕跡さえ認められず位置等は不明である。

遺物はきわめて少なく須恵器は出土しなかった。器形の知れるものは壺一点のみである。壺の口縁部が3点あるが下部器形は不明である。ほかに用途不明の鉄製品の小片がある。

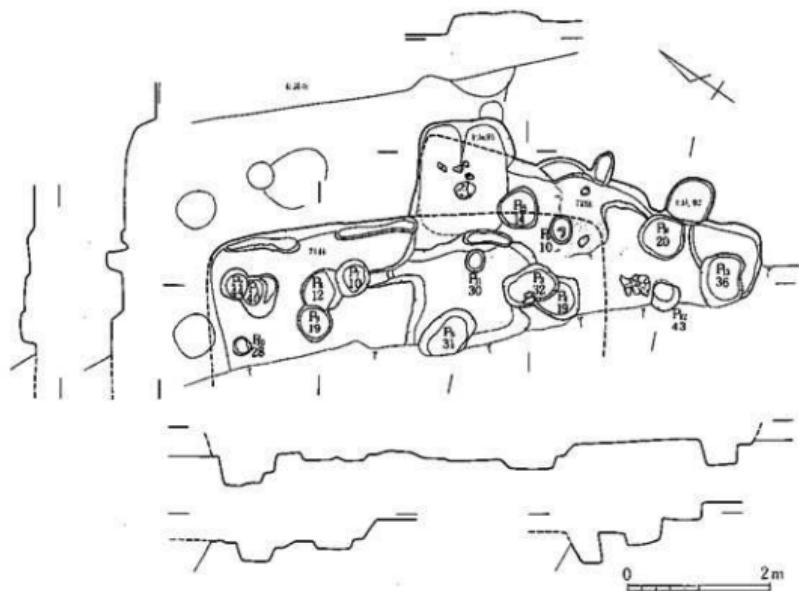
時期は後期後半に位置付けられる。

⑥ 71号住居址 (挿図66)

70号住居址同様に道路建設予定部分の南西端のC1k17を中心として検出された。西側のほとんどは切り取られており、南側は72号住居址を切っている。全体の1/4程が調査できた。平面形は隅丸方形で、規模は北西、南東方向の一辺が4.6m程を測る竪穴住居址である。確認した一辺の壁方向はN37.5°Wを示す。周溝は壁直下に途切れて検出された。深さ5~10cmを測る。床面は72号住居址を切る部分は貼床され凹凸が激しく軟弱である。それより北西側床面は平坦で堅く良好なものである。主柱穴は4本主柱穴と判断され北隅のP<sub>1</sub>又はP<sub>2</sub>と東隅のP<sub>3</sub>が住居址の東側の2本に当ると考えられる。又P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>はほぼ同じ深さを持ちP<sub>3</sub>は椭円の掘方であることから建て替えの可能性がある。鋤先が72号住居址カマドを切るP<sub>6</sub>から出土し、本址に付属する穴である。本址カマドは調査内では確認されなかった。

遺物は少ない。土器で器形の知れるものではなく、須恵器の出土もない。土師器壺、小形壺、高がある。鉄製品として鋤先がある。

時代は後期後半に位置付けられる。



挿図66 KID 71号・72号住居址、土坑91・92

⑩ 72号住居址 (挿図66)

南西端のC1h17を中心に検出された。道路部分に当るため西側は大きく削り取られている。71号住居址に北西側を切られる。北東壁は土坑91・92と切り合い歪むが新旧は確認できなかった。住居址全体の1/4程が調査できた。平面形は隅丸方形で、主軸に直交する一辺が4.9mを測る竪穴住居址である。主軸方向はN65.5°Eを示す。壁は深さ15~36cmを測り角度を持って立ち上がる。調査できた部分に周溝は確認されなかった。床面はカマド前の一部を除き凹凸がきわめて激しく軟弱である。主柱穴は71号住居址の貼り床を取り除き確認されたP<sub>11</sub>と切り取られた端の部分に検出されたP<sub>12</sub>と考えられる。掘方は小さいが深さは十分なものである。南西側に2本が想定され4本主柱穴と思われる。本址に伴なう施設としてP<sub>13</sub>、P<sub>14</sub>があり、P<sub>13</sub>からは土師器小形壺と炭化した板状木製品が出土し、P<sub>14</sub>からは土師器壺、甕が出土している。カマドは北西壁のほぼ中央にある。ほとんどの部分が71号住居址東隅に切られている。火床部と考えられる多量の焼土の高まりと、壁外に煙道を確認したが、形態は不明である。

遺物には土師器甕5点・小形壺1点・壺4点などがある。甕のうち1点は底部で器形は知れないがほかのものは胴のあまり長くならない土器である。壺は内面黒色処理されたものが1点含まれる。須恵器は出土しなかった。石器には編物石4点があり、石製品として臼玉がある。ほかに縄文時代からの混入品であるが磨製石斧、横刃型石器、剥片石器などもある。

時期は後期後半に位置づけられる。

⑪ 73号住居址 (挿図67)

調査部分の南西隅のC1k12を中心に検出した。70号~72号住居址と同様に道路になる部分である。南西側1/4が切り取られている。住居址東隅側は、全体の1/4が道路下の埋土が厚くされることや時間的な制約などから未調査となった。調査した範囲は全体の1/4程と考えられる。平面形は隅丸方形である。規模は切り取られた斜面部分をわずかではあるが調査し、主軸方向の一辺が6.5mを測ることを確認した。主軸方向はN40°Wを示す。壁は17~22cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は北隅壁直下のみに検出された。深さ4cm程の浅いものである。柱穴は住居址等の形態から4本と考えられる。調査できた部分ではP<sub>1</sub>またはP<sub>2</sub>が考えられるが、西側部分が不明、東隅が未調査のため、どちらが主柱穴に当たるのかは不明である。カマドは北西壁の切り取られた部分に検出された。石組粘土カマドで右袖部と火床を確認した。

遺物は土師器甕・小形壺・甕破片がある。甕は胴部の長くならないものである。須恵器は出土しなかった。

時期は後期後半に位置付けられる。

(佐合 英治)

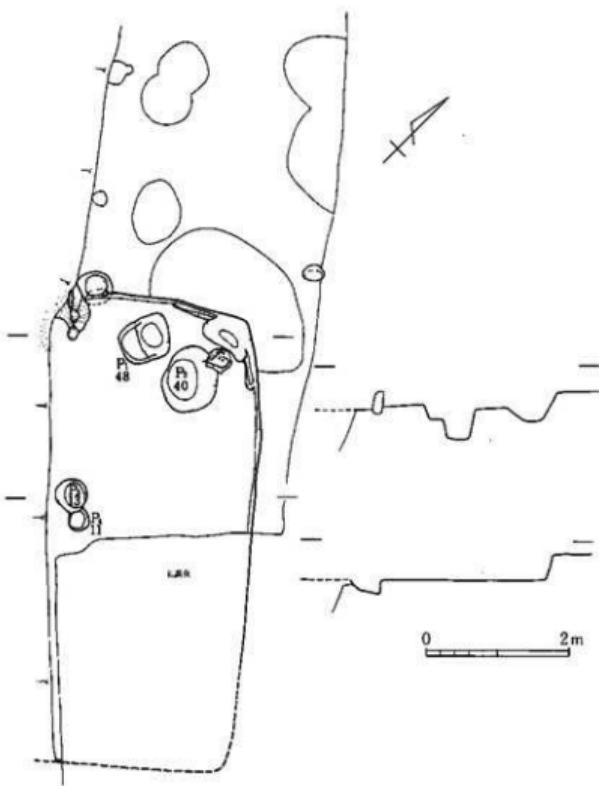


插图67 KID 73号住居址

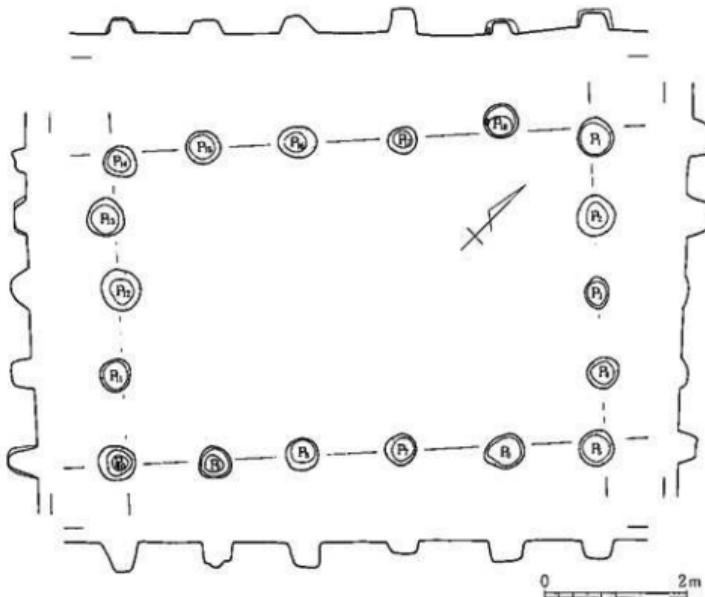
## 2) 挖立柱建物址

### ① 挖立柱建物址 1 (挿図68)

調査した部分のはば中央のCITY19を中心検出した。49号住居址北西壁をP<sub>10</sub>～P<sub>18</sub>が切っている。規模は5×4mを測る掘立柱建物址である。規模は桁行方向6.7m、梁行方向4.3mを測る。桁行方向軸N42°Eを示し、掘立柱建物址10・16・17とはば同方向である。柱間は桁・梁それぞれ1.34mを測るが、南西の梁の柱間はやや不規則である。柱掘方は直径50cm前後を測り、ほぼ円形である。深さにばらつきがあり、壁面も垂直な所と比較的ゆるやかな部分とがある。覆土は暗褐色土である。また、柱痕は確認できなかった。

遺物は土師器壺・甕、須恵器甕、縄文土器小破片が出土している。

時期は遺物やほかの掘立柱建物址の切り合い状況から古墳時代後期後半に位置付けられる。



挿図68 KID 建物址 1

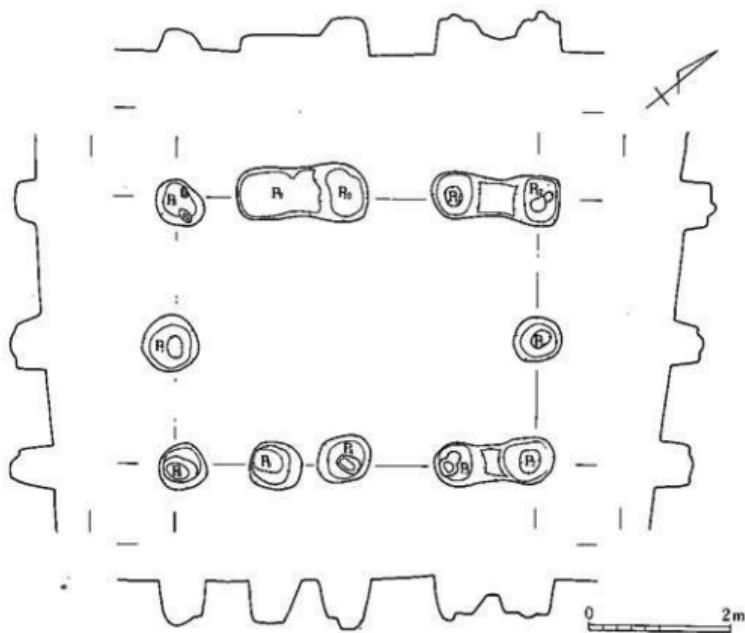
② 堀立柱建物址 2 (挿図69)

調査範囲の中央部よりやや西側の C1w24 を中心に検出された。P<sub>3</sub>～P<sub>11</sub> が24号住居址を切っている。4×2間の堀立柱建物址である。規模は桁行 5.1m 梁行 3.6m を測る。桁行方向軸は N 38°W を示し、堀立柱建物址 9 とはほぼ同方向である。桁行の柱間は P<sub>3</sub>と P<sub>4</sub>、P<sub>10</sub>と P<sub>11</sub> の間がやや広く 1.45m を測り、ほかの柱間は 1.22m となる。梁行の柱間は 1.8m である。柱掘方の平面形は直径 75cm 前後の円形または椭円形で、黒色土の覆土である。深さにややばらつきはあるが、壁面はほぼ垂直に掘られている。P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>を除き底部の中央に凹み部分が認められ、柱の圧痕であると考えられる。

遺物は土師器小片、繩文土器、石器片が出土している。

時期はほかの堀立柱建物址と同じ古墳時代後期後半に位置付けられる。

(佐合英治)



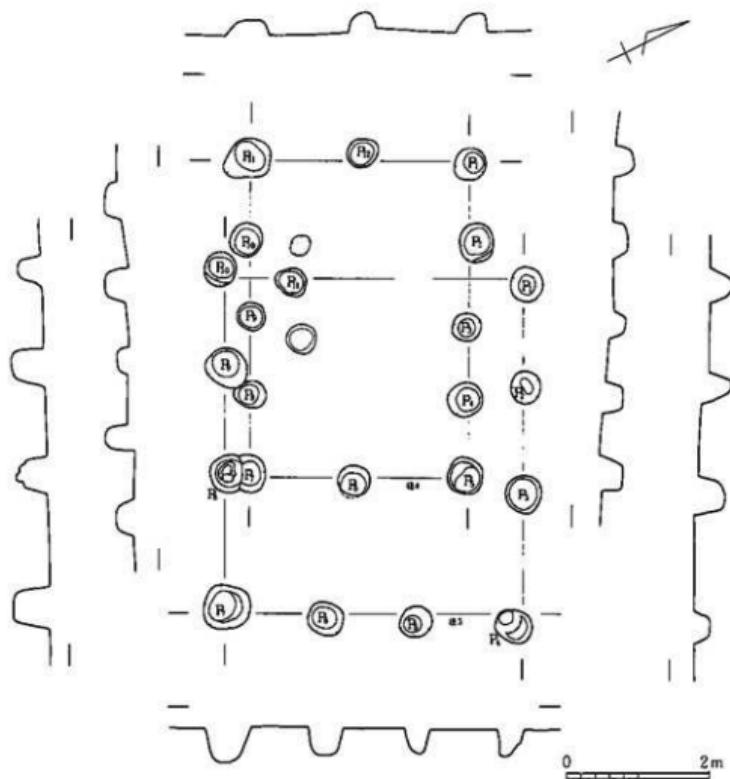
挿図69 KID 建物址 2

③ 堀立柱建物址 3 (挿図70 図版)

調査区中央からやや北西よりD2c1を中心検出した。25号住居址を切り堀立柱建物址 4と切り合う。土坑4に切られ1本は確認できなかった。3×3間で4.7×4.2mのほぼ方形の堀立柱建物址であり、柱間は桁行で1.8~1.4m梁行で1.4m桁行方向はN64°Wである。柱掘方平面形は40~60cmの円形で深さもそろっている。

遺物は縄文時代の土器片が入っていただけである。

時期は古墳時代後期後半に位置付くと思われる。



挿図70 KID 建物址 3・4

#### ④ 堀立柱建物址 4 (挿図70)

D2c3を中心とする掘立柱建物址3と切り合って検出し、25号住居址を切る。4×2間で4.4×3mの長方形掘立柱建物址であり、柱間は桁行で1~1.2m、梁行で1.5~1.6mを測り、桁行方向は掘立柱建物址3と同じN64°Wである。柱掘方は平面形で直径40~60cmを測るほぼ円形である。時期は掘立柱建物址3と何らかに関係する建物址で、古墳時代後期後半の遺構である。

(佐々木嘉和)

#### ⑤ 堀立柱建物址 5 (挿図71)

D2#5を中心に、23、30号住居址、小窓穴1に重複して検出された。桁行6間、梁行3間の身舎に四面廻の付いた8間×5間の掘立建物である。桁行14.81m、梁行5.99mを測り、桁行方向はN42.1°Eを示す。柱間は桁行で北から1.03m・1.29m・2.03m・2.18m・2.18m・2.28m・2.24m・1.31mを測り、北から2間目と南から1間目はほぼ等しい寸法を示す。同時に、北から1間目と2間目を合わせた寸法は3~7間目の各寸法とほぼ等しい。一方、梁行では東から1.34m・1.90m・0.55m・1.30m・0.90mを測り、東から1間目と4間目はほぼ等しい寸法である。また東から2間目の寸法は3間目と4間目の寸法の和にはほぼ等しい。このことは上屋の構造や柱の割り付け方法を考える上で重要であると思われる。柱掘り方は径15~40cmの不整円形を呈し、深さは7~78cmとばらつきがあるが30~50cmが多い。覆土は炭混りの黒灰色土である。

本掘立柱建物址は、四面廻付の建物で規模が大きく、他の建物址が側柱のみの掘立柱建物址であると比較すると著しく様相を異にしている。

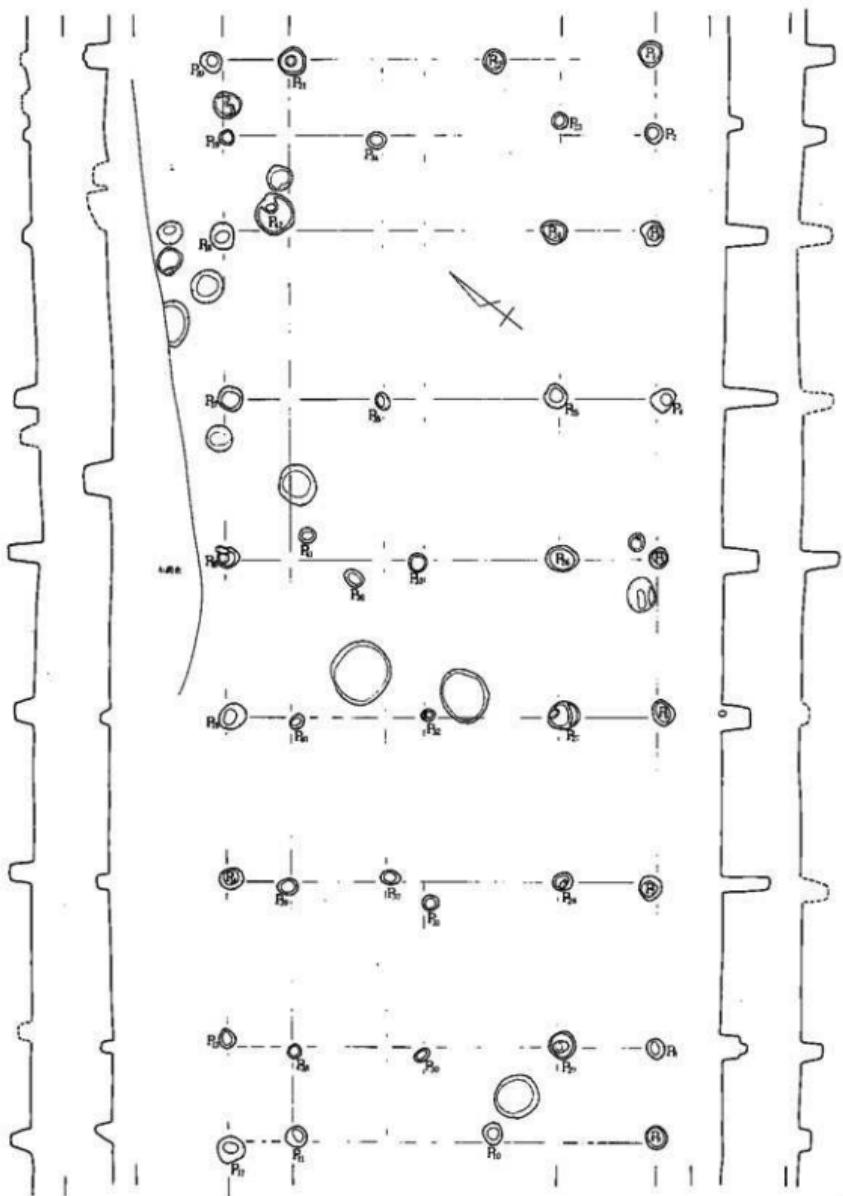
出土遺物は少ないが、中世に比定される掘立柱建物址である。

#### ⑥ 堀立柱建物址 6 (挿図72)

C2k30を中心に掘立柱建物址5と重複して検出された。3×2間の側柱のみの掘立柱建物址で、桁行方向はN15.5°E、掘立柱建物址21とはほぼ方向を示す。桁行3.82m、梁行2.96mを測り、柱間は桁行0.92m~1.83m、梁行1.26~1.70mとばらつきがある。掘り方は径40~60cm、深さ30~45cmの不整円形を呈し、覆土は黒褐色土である。

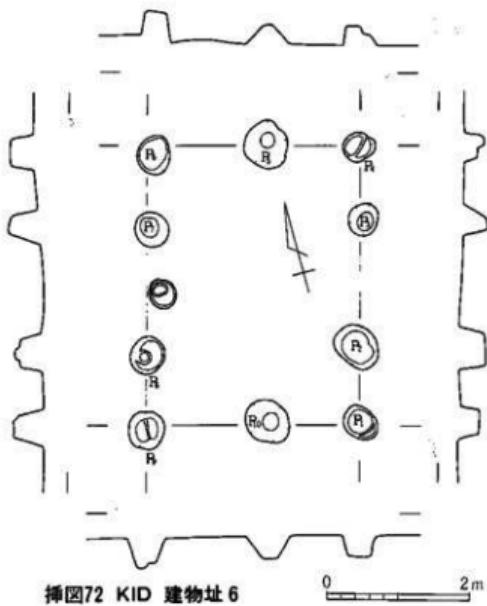
P1・P6から須恵器壺が出土しているほかはほとんど遺物はないが、古墳時代後期後半の掘立柱建物址である。

(桜井弘人・馬場保之)



挿図71 KID 建物址 5

0 2m



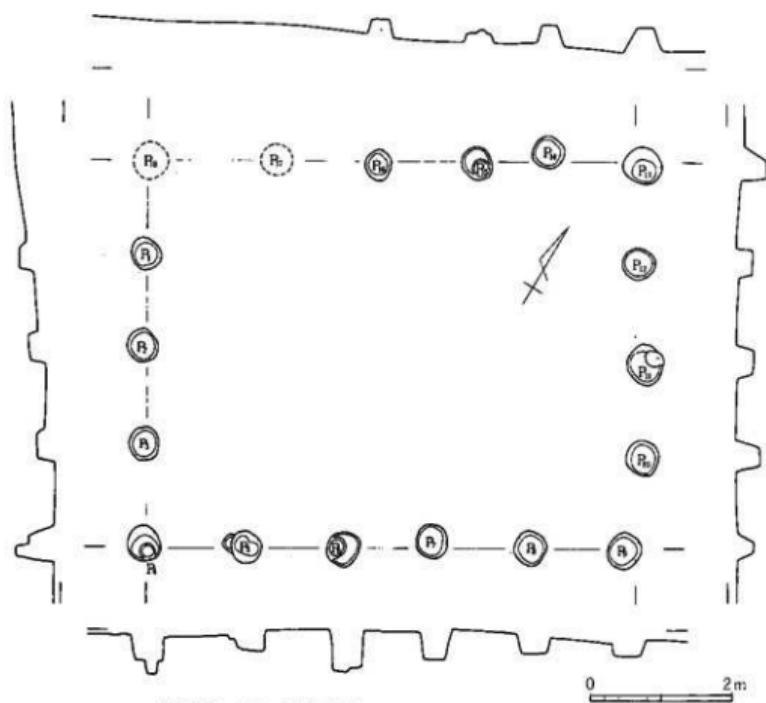
拵図72 KID 建物址 6

⑦ 挖立柱建物址 7 (拵図73)

調査区中央から東南より、C2b1を中心検出した。6・45号住居址を切る。南隅の2個は、削平され確認できなかった。5×4間で  $6.9 \times 5.3$  mを測る長方形の掘立柱建物址である。桁行の方向軸は N 57.5°E を示す。柱間は桁行で 1.0 ~ 1.4 m、梁行は約 1.4 mを測るが、位置に多少のバラツキがみられる。柱掘方の平面形は、おむね40~60cmを測る円形を成し、底部に柱痕と思われる凹みを持つものもある。深さは一定ではなく、底部の標高に著しく差がある。

遺物は土師器甕と壺の小片がわずか出土したのみである。

時期は古墳時代後期後半である。



挿図73 KID 建物址 7

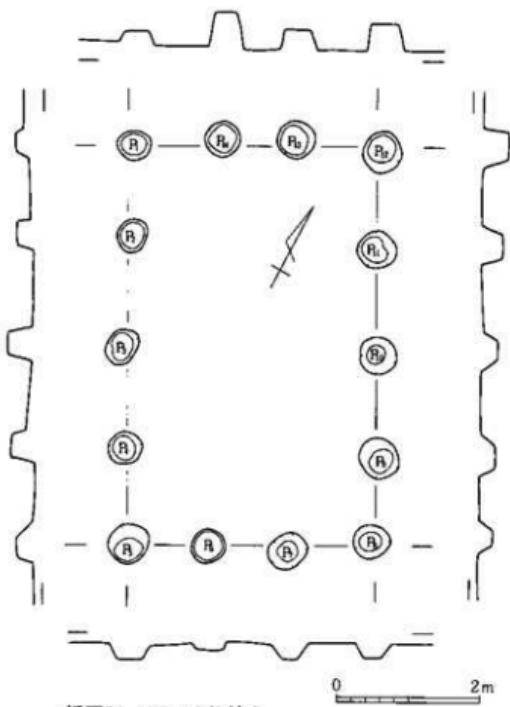
⑧ 振立柱建物址 8 (挿図74)

振立柱建物址 7 の東側 C2e1 を中心に検出した。6・44・45号住居址を切る。4×3間で  $5.5 \times 3.5\text{ m}$  を測る長方形の振立柱建物址である。柱間は桁行で約  $1.4\text{ m}$ 、梁行で約  $1.\text{ m}$  を測り、桁行の方向軸は N  $29.5^\circ\text{ W}$  を示す。梁行の方向は振立柱建物址 7 の桁行方向とはほぼ同方向を示し、並列に位置する。柱掘方の平面形は、おおむね円形を成し、直径  $40\sim 60\text{ cm}$  を測る。検出面から底部までの深さは比較的浅いが、底部の標高はほぼ一定である。

遺物は器形不明の土師器小片がわずか出土したのみである。

時期はほかの振立柱建物址の位置、切り合い関係からみて古墳時代後期後半に位置付けられる。

(吉川 豊)



挿図74 KID 建物址 8

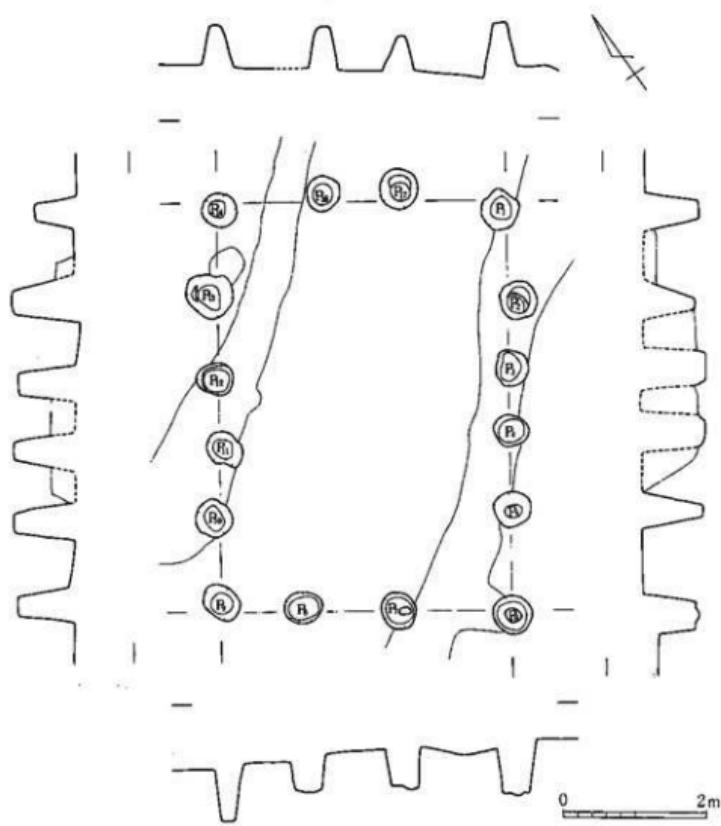
⑨ 掘立柱建物址 9 (挿図75)

調査区西隅よりD1s5に検出し、10号・18号・27号・42号住居址を切り、重機による試掘トレンチに切られる。5×3間で $5.7 \times 4.1$  mの長方形掘立柱建物址である。柱間は桁行で1.2~0.8 m梁行で1~1.4 mの円形で小形であるが、深さは住居址を切っていない所で1 m弱と深い。穴の底部が焼けて赤褐色になっているものもあり、すべての穴の覆土中から炭が出土した。

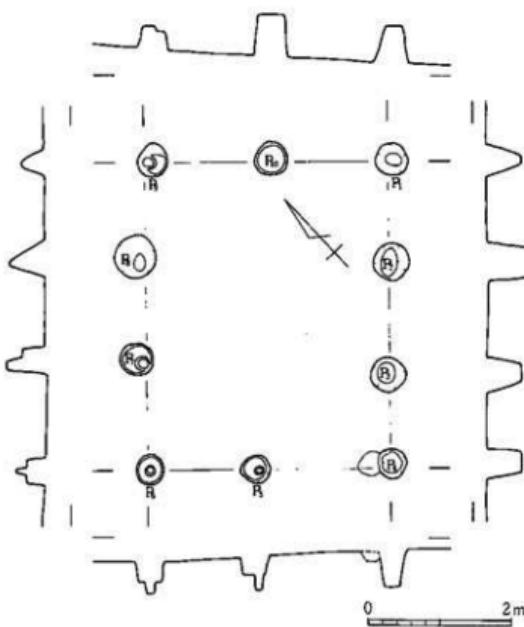
遺物は少なく切っている住居址の遺物と思われるものののみであった。

時期は古墳時代後期後半に位置付く掘立柱建物址である。

(佐々木嘉和)



插図75 KID 建物址 9



挿図76 KID 建物址10

⑯ 挖立柱建物址10 (挿図76)

調査区西隅に近いC1r25を中心検出した。57号住居址を切る。3×2間で $4.3 \times 3.4$ mの長方形の掘立柱建物址である。柱間は桁行で約70cm、梁行で約90cmを測り、桁行の方向はN43.5°Eである。柱掘方の平面形は、直径40~60cmを測る円形を成し、底部に柱痕と思われる凹みを持つものもある。検出面から底部まではほぼ一定の深さがあり、その標高もおおむね一定である。

遺物は切っている住居址のものと見られる石器が一点出土している。

時期は古墳時代後期に位置付くと考えられる。

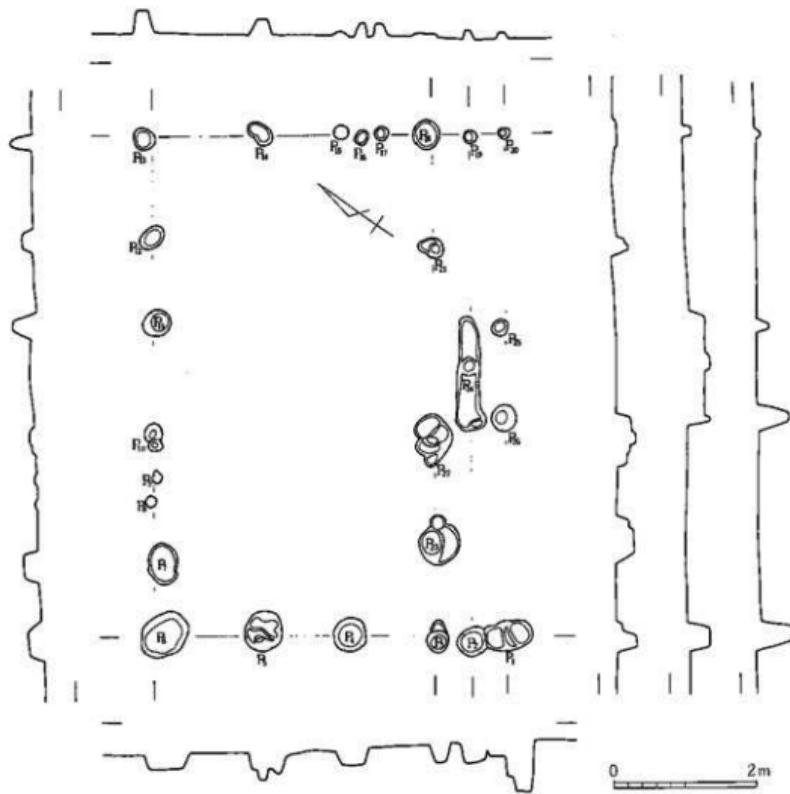
(吉川 豊)

⑪ 挖立柱建物址11 (挿図77)

調査区中央南西よりC1s 20に検出した。基本的には $5 \times 3$ 間の掘立柱建物址と思われ、 $7 \times 6$ mのやや長方形である。柱間は桁行で1~1.4m 梁行で1~1.5mを測り、桁行方向はN54°Eである。基本的には $5 \times 3$ 間であろうが、南東側の桁行に3列の柱穴が検出できた。覆土はすべての穴に黒色土が入っていたので、本掘立柱建物址の付属施設と判断した。廂、入り口施設などの柱穴と考えられる。南西に位置する掘立柱建物址12にもこれに似た施設が検出された。

遺物は小片がわずか出土している。

時期は古墳時代後期後半の掘立柱建物址である。

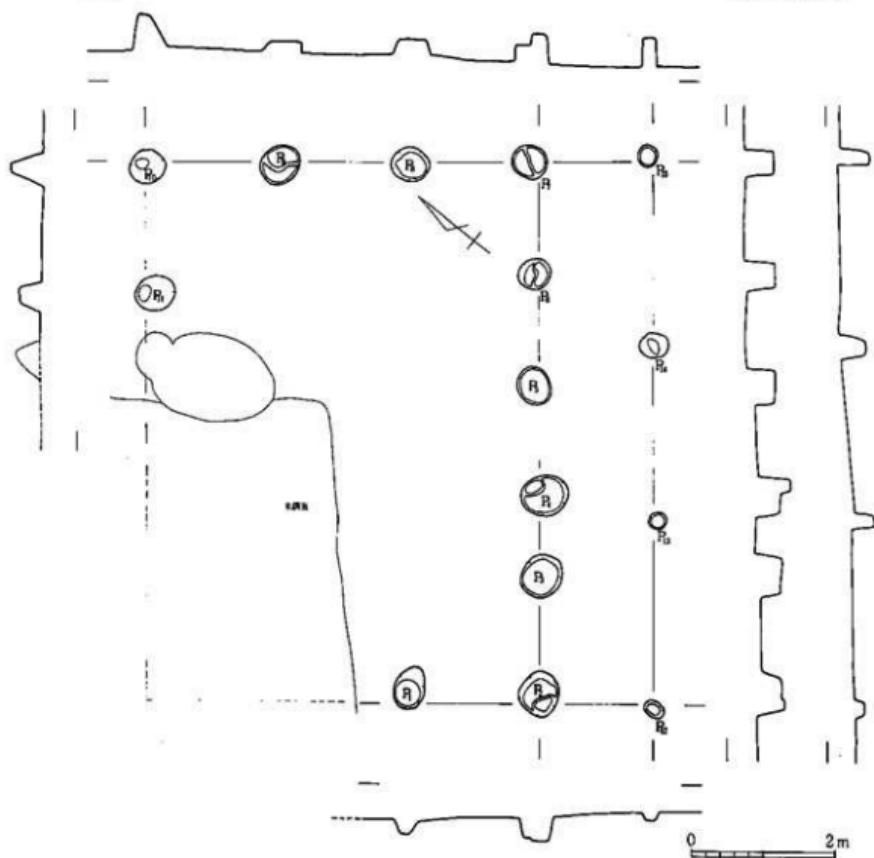


挿図77 KID 建物址11

⑩ 挖立柱建物址12 (挿図78)

掘立柱建物址11の南西側C1m 20に検出した。12号・32号住居址を切り、部分的に土盛にかかった。基本的には、5×3間の掘立柱建物址で、 $7.1 \times 7.6\text{ m}$  のほぼ方形である。柱間で桁行で $1.8 \sim 1.3\text{ m}$  梁行で $1.8 \times 2\text{ m}$  を測り、桁行方向はN $54^\circ\text{ E}$  である。基本的には $5 \times 3$  間であろうが南東側桁行の外側に $3 \times 1$  間の柱掘方を検出した。この柱穴は小型で両端の柱間 $2.6\text{ m}$ 、中央 $2.4\text{ m}$  である。すべての柱掘方に焼土と炭が混入しており、何らかの意図的な結果であろう。

遺物の出土は少なく時期の決めてにはならないが、古墳時代後期後半の掘立柱建物址と考えられる。(佐々木嘉和)

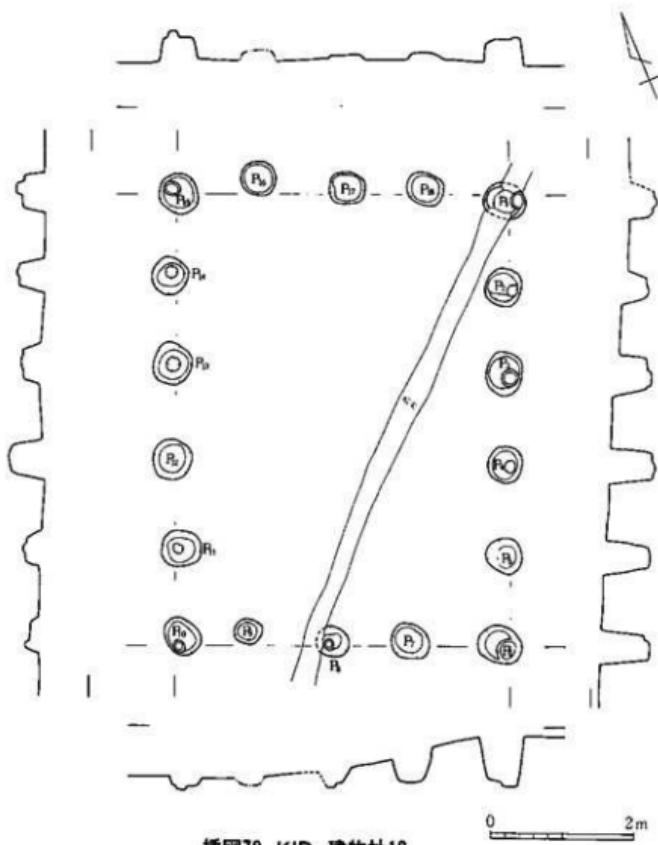


挿図78 KID 建物址12

⑬ 挖立柱建物址13 (挿図79)

C1 w14を中心いて、48・58・59号住居址を切って検出された。5×4間の側柱のみの掘立柱建物址で、桁行方向はN 22.1°Eである。桁行6.27m、梁行4.6mを測り、柱間は桁行1.25m、梁行1.15m前後ではば揃う。柱据方は径45~60cmのはば円形であるが、深さは12~70cmとばらつきがある。掘方の底部レベルでは側柱の東・南側はほぼ揃っている。柱痕は検出面では確認できなかった。また掘方底部が二段構造を呈するものが多い。

遺物は掘り方から縄文土器片、石錐、土師器片が出土しているが、前二者は重複する住居址に



挿図79 KID 建物址13

伴なうものと考えられる。P<sub>3</sub>から横刃形石器が出土しているが、混入品であり、他に遺物は少ない。

時代は、古墳時代後期後半に属する掘立柱建物址である。

(桜井弘人・馬場保之)

#### ⑭ 挖立柱建物址14 (挿図80)

調査区南隅よりC1r13に検出し、15号住居址を切り、掘立柱建物址15・16と切り合う。5×4間で5.7×4.7mのやや長方形の掘立柱建物址である。柱間は桁行で0.8~1.3m梁行で1~1.2cmを測り、桁行方向はN45°Eである。柱掘方平面形は、ほぼ円形であるが、位置にバラつきが見られ深さも一定ではない。底部に柱痕らしい凹部を持つものもある。南東側桁行の内側に4本の穴を検出したが桁行方向と平行でなく、本掘立柱建物址とは別遺構と判断した。その後の調査の進行に伴ないこの柱掘方4本は掘立柱建物址16に付属するものとなった。

遺物の出土はわずかである。

時期は、古墳時代後期後半に位置付けられる。

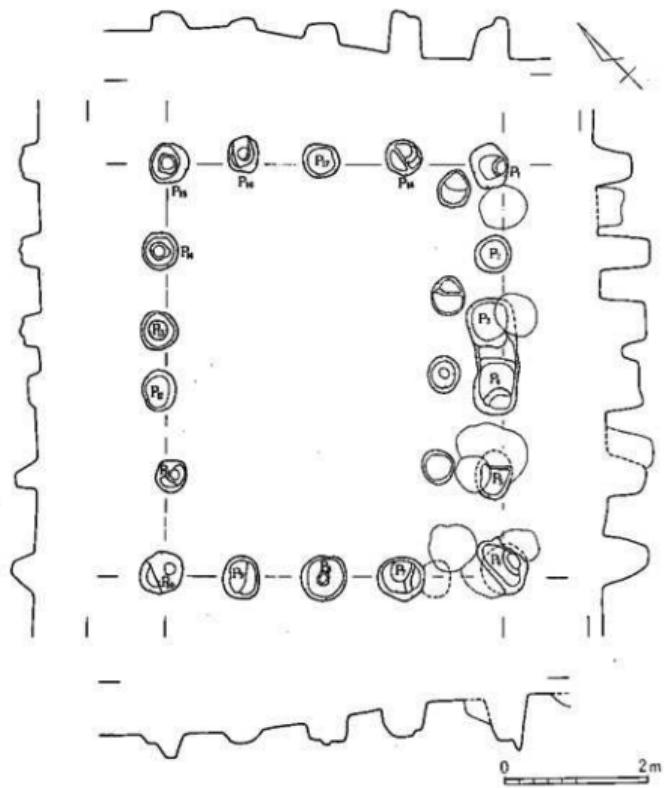
(佐々木嘉和)

#### ⑮ 挖立柱建物址15 (挿図81)

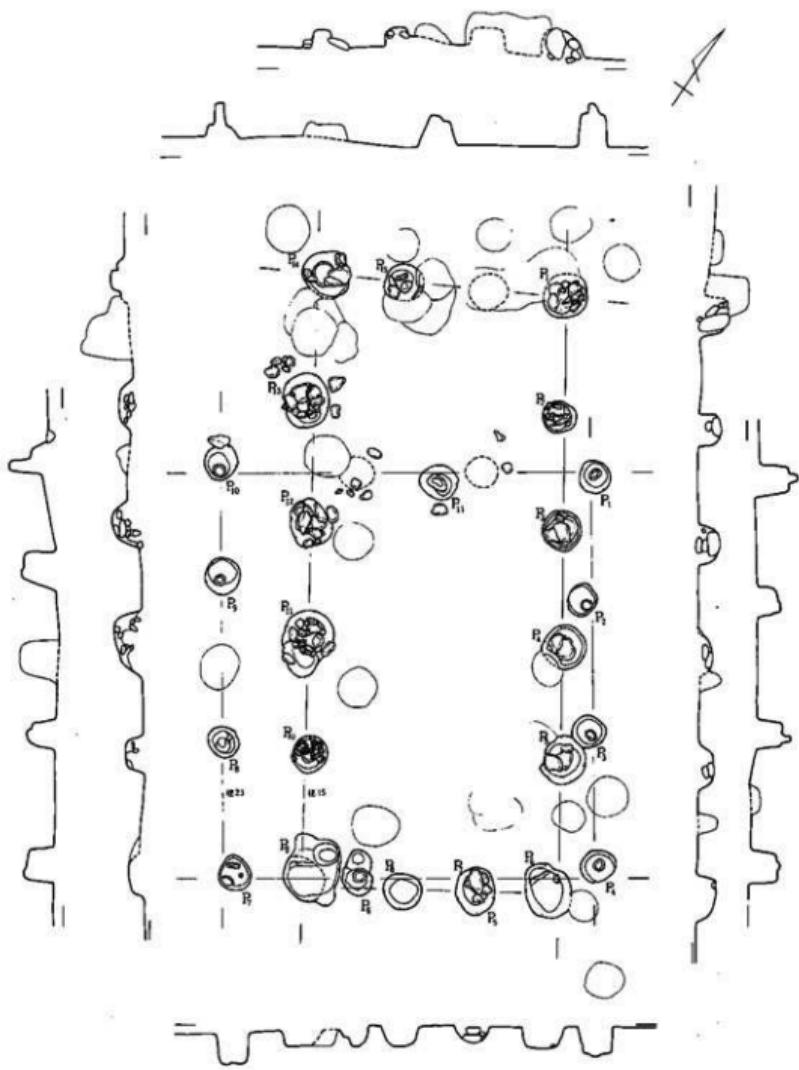
調査範囲の南端、掘立柱建物址が集中して確認された一角にあり、C1q10を中心に検出した。53号住居址を切りP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>~P<sub>6</sub>が掘立柱建物址14の南東梁の掘方を切る。P<sub>7</sub>が掘立柱建物址23のP<sub>3</sub>を切って完全に重複している。P<sub>8</sub>は土坑16に切られている。5×4間の掘立柱建物址である。規模は桁行8.2m、梁行3.5mを測り、桁行方向軸はN32°Wを示す。掘立柱建物址23とほぼ同方向である。柱間は桁行1.64m、梁行1.12mを測る。柱掘方の平面形はほぼ円形を成し、直径50~70cmを測る。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>を除き掘方内に柱止めと考えられる石が認められる。北東桁のものは30~40cmを測る板状の石を底部に密着させ置いている。これに対し南西側桁のものは直径5~30cmの丸い自然石を使っている。覆土を取り除くと、ほぼ中央部に石の無い部分が検出され、この部分が柱位置として捉えられる。それにより、掘り方内の石は柱を安定させるのに用いられたと考えられ、石の検出されなかった柱掘方にも本来は石があったものと判断される。

遺物には土師器甕片があるのみである。

時代は古墳時代後期後半と考えられるが、重複する掘立柱建物址をすべて切っており、ほかの掘立柱建物址に石を伴なったものがないことから、やや時代の新しい掘立柱建物址である。



挿図80 KID 建物址14



挿図81 KID 建物址15・23

0 2m

⑩ 堀立柱建物址16 (挿図82)

堀立柱建物址が集中して検出された調査範囲の南側C1r10を中心に確認された。P<sub>o</sub>～P<sub>u</sub>が堀立柱建物址14・15に切られ、P<sub>r</sub>は土坑16に切られている。3×4間の堀立柱建物址で、北西に張り出し部を持つ。この北西部は切り合いが激しく当初張り出し部の穴を堀立柱建物址15に付属するものと考えたため西端の1本を検出するに至らなかった。規模は張り出し部も含め桁行方向が7.8m、梁行方向が5.2m、を測る堀立柱建物址である。桁行方向はN40°Wを示す。柱間は桁行が1.8m、梁行方向が1.7mである。張り出し部は北西梁行から60cm外にある。4本の掘方を検出したが本来は5本あり、4間と考えられる。この柱間は1.32mを測るがP<sub>u</sub>とP<sub>o</sub>の間がやや狭い。掘方平面形はほぼ円形で直径65cm前後である。壁面はほぼ垂直に掘られている。柱掘方のほとんどどの底部には中心より外側にそれで凹み部分が認められ、柱の圧痕と考えられる。

遺物には縄文土器片、土師器小破片がある。

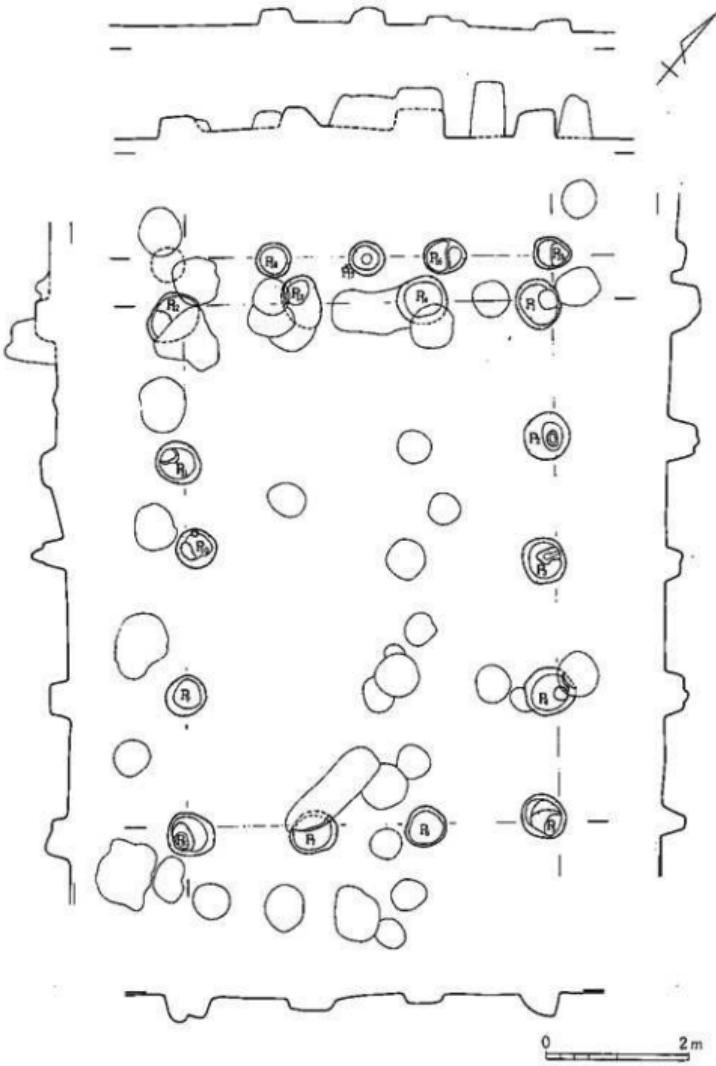
時期は切り合い関係等から古墳時代後期後半である。

⑪ 堀立柱建物址17 (挿図83)

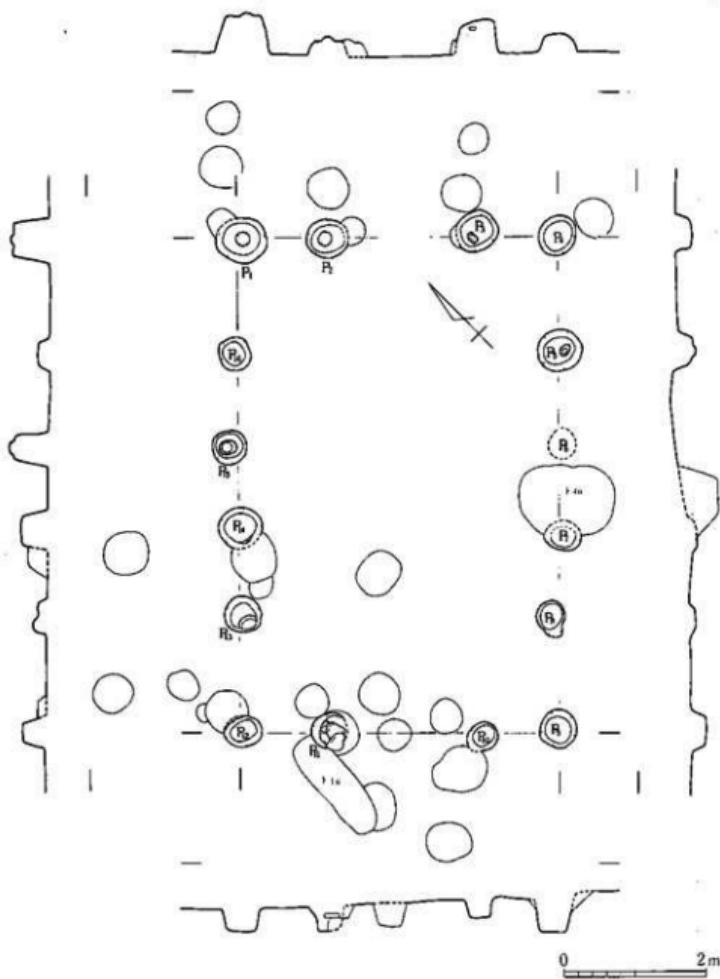
調査範囲南側C1r9を中心に検出した。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>が堀立柱建物址22を切り、P<sub>10</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>12</sub>を堀立柱建物址15に切られる。P<sub>11</sub>は完全に重複し、土坑16にも切られている。P<sub>r</sub>は土坑46と切り合い、P<sub>e</sub>は検出されなかった。5×4間の堀立柱建物址である。規模は桁行6.84m、梁行4.5mを測る。桁行方向軸はN 45.5°Eを示す。堀立柱建物址14と同方向、堀立柱建物址10とはば同方向である。桁行の柱間はそれぞれの角より1間目が長く1.6mを測り、中の3間が1.2mを測る。梁行の柱間は桁とは逆にそれぞれの角より1間目が短く1.2mを測り、中の1間が2.1mである。掘方平面形は円形を呈し、直径42～72cmを測る。壁面はほぼ垂直に掘られており、底部は比較的平坦である。柱の圧痕と考えられる凹み部を認める掘方が5本確認された。

遺物には土師器壺片がある。

時代は古墳時代後期後半に位置付けられる。



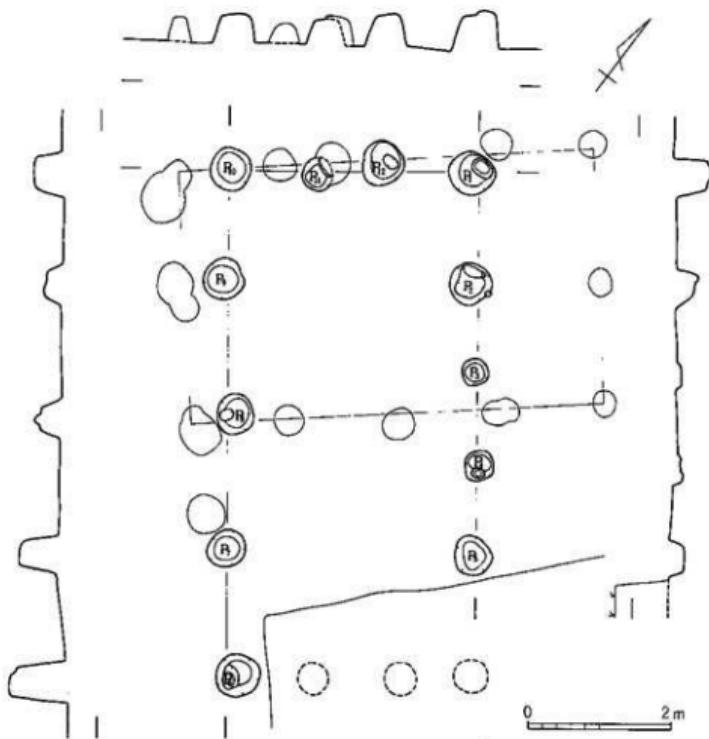
挿図82 KID 建物址16



挿図83 KID 建物址17

⑩ 挖立柱建物址18 (挿図84)

掘立柱建物址の集中する一角の東端のC1v8を中心に検出した。掘立柱建物址22と重なり合うP<sub>12</sub>は完全に重複しており、新旧を把握できなかった。また南東の梁部分掘方は未調査部分にかかる。南西桁の南東部分を精査し本掘立柱建物址が南東へは広がらないことを確認した。南西桁行4間、北東桁行5間、梁行3間の変則的な掘立柱建物址である。規模は桁行7m、梁行3.5mを測る。桁行方向軸はN36°Wを示し、掘立柱建物址23とはほぼ同方向である。桁の桁間は、南西側のものが1.75mを測る。北東側は1間分が未調査部分となるが、角より1間目が南西桁と同じ1.75m、中の3間が1.2mを測る。梁の柱間は中が1m、両側が1.25mを測る。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>を除き掘方は直径50cmの円形もしくはやや方形の平面形を成す。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は直径40cmでやや小さく深さも浅い。

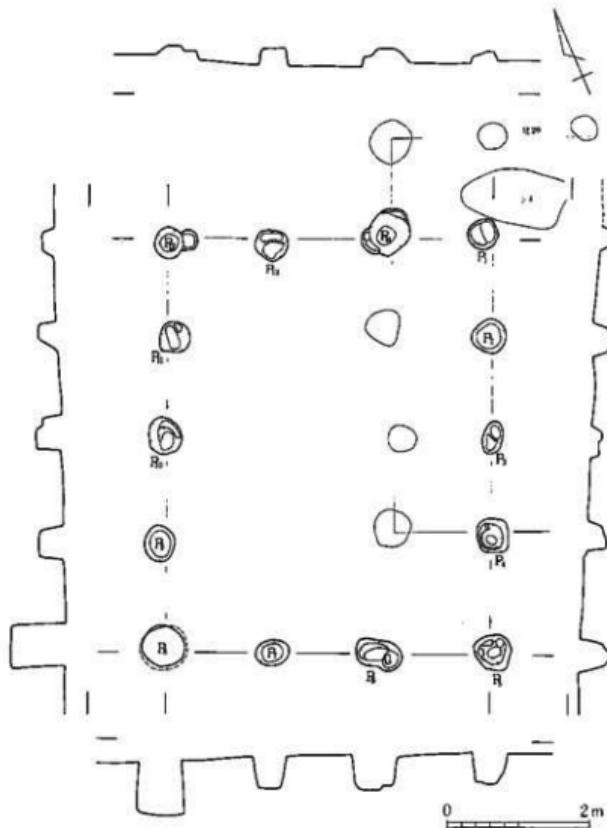


挿図84 KID 建物址18

南東桁中央部の変則的になっている部分に当たり、上屋の構造によるものと判断される。またP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>12</sub>の底部には凹み部分があり柱の圧痕と考えられる。

遺物には土師器壺片がある。

時代は周囲の掘立柱建物址の状況などから古墳時代後期に位置付けられる。(佐合英治)



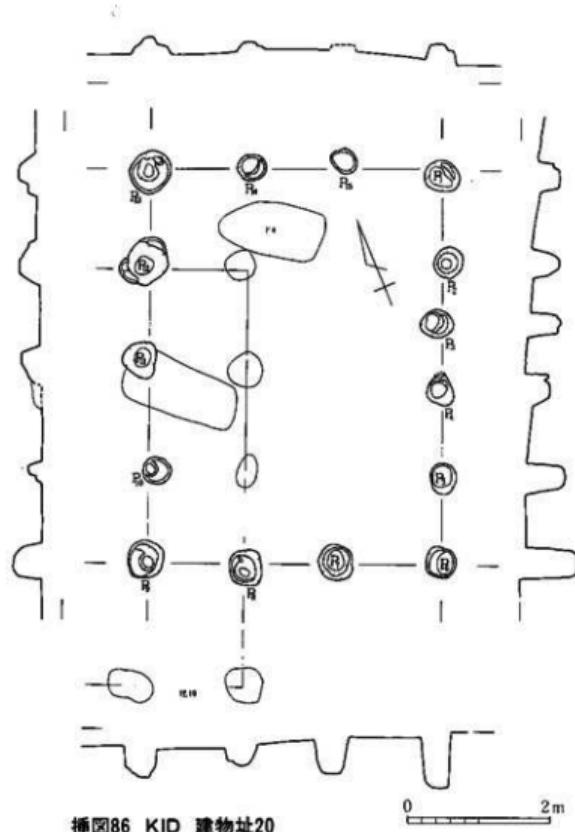
挿図85 KID 建物址19

⑯ 据立柱建物址19 (挿図85)

調査区西隅よりD1r 7に検出し、27号住居址を切り、掘立柱建物址20と切り合う。4×3間で  
5.8×4.5 m のやや長方形の掘立柱建物址であり、柱間は桁行で 14 m 梁行で 1.4 ~ 1.5 m を測る。  
桁行方向は N24°E である。柱穴平面形はややバラつきが見られるが、ほぼ円形から梢円形である。  
掘立柱建物址20と方向が同じで、切り合う柱穴が 2 個あるが、新旧関係は確認できなかった。掘  
立柱建物址20とは何らかの関係が推測される。

遺物の出土はわずかである。

時期は、古墳時代後期後半に位置付く掘立柱建物址である。



插図86 KID 建物址20

◎ 挖立柱建物址20 (挿図86)

調査区北西端近くD1w5に検出し、掘立柱建物址19と切り合う。基本的には $4 \times 3$ 間であるが、南東側桁行柱間は5間である。規模は $5.5 \times 4.1\text{m}$ の長方形掘立柱建物址である。柱間は桁行で $1.2 \sim 1.6\text{m}$ 、梁行は $1.2 \sim 1.5\text{m}$ を測り、南東側桁行の狭い柱間は $0.8\text{m}$ である。桁行方向はN $20^\circ\text{E}$ 。柱掘方平面形はバラつきがあるが、ほぼ円形に近い。検出面から底部までの深さには著しい差があるが、底部標高に著しい差はない。底部に柱痕らしい凹部を持つ穴もある。

時期は古墳時代後期後半に属する掘立柱建物址と考えられる。

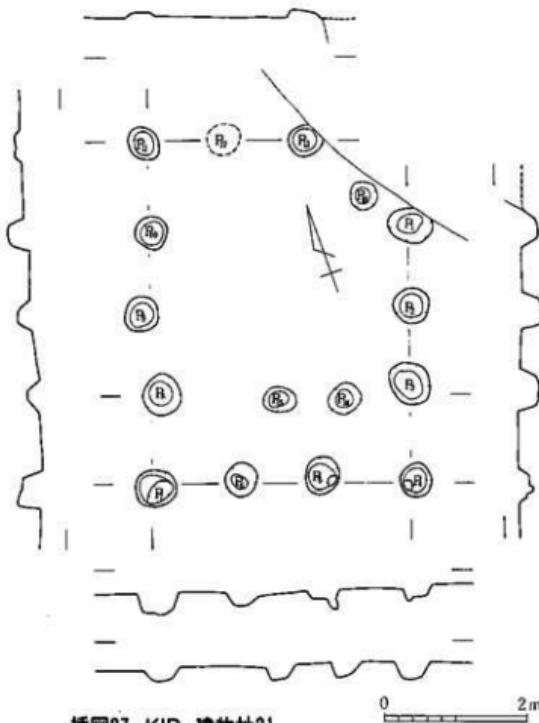
◎ 挖立柱建物址21

(挿図87)

調査区北東端C2q 21に検出し、用地外にかかった。 $4 \times 3$ 間で $4.8 \times 3.6\text{m}$ のやや長方形の掘立柱建物址である。柱間は桁行で $1 \sim 1.2\text{m}$ 、梁行で $1.2 \sim 1.3\text{m}$ を測り、桁行方向はN $19.3^\circ\text{E}$ である。北東隅の1個は用地外にかかり、北東梁行の1個は検出時にとばしてしまった。切り合い関係の無い場所で、黄色土面に検出したが、底部まで浅く検出面より上面から掘り込まれていたものであろう。南西梁行の内側に2個の穴を検出したが、深さもほぼ同じであり、この掘立柱建物址の何らかの施設であろう。

時期は古墳時代後期後半に位置付く掘立柱建物址である。

(佐々木嘉和)



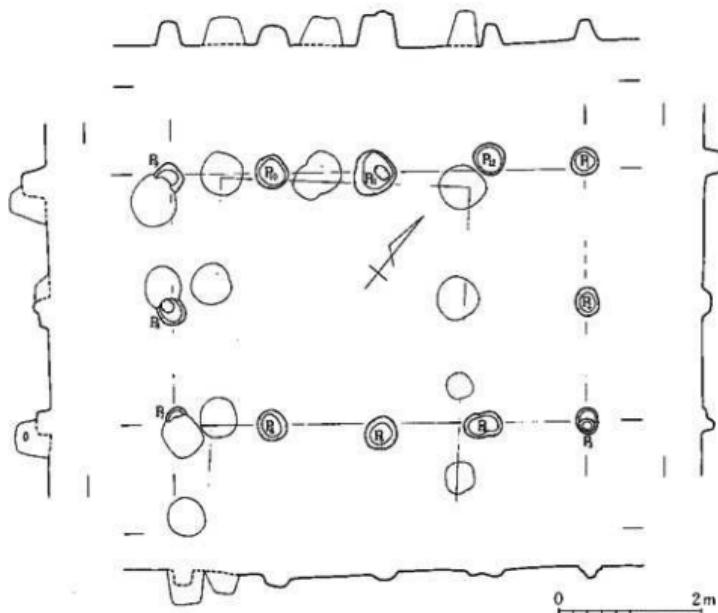
挿図87 KID 建物址21

② 堀立柱建物址22 (挿図88)

調査範囲南東端のC1r8を中心に検出した。堀立柱建物址18と重なり合っており、P<sub>11</sub>は堀立柱建物址18のP<sub>12</sub>と重複していたが切り合い関係は確認できなかった。南西梁は堀立柱建物址17に切られている。規模は桁行 5.8m、梁行 3.5m を測る、4×2間の堀立柱建物址である。桁行方向軸は N 50.5°E を示し、堀立柱建物址24と同方向、堀立柱建物址12とはほぼ同方向である。桁の柱間は 1.45m、梁の柱間は 1.75m を測る。柱掘方の平面形は直径40cm程の円形を成す。検出面よりの深さは比較的浅く、底部は平坦面を呈する。

遺物は何も出土しなかった。

時期は周囲の堀立柱建物址との関係から古墳時代後期後半である。



挿図88 KID 建物址22

#### ◎ 堀立柱建物址23 (挿図81)

調査範囲の南側、C1q10を中心検出した。53号住居址を切り、堀立柱建物址15のP<sub>7</sub>にP<sub>8</sub>を切られている。北西側梁は53号住居址覆土中にあり、精査したが本址の掘方は検出できなかった。3×3間の堀立柱建物址と判断した。規模は桁行5.6m、梁行5.2mを測る。桁行方向軸はN 34.5°Wを示す。柱間は北東側桁がすべて1.86mなのに対し、南西側桁は中央が2.25m、その西側の柱間が1.67mを測り狭い。梁行柱間は確認した南東側で1.73mを測る。掘方は円形の平面形で直径50cm前後を測る。壁は垂直に掘られている。P<sub>8</sub>、P<sub>9</sub>を除き柱掘方底部の一部がさらに掘凹められている。直径15cm程を測り、深さは底部より5~30cmである。

遺物は土師器坏片などが出土した。

時代は古墳時代後期後半に位置付けられる。

(佐合英治)

#### ◎ 堀立柱建物址24 (挿図89)

C1s5を中心62号住居址・小豎穴2を切って検出された。東西方向は4間、南北方向は未調査区にかかり2間を確認したにとどまる。東西方向6.1m、N 40°Eの側柱のみの堀立柱建物である。柱間は東西1.52m・南北1.35mを測り、柱掘方は径40~65cmの不整円形である。掘方は深さ、底部レベルともほぼ揃う。なお、P<sub>8</sub>の周囲には焼土が認められる。

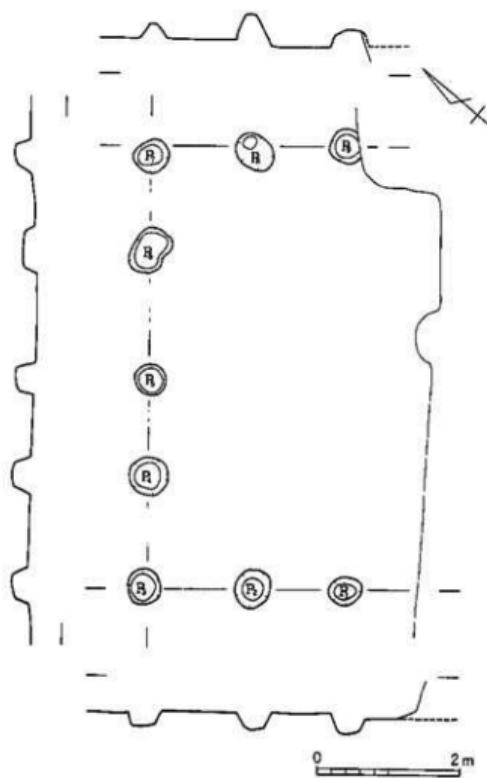
出土遺物は少なく時期の決定は難しいが、古墳時代後期に比定される。

#### ◎ 堀立柱建物址25 (挿図34)

C1n6を中心51号住居址に重複して検出された。未調査区にかかるため、南北方向3間を確認したにとどまる。南北方向N 40.5°Wを示し、柱間1.5m前後でほぼ等間隔に並ぶ。柱掘方は径約50cmの不整円形で深さも51~56cmと揃う。覆土は黒色土である。

出土遺物は少ないが、古墳時代後期の堀立柱建物址である。

(桜井弘人・馬場保之)



挿図89 KID 建物址24

### 3) 小 窫 穴

#### ① 小窫穴1 (挿図96)

調査範囲内西端のD:h付近に検出された。30号住居址に接し、土坑15に切られる。3.2×2.8mの不整形の窫穴である。壁高は10~15cmを測り、なだらかな傾斜をもつ壁面となる。底部はほぼ水平で、住居址の床面状である。

内部より、押型文土器片、黒曜石剥片、礫が出土し、縄文時代早期の遺構であり、隣接する30

号住居址と何らかの関連が考えられる。

なお、縄文時代早期の遺物は、本址と30号住居址のある周辺にのみ集中して出土し、調査範囲内の他所には該期遺物皆無の状況であり、舌状台地の端部にあたるこの一画にのみ人々の生活の跡を見い出すことができる。

(小林正春)

### ② 小堅穴 2 (挿図44)

C1u5を中心とした62号住居址と重複して検出された。当初住居址と考えたが、規模が同時期の他の住居址に比べかなり小さく、また床面も検出できなかったため小堅穴とした。本址の南東部は未調査区にかかり確認されていない。主軸方向 N1°Wを示す椿円形プランで、3.8m × 3.0mの規模である。検出面からの壁高は10~30cmをはかり、やや緩やかに立ち上がる。南壁下に周溝の一部が検出され、また北側部分は凹んでいる。土坑51に切られた穴の西側には焼土が若干認められた。

時代は出土遺物から縄文時代中期後半に属すると考えられる。

(桜井弘人・馬場保之)

## 4) 埋設土器

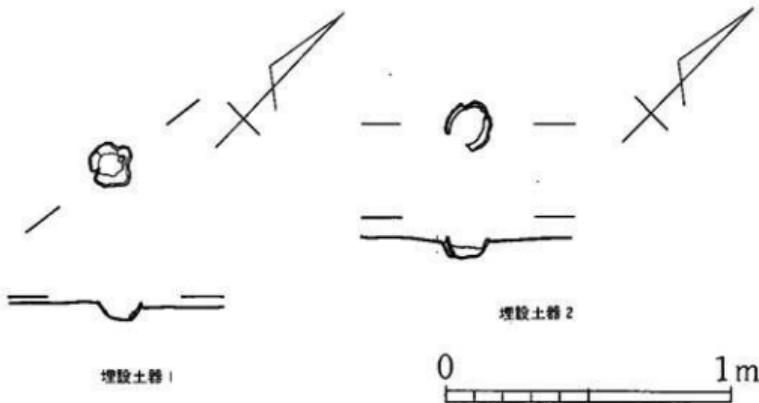
### ① 埋設土器 1 (挿図90)

調査範囲の南側、C1r8に確認した。掘立柱建物址17内の南端、掘立柱建物址16と土坑86の南西 1.2mに位置する。底部を欠いた縄文土器胴部が埋められていた。住居址に伴う埋甕の一部が残存し、露出したとも考えられ、周辺を精査したが、本址に伴なうと考えられる遺構は何も把握できず性格は不明である。

この土器は、縄文中期後半の深鉢である。

### ② 埋設土器 2 (挿図90)

調査区東端の遺構検出中にB2 i 12・13に跨がって検出された。方形柱列址3の北西側4mに位置する。縄文土器の胴部のみが埋められていた。住居址の埋甕の可能性があり、周辺を精査したが、確実に本址に伴なうと考えられる施設は何も把握できず性格は不明である。



挿図90 KID 埋設土器1・2

この土器は縄文時代中期後半の深鉢である。

(佐合英治)

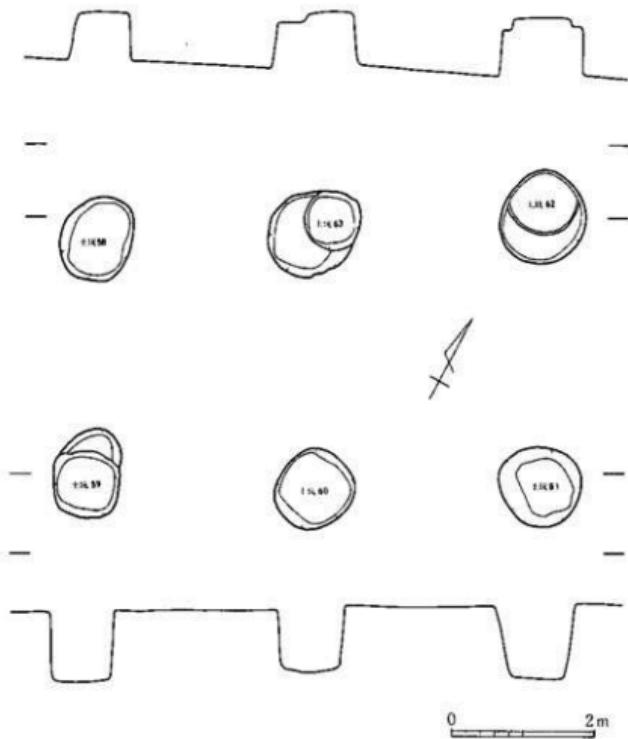
### 5) 方形柱列址

#### ① 方形柱列址 1 【土坑58~63】 (挿図91)

調査範囲の南東中央部、C1b12を中心とする大形の土坑が検出され方形柱列址となった。掘立柱建物址6・7号住居址に切られている。3個ずつが平行に並び、規模は掘方の中心から中心で $6.4 \times 3.9\text{ m}$ を測る。長軸方向はN $60^\circ\text{ E}$ を示す。長軸方向の掘方と掘方の間隔は、 $3.2\text{ m}$ を測る平面形は土坑59と土坑63は別の土坑と切り合い歪んでいるが、土坑62を除き方形に近い。掘方上面の直径は $94 \sim 126\text{ m}$ を測り、壁面はほぼ垂直に掘られている。底部は平坦である。柱痕跡等は認められなかったが、掘り方の配置等からいわゆる竪穴住居とは異なる建物であった可能性が強い。

遺物には縄文土器片、打製石斧、横刃型石器などがある。

時期は縄文時代中期後半に位置付けられる。



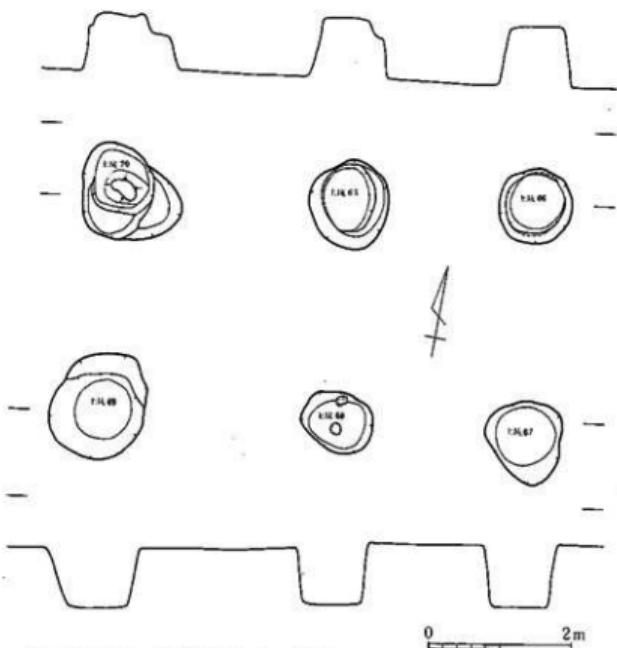
挿図91 KID 方形柱列址 1, (土坑58・59・60・61・62・63)

② 方形柱列址 2 [土坑65~70] (挿図92)

調査範囲の東端のC2h8を中心とする土坑群の中に検出された。北西隅が5号住居址に接する。方形柱列址1からは東へ7mを測る。ほぼ東西に3個ずつ並んで確認された。規模は6×3mを測る。長軸方向主軸はN80°Eを示す。長軸方向の掘方と掘方の間隔は西側が長く3.25m、東側が2.75mを測る。平面形は直径1~1.3mを測り、ほかの土坑の切り合いもあるため歪んでおり、不整円形を呈する。壁面はほぼ垂直であるが、部分的に袋状に壁中程がふくらみを持つ土坑もある。北側の掘方は3個とも底部近くに段を持つが、底部は皆平坦に近いものである。土坑68の中央部には柱の圧痕と考えられる凹みが確認された。本来の上屋構造は不明であるが、掘立柱建物址と考えられる。

出土遺物は比較的多い。縄文土器片・土製円板・打製石斧・凹石などがある。

時期は縄文時代中期後半に位置付けられる。



挿図92 KID 方形柱列址 2, (土坑65~66~67~68~69~70)

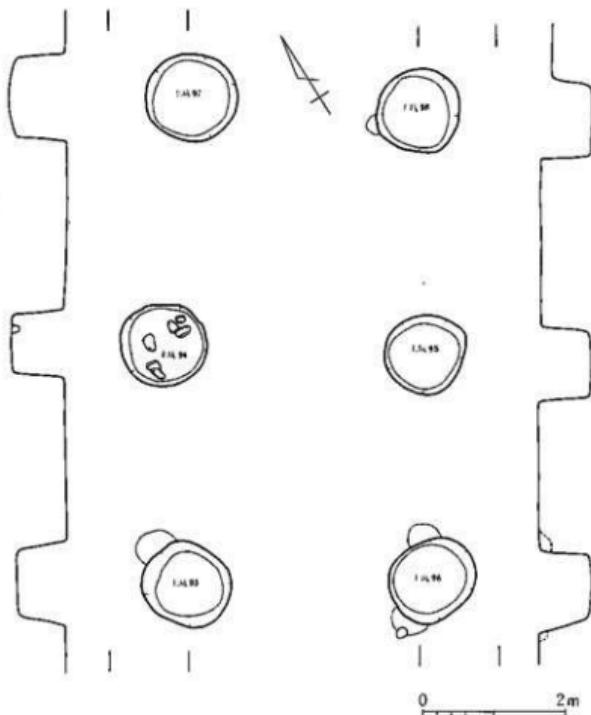
⑥ 方形柱列址 3 【土坑93~98】 (挿図93)

南東の調査区のはば中央に検出された。B2g 11を中心北東、南西方向に3個ずつ2列に並んでいる。規模は $6.6 \times 3.2$ mを測る。長軸方向主軸はN31°Eを示す。方形柱列址1・2が北から東へ軸を振っているのに対し逆側へ振っており時間差が感じられる。長軸方向の掘方と掘方の間隔は3.3mを測る。掘方平面形は直径1.25mを測るほぼ円型で調査した方形柱列址の中では一番整っている。壁面はほぼ垂直面を成し、底部は平坦である。方形柱列址1・2同様に掘立柱建物址と考えられる。

遺物は比較的多く出土した。縄文土器片・土偶の頭・打製石斧・横刃型石器などがある。

時代は縄文時代中期後半に位置付けられる。

(佐合英治)



挿図93 KID 方形柱列址 3, (土坑93・94・95・96・97・98)

## (6) 土 坑

調査範囲内全域から単純に土坑としたものだけで合計86基の土坑が発見された。個々については以下に記すおりであるが、それぞれの性格等を具体的にとらえることは困難である。

時代的には、縄文時代中期後半のものが主体となり、住居址との強い関連を窺うことができる。また、縄文時代中期初頭に位置づけられるものも、本遺跡の大きな特徴を示すものとして位置づけることができる。

当然、住居址など全遺構を統合した検討が必要であるが、本遺跡（集落）の中で大きな意味を持つ遺構群であるといえる。

（小林正春）

### ① 土坑1（挿図96）

C2c23に位置し、21号住居址に上部を削られ、北側壁のみが本来の高さを残している。また、東側は21号住居址の柱穴に切られる。1.4×1.3mの不整楕円形を呈し、底部はほぼ平坦であるが、南側へわずかに傾斜している。深さは70cmを測り、壁面はゆるやかに立ち上がり、断面形は逆台形となる。

覆土中より、沈線文を施した縄文時代中期後半の土器片、黒曜石剥片、硬砂岩の小型打製石斧が出土しており、時期は縄文時代中期後半である。

### ② 土坑3（挿図96）

D1w6に位置し掘立柱建物址20の柱掘方に切られる。1.5×0.7mの不整長方形を呈し、底部はほぼ平坦であるが、深さは最深部でも16cmと浅く、断面形は皿状を呈する。

灰色粘質土の覆土中から、縄文時代中期の土器片と掘立柱建物址20に関係するとみられる須恵器・土師器の小片が出土しているが、時期の確定はできない。

### ③ 土坑4（挿図96）

D1x6に位置する。1.4×0.5mの不整長方形で、東側壁下中央附近に50×40cmの楕円形の落ち込みがあり2段となる。深さは下段底部でも20cm、それ以外は16cmと浅い。壁はほぼ垂直に立ちあがる。

灰色粘質土に黄色土が混った覆土の中からわずかに土器片・黒曜石剥片が出土しているが、時期決定はできない。

### ④ 土坑5（挿図96）

D2m1に位置し、南壁は1号住居址に切られる。5.9×2.5mを測りきわめて大きな不整形の土坑である。底面、壁面ともに凹凸があり、不規則である。深さは最深部で60cmを測り、

断面形も不整形である。

遺物の出土はなく時期は不明である。

⑤ 土坑6 (挿図29)

C2d14に位置し、土坑7と切り合うが新旧関係は不明である。 $0.6 \times 0.5 m$ の不整円形と想定される。底部はほぼ平坦で深さ65cmを測る。南側の壁はおおきくえぐられ、北側は垂直に立ちあがるため、断面形は台形状となる。

覆土中からは横刃型石器が1点出土したのみであり、時期は不明である。

⑥ 土坑7 (挿図29)

C2d14に位置し、土坑6・8・9と切りあうが新旧関係は不明である。想定  $1.0 \times 0.9 m$  の楕円形で、底部はほぼ平坦で深さ30cmを測るが、ほぼ中央に46号住居址の柱穴とみられる穴が認められた。北西の壁はえぐられており、他は垂直に立ち上がり断面形は台形状となる。

出土遺物は皆無で時期等不明である。

⑦ 土坑8 (挿図29)

C2d10に位置し、土坑7と切り合うが新旧関係は不明である。想定の  $0.8 \times 0.7 m$  の楕円形は27cmを測る。断面形は中央部がやや凹む鍋形を呈する。

出土遺物はなく時期は不明である。

⑧ 土坑9 (挿図29)

C2e14に位置し、土坑7・10と切り合うが新旧関係は不明である。想定で  $0.6 \times 0.4 m$  の不整楕円形をなし、底部は平坦で深さは50cmを測る。北壁が大きくえぐり込まれ、南壁は垂直に立ちあがり、断面形は台形状となる。

出土遺物はなく時期等不明である。

⑨ 土坑10 (挿図29)

C2e14に位置し、土坑9と切り合うが新旧関係は不明である。想定で  $1.3 \times 0.9 m$  の不整楕円形を呈し、底部はほぼ平坦で深さは26cmを測る。比較的ゆるやかに立ち上がる北壁の他はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は逆台形である。

出土遺物はなく時期等不明である。

#### ⑩ 土坑11 (挿図98)

D2k6の30号住居址内に位置する。当初住居址と別造構と考えたが、30号住居址覆土と同様の漆黒色土が入り、総体で住居址と一体の施設と判断される。

#### ⑪ 土坑12 (挿図95)

C2f5に位置し、 $1.2 \times 0.8\text{ m}$ の不整楕円形を呈する。底部は平坦で深さ50cmを測る。壁は丸味をもちらながらも急角度に立ち上がり断面は鍋形を呈す。覆土の3分の2までに10~35cmの疊が多数含まれていた。

遺物は比較的多く、縄文時代中期土器・横刃型石器・剥片石器などがあり、土器には器形の知れる深鉢3個体分もある。

時期は縄文時代中期後半である。

#### ⑫ 土坑13 (挿図96)

C2f11に位置し、44号住居址の床面で検出され掘立柱建物址8の柱掘方に切られる。想定 $1.0 \times 0.9\text{ m}$ の不整円形で、深さは住居址床面から30cmを測る。底部はやや西に傾くが、平坦である。壁は北側がほぼ垂直に立ち上がり、断面は逆台形を成す。

遺物の出土は比較的多く、縄文時代中期土器・打製石斧・横刃型石器などがあり、縄文時代中期に位置づけられるが総体からみて、44号住居址に関連する施設の可能性が強い。

#### ⑬ 土坑14 (挿図95)

D1t10に位置し、径75cmの不整円形である。底部には凹凸があり整っていない。深さは最深部でも14cmとごく浅く、壁面はゆるやかで、断面は皿状を呈する。

出土遺物には、泥線文系の深鉢1個体分がある。ほかに頭部と右足を欠く小型の土偶が出土しており、縄文時代中期初頭の遺構である。

#### ⑭ 土坑15 (挿図95)

D2h7に位置し、17号住居址のカマドに切られるが、 $1.6 \times 1.4\text{ m}$ の不整形と想定される。底部はおおむね平坦で深さ35cmを測る。確認できた壁面は、丸味をもちらながらも比較的急角度で立ち上がり断面は舟形を成す。底部中央に径30cm程の花崗岩自然石が置かれる。

出土遺物は比較的多く、底部を欠く沈線文系の深鉢・黒曜石片などがある。出土遺物から縄文時代中期初頭に比定される。

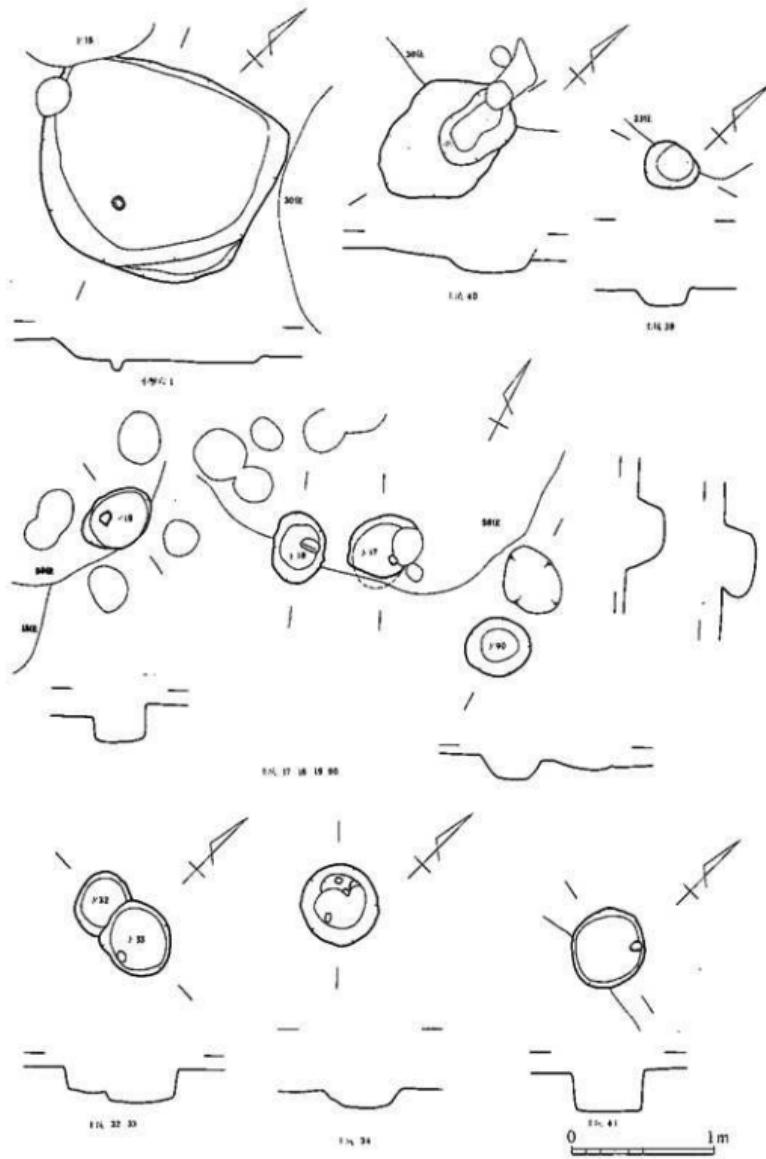


插圖94 KID 小窯穴 1, 土坑17-18-19-32-33-34-39-40-41-90

⑮ 土坑16 (挿図98)

C1q9に位置し、掘立柱建物址15・17の柱掘方に切られる。想定で $1.6 \times 0.5\text{m}$ の長楕円形を呈する。深さは20cmと比較的浅く、壁面は比較的急角度で立ち上がる。断面は皿状を成す。

出土遺物として、漆膜が重層となって出土し、漆器が重ねて埋置されたと考えられる。また、種類はわからないが若干の骨が出土しており、古墳～中世の遺構で、中世の可能性が強い。

⑯ 土坑17 (挿図94)

C1w14・58号住居址の柱穴を切って検出した。 $1.0 \times 0.8\text{m}$ の不整楕円形を呈する。底部は北西にむかって多少傾斜しており、深さは北西壁直下で40cmを測る。壁は東南側がえぐられ、北西側がゆるやかに立ち上がるため、断面形は不整合形状を呈する。

出土遺物には、縄文・陸帯文・沈線文などを施した土器片・横刃型石器などがあり、縄文時代中期初頭に位置づけられる。

⑰ 土坑18 (挿図94)

C1w14に58号住居址の壁を切って検出した。 $1.0 \times 0.7\text{m}$ の不整楕円形を呈す。底部は平坦で深さは50cmを測る。壁面はゆるやかに立ち上がり、断面は逆台形を成す。

覆土からは沈線文を施した土器片・横刃型石器・黒曜石が出土しており、縄文時代中期初頭に位置づけられる。

⑱ 土坑19 (挿図94)

C1v13の59号住居址の床面で検出され、住居址との新旧関係は不明である。 $1.0 \times 0.8\text{m}$ の不整楕円形を呈する。床面の中央部がやや低く60cmを測り、断面は鍋形を成す。

覆土からは陸帯と沈線文を施した土器片が出土し、縄文中期初頭に位置づけられる。

⑲ 土坑20 (挿図96)

C1s16の54号住居址床面上に検出し、北側で炉址に切られている。 $1.5 \times 1.4\text{m}$ の不整形で底部は南北で二段となる。最深部で40cmを測る。南東側の壁は、中程に稜を持ちながらゆるやかに立ちあがりそれ以外も緩やかである。

覆土より土器片が出土しており、縄文時代中期後半に位置づけられる。

⑳ 土坑21 (挿図96)

D1t4の27号住居址南隅の床面上で検出した。 $1.3 \times 1.1\text{m}$ の不整方形を呈し、深さは50cmを測る。底部は南北分壁際から中央にわずか傾斜しているが、ほぼ平坦である。壁面は、南西側がほぼ垂直に立ち上がり、他の面も比較的急角度である。

覆土より、出土遺物は比較的多く、土器片・楕円形のミニチュア土器・凹石・打製石斧・横刃型石器などがあり、縄文時代中期後半に位置づけられるが、27号住居址と関連する施設である可能性が強い。

#### ◎ 土坑22（挿図98）

C1q12に位置し、53・61号住居址を切っていたものと思われるが、住居址を掘り下げた後に検出したため、全体形・規模とも不明確である。深さは20cm程度で比較的浅く壁面もゆるやかに底部へつながり、断面形は浅い鉢状をなす。

覆土より、土器片・須恵器の坏片・横刃型石器・硬砂岩剥片が出土しており、時期の特定はできない。

#### ◎ 土坑23（挿図95）

C1p25に位置し、 $0.7 \times 0.6 m$  の楕円形を呈す。底部はゆるやかな曲面を成しそのまま壁面へつながる。深さは10cmとごく浅く、断面は浅鉢形をなす。南東の壁際に径15cm・深さ20cmほどの小穴を持つが、性格は不明である。

出土遺物は比較的多く、縄文及び沈線文を施した深鉢1個体があり、縄文時代中期初頭に位置づけられる遺構である。

#### ◎ 土坑24（挿図95）

C1q24に位置し、 $0.7 \times 0.6 m$  の楕円形を呈する。底部は緩やかな曲面を成し壁面へつながる。深さは15cmとごく浅い。断面は浅鉢形をなす。

出土遺物には沈線文系の土器と打製石斧片・黒曜石片・粘土塊があり、縄文時代中期初頭に位置づく遺構である。

#### ◎ 土坑25（挿図20）

C1o21に位置し、南側の一部は、未調査区にかかる。また北側は36号住居址の柱穴に切られる。想定で $1.7 \times 1.1 m$  の楕円形を呈する。底部はほぼ平坦で深さ74cmを測る壁は全体的に緩やかに立ち上がり、断面は逆台形となる。

出土遺物には、土器片・打製石斧・横刃型石器があり、縄文時代中期後半に位置づけられる。

#### ◎ 土坑26（挿図95）

C1q23に位置し、36号住居址の柱穴と切り合うが新旧関係は不明である。想定で径20mの不整円形を呈す、底部は平坦で深さ70cmを測る。断面形は逆台形を成す。覆土は焼土を含み10~40cmの礫が混入する。



挿図95 KID 17号住居址カマド, 土坑12・14・15・23・24・26・29・31・37

遺物は比較的多く礫間から土器片・打製石斧・横刃型石器・黒曜石が出土し、時期は縄文時代中期後半である。

◎ 土坑27 (挿図98)

D2d9の7号住居址床面下・14号住居址に切られて検出された。想定  $1.9 \times 1.4\text{m}$  の不整楕円形、平坦な底部までの深さは37cmを測る。壁面は比較的急な傾斜で立ち上がり、逆台形を成す。

出土遺物はなく時期は不明である。

◎ 土坑29 (挿図95)

C1u11に位置し、 $0.95 \times 0.8\text{m}$  の不整楕円形で、底部の中央がやや低くなり深さは15cmとごく浅い。ほぼ垂直に立ち上がる北壁以外は緩やかで、断面は舟底形を成す。

暗褐色土の覆土からは、沈線文を施した深鉢の口縁が2個体分と横刃型石器・土師器高壺が出土した。土師器は後の混入品であり、縄文時代中期後半に位置づく遺構である。

◎ 土坑31 (挿図95)

C2k17に位置し、 $0.6 \times 0.45\text{m}$  の不整楕円形で、底部は緩やかな曲面を成しそのまま壁面へつながり、深さは15cmと比較的浅い。東側の壁は稜を持ちながら他の壁より緩やかに立ち上がる。

覆土からは、沈線文を施した小型深鉢1個体分・横刃型石器・石鐵・打製石斧・黒曜石・硬砂岩が出土し、縄文時代中期後半に位置づけられる。

◎ 土坑32 (挿図94)

D2m3に位置し、土坑33に切られる。径  $0.8\text{m}$  の円形と想定できる。底部の中央がやや凹み、深さは40cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、断面は鍋形を呈す。

出土遺物は比較的多く、土器片・横刃型石器剥片などがあり、縄文時代中期初頭に位置づけられる。

◎ 土坑33 (挿図94)

D2m2に位置し、土坑32を切る。径  $1.0\text{m}$  の円形と想定される土坑である。底部の中央がやや凹み深さは50cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、断面は鍋形を成す。

出土遺物は少なく、土器小破片・硬砂岩及び黒曜石の剥片があるが、遺構の時期は確定できない。

◎ 土坑34 (挿図94)

D1r1に位置し、径  $1.1\text{m}$  の円形を呈す。底部は中央が凹み、そのまま壁へつながる。深さは最

深部で25cmを測る。北西の壁には稜がある。

出土遺物はあまり多くない。若干の土器片と横刃型石器があり、これらから縄文時代中期初頭に位置づけられる。

#### ㊱ 土坑36 (挿図96)

C1t21に位置し、ロームマウンドを切り、 $1.6 \times 1.3\text{ m}$  の不整隅丸方形を呈す。土坑中央に底部からさらに60cmの深さを測り北側の壁に稜をもつ小穴がある。土坑の底部はこの小穴にむかってやや傾斜しており、深さは検出面から50cmを測る。壁面は比較的急角度で立ち上がる。

出土遺物には土器片と敲打器・砥石があり、縄文時代中期後半の遺構である。

#### ㊲ 土坑37 (挿図95)

C1m19に位置し、12号住居址の床面下で検出した。 $1.15 \times 1.0\text{ m}$  の楕円形を呈し、底部を多数の小穴が切り整っていない。深さは最深部で40cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物はなく、時期は不明である。

#### ㊳ 土坑38 (挿図98)

D2f1に位置し、22号住居址にきられて検出し、想定で径 $1.5\text{ m}$  の円形を呈する。曲面をなす底部は高低差10cmで東から西にむかって傾斜し、最深部の西壁直下で40cmを測る。壁面は底部がそのまま立ち上がった状態で形成されている。

出土遺物は、硬砂岩片・凹石各1個があるのみで時期は不明である。

#### ㊴ 土坑39 (挿図94)

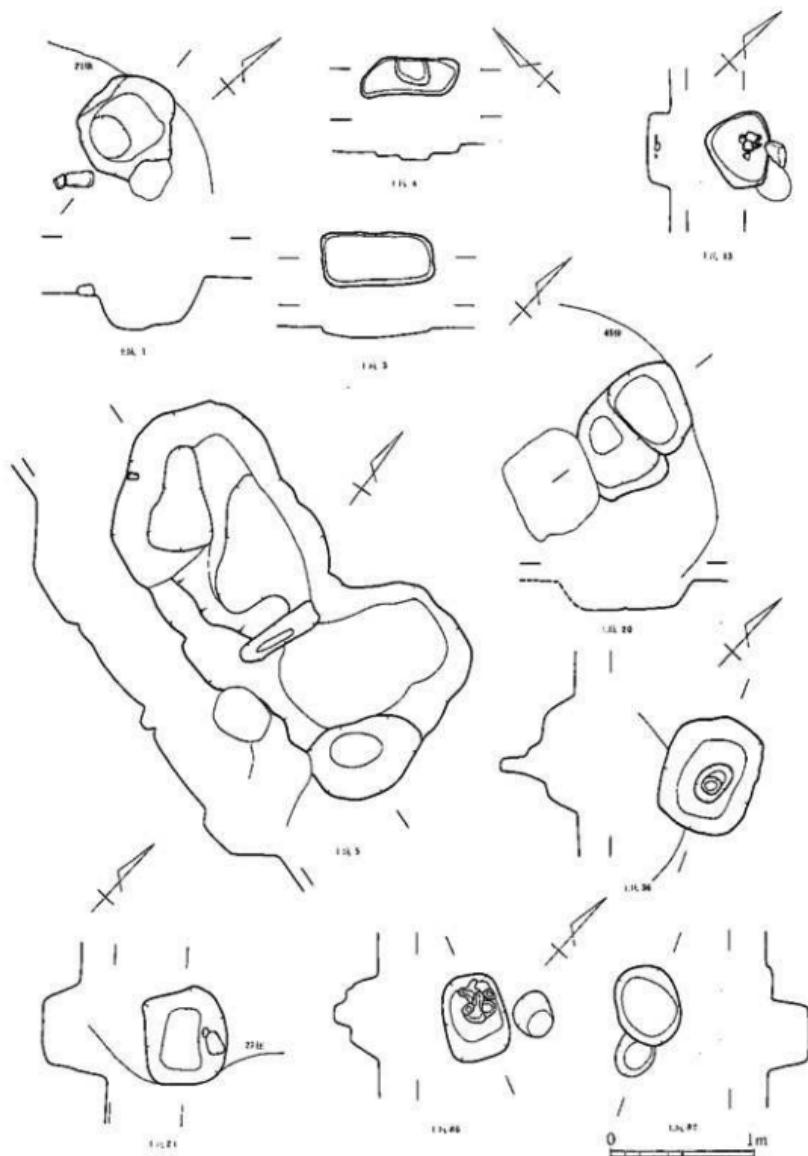
D2f2に位置し、23号住居址に切られて検出した。想定で径 $0.8\text{ m}$  の円形を呈する。底部は平坦で深さ30cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる北側以外はゆるやかに立ち上がり、断面は逆台形を成す。

出土遺物はわずかに土器片2点があるのみであるが、縄文時代前期に位置づく可能性が強い。

#### ㊵ 土坑40 (挿図94)

D2j4に位置し、建物址6の柱掘方に切られ、さらに30号住居址と切り合うが新旧関係は不明である。 $2.0 \times 1.5\text{ m}$  の不整楕円形を呈し、全体を浅く掘り込みさらに北側へ深く掘り込んで30cmの深さを測る。底部は丸みを持つ。掘り込み面で焼土が確認された。

出土遺物には、30号住居址に関連する押型文土器の破片と中期の土器片・花崗岩・硬砂岩片があり、縄文時代早期に位置づけられる可能性が強い。



挿図96 KID 土坑1・3・4・5・13・20・21・36・86・87

④ 土坑41 (挿図94)

C2f16に位置し、39号住居址を切って検出した。 $1.1 \times 1.0\text{ m}$ の円形を呈する。底部は平坦で深さ60cmを測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がるため、断面はほぼ長方形を成す。

出土遺物には、土器片・打製石斧・横刃型石器があり、縄文時代中期初頭に位置づけられる。

④ 土坑42 (挿図98)

C2a12に位置し、概ね径 $1.0\text{ m}$ の円形を呈する。底部は中央が凹み、深さは20cmと比較的浅い。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面は鍋形を成す。

出土遺物はわずかに土器片と横刃型石器があるが、時期は不明である。

④ 土坑43 (挿図98)

C2b12に位置し、径 $1.0\text{ m}$ の円形を呈する。底部は平坦で深さ15cmと浅い。壁はゆるやかに立ち上がり、断面は皿形を成す。

出土遺物はなく、時期不明である。

④ 土坑44 (挿図98)

C2f17に位置し、34号住居址と切り合って検出したが、新旧関係は不明である。34号住居址の埋甕を先に調査したため東側の壁は不明である。想定 $2.0 \times 1.7\text{ m}$ の椭円形を呈する。底部は平坦で深さは40cmを測る。壁面は比較的急角度で立ち上がり、断面は逆台形を成す。

出土遺物は土器片と横刃型石器・黒曜石があるが、時期は不明である。

④ 土坑45 (挿図44)

C1r7に位置し、掘立柱建物址17の柱掘方に切られ径 $1.1\text{ m}$ の円形を呈する。底部は平坦で深さは55cmを測る。壁面は比較的ゆるやかに立ち上がり、断面は逆台形を成す。

出土遺物はなく、時期は不明である。

④ 土坑46 (挿図44)

C1s7に位置し、掘立柱建物址17の柱掘方に切られる。 $1.4 \times 1.0\text{ m}$ の椭円形を呈する。底部は南北に2段にわかれ、深さはそれぞれ、80・90cmを測る。また底部は西から東へやや傾斜している。壁面はほぼ垂直に立ち上がる北側以外はゆるやかに立ち上がる。

出土遺物はなく、時期は不明である。

④ 土坑47 (挿図44)

C1t7に位置し、掘立柱建物址17の柱掘方に切られロームマウンドと切り合うが、新旧関係は

不明である。想定で径 1.2 m の円形を呈する。底部は平坦で深さ 80cm を測る。壁面はゆるやかに立ち上がり、断面は逆台形を成す。

出土遺物はなく、時期は不明である。

④ 土坑48 (挿図44)

C1t6 に位置し、土坑47・49に切られる。切り合が多い、本来の形を想定することができない。わずかに残る東南側の底部で、判断する深さは 45cm である。壁面はゆるやかに立ち上がる。

出土遺物は、土器片及び、打製石斧があり、縄文時代中期後半の遺構と考えられる。

④ 土坑49 (挿図44)

C1s6 に位置し、掘立柱建物址24の柱方に切られ、土坑48を切る。想定で概ね径 0.9 m の円形を呈する。底部はほぼ平坦で深さ 40cm を測る。壁面は北側でやや急傾斜で立ち上がる以外はゆるやかな面をなし、断面は逆台形を成す。

出土遺物には、土器が 5 片あり、時期は中期と考えられるが、断定はできない。

④ 土坑50 (挿図44)

C1v5 に位置し、小窓穴 2 の北壁で確認した。径 0.9 m の円形を呈する。底部はほぼ平坦である。確認した壁高は 18cm 程度で比較的急角度に立ち上がる。

出土遺物はなく、時期不明である。

④ 土坑51 (挿図44)

C1t5 に位置し、小窓穴 2 の内部に確認したが、新旧関係は不明である。1.3 × 1.0 m の不整円形を呈する。底部は平坦であるが北側へ傾斜している。残存する壁高は 20cm 程度で、壁面は北側がほぼ垂直のはかは、比較的ゆるやかである。

出土遺物はなく、時期等不明である。

④ 土坑52 (挿図44)

C1s5 に位置し、土坑53に切られ、0.8 × 0.7 m の梢円形を呈す。底部は平坦で深さは 50cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面はほぼ長方形を成す。

出土遺物はなく、時期等不明である。

④ 土坑53 (挿図44)

C1s5 に位置し、土坑52、小窓穴 2 を切る。1.4 × 1.2 m の不整梢円形を呈すると考えられる。底部はほぼ平坦で深さは 90cm を測る。北東側の壁は垂直に立ち上がる以外は比較的ゆるやかに立

ち上がり、断面は逆台形を成す。  
出土遺物はなく、時期等不明である。

◎ 土坑54 (挿図44)

C1r5に位置し、北側は不整楕円形の落込みと切り合い、上部の壁が確認できなかつたが、想定  $1.1 \times 1.0$ m の楕円形を呈する。底部はほぼ平坦で深さは80cmを測る。壁面は比較的ゆるやかで、断面は逆台形を成す。覆土からは、唐草紋の土器片が3片と打製石斧が出土した。

出土遺物には縄文時代中期土器片3点と打製石斧があり、それらから縄文時代中期後半に位置づけられる。

◎ 土坑55 (挿図44)

C1r4に位置し、掘立柱建物址24の柱掘方に切られ、土坑56を切る。 $1.2 \times 1.0$ m 不整楕円形と想定したが、東隅の壁面上部は楕円形のおち込みのため確認できなかつた。底部は南北にくびれたひさご形になるが、西から東へ傾斜しており、深さはそれぞれ80・60cmを測る。西南側の壁がえぐり込まれている他は、ほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物には、縄文時代中期土器片、横刃型石器、黒曜石剥片があり、それらから縄文時代中期後半に位置づく遺構である。

◎ 土坑56

C1r4で土坑55に切られて検出した。 $1.6 \times 1.0$ m の不整楕円形を呈する。北西側が残るだけの底部は土坑55にむかってやや傾斜しているがほぼ平坦で深さ45cmを測る。壁面はゆるやかに立ち上がり、断面は逆台形を成す。

出土遺物はなく、時期等不明である。

◎ 土坑57 (挿図44)

C1q5に位置し、掘立柱建物址24の柱掘方に切られる。 $3.2 \times 1.5$ m と比較的大きな土坑で、底部は凸凹を持ちながら南へ向かってやや傾斜しており、深さは最深部で50cmを測る。壁面はゆるやかに立ち上がっている。

出土遺物には、縄文時代中期土器片、磨製石斧があり、縄文時代中期初頭に位置づけられる可能性があるが断定はできない。

◎ 土坑64 (挿図98)

C1r17に位置し、 $1.2 \times 1.0$ m の不整楕円形を呈する。底部は南東から北西へ3段となり、深

さはそれぞれ27・20・10cmを測る。壁面はゆるやかに立ち上がっている。

出土遺物には、縄文時代中期土器片・横刃型石器があり、縄文時代中期後半に位置づく遺構の可能性が強いが断定はできない。

#### ◎ 土坑71 (挿図97)

C1i8に位置し、 $0.8 \times 0.6$ mの不整梢円形を呈し、深さは10cmとごく浅い。底部は丸みをもちそのまま壁面となり、断面は半円形を成す。

覆土中には比較的大きな石を含み、遺物としては縄文時代中期土器片・硬砂岩・黒曜石石錐が出土し、それらから縄文時代中期後半の遺構と考えられる。

#### ◎ 土坑72 (挿図97)

C2i8に位置し、土坑73に切られる。径0.9mの円形を呈し、深さは10cmとごく浅い。底部は丸みをもちそのまま壁面となり断面は半円形を成す。

出土遺物には、縄文時代中期土器片と横刃型石器があり、それらから縄文時代中期後半に位置づくと考えられるが断定はできない。

#### ◎ 土坑73 (挿図97)

C2h8に位置し、土坑72を切る。径1.0m程の円形を呈する。底部は平坦で深さ40cmを測る。ほぼ垂直に立ち上がる西側壁面の他は比較的ゆるやかに立ち上がり、断面は逆台形を成す。

出土遺物には、縄文時代中期土器片・横刃型石器があり、縄文時代中期後半に位置づく遺構の可能性が強いが断定はできない。

#### ◎ 土坑74 (挿図97)

C2i9に位置し、土坑78を切る。径0.8m程の円形を呈する。深さ20cmで、中央がやや凹みそのまま壁面となり立ち上がり、断面は浅鉢形を成す。

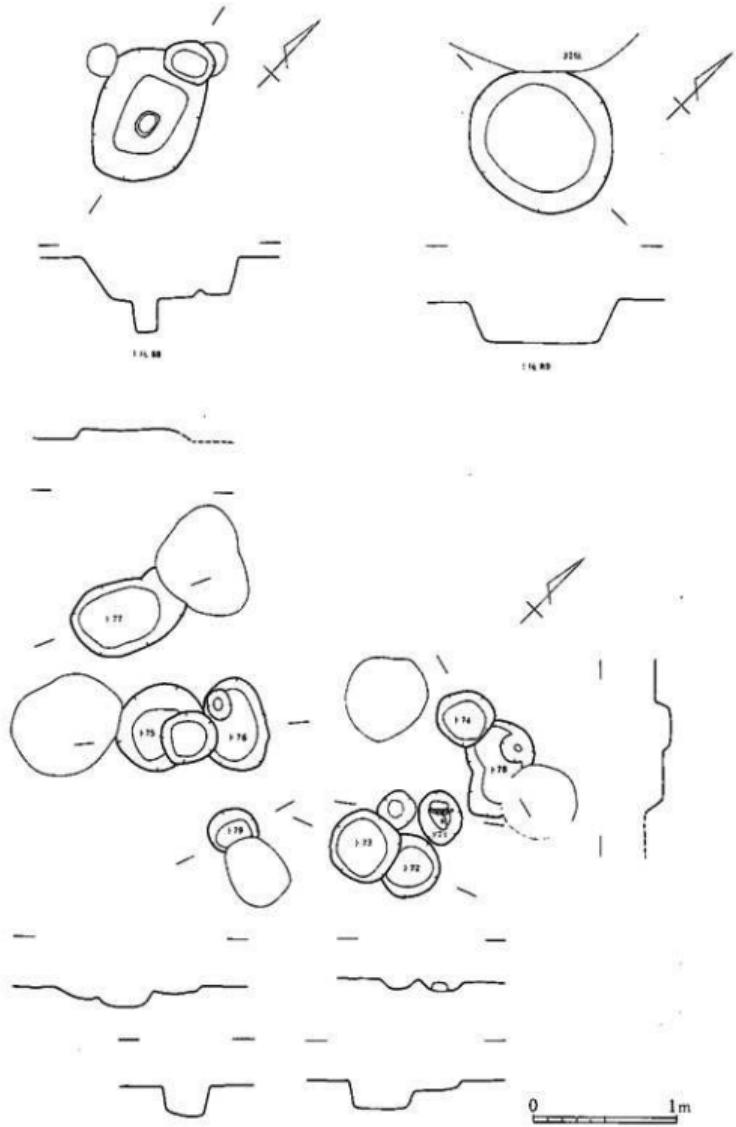
出土遺物はなく、時期等不明である。

#### ◎ 土坑75 (挿図97)

C2g9に位置し、方形柱列址の掘方を切り、小さな穴に切られる。また、土坑76と重複するが、新旧関係は不明である。1.6×1.2mの梢円形を呈し、深さは15cmを測り、底部は丸みをもちそのまま壁面として立ち上がり、断面は浅鉢形を成す。

覆土からは爪型紋を施した土器片が出土した。縄文時代中期である。

出土遺物には、縄文時代中期土器片があり、それらから縄文時代中期後半の遺構と考えられる。



挿図97 KID 土坑71・72・73・74・75・76・77・78・79・88・89

◎ 土坑76 (挿図97)

C2g9に位置し、小さな穴に切られ土坑75と重複するが、新旧関係は不明である。 $1.3 \times 0.9\text{m}$ の不整楕円形を呈する。底部は深さ10cmとごく浅く、丸みを持ちながら壁面としてゆるやかに立ち上がる。西壁際に $40 \times 30\text{cm}$ 程度のおち込みを持つが性格は不明である。

出土遺物には縄文時代中期土器片があり、それから縄文時代中期後半の遺構と考えられる。

◎ 土坑77 (挿図97)

C2g9に位置し、方形柱列址の掘方と重複する。 $1.6 \times 1.0\text{m}$ の不整楕円形を呈する。底部は平坦で15cmとごく浅い。壁面は北側がゆるやかに立ち上がる以外はほぼ垂直に立ち上がり断面は舟形を成す。

出土遺物はなく、時期等不明である。

◎ 土坑78 (挿図97)

C2i8に位置し、土坑74に切られ、方形柱列址の掘方と重複するが、新旧関係は不明である。 $1.4 \times 0.8\text{m}$ の不整形を呈する。底部は平坦で深さ30cmを測る。北側壁際に小穴を持つ。壁面は比較的ゆるやかで、断面は逆台形を成す。

出土遺物はなく、時期等不明である。

◎ 土坑79 (挿図97)

C2h8に位置し、方形柱列址の掘方と重複するが、新旧関係は不明である。径 $0.7\text{m}$ の円形を呈し、底部は南から北へやや傾斜をし、深さは最深部で40cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。

出土遺物はなく、時期等不明である。

◎ 土坑80 (挿図52)

C2h23に位置し、溝状の落ち込みに北側の上部を切られる。 $1.5 \times 1.1\text{m}$ の不整楕円形を呈する。底部はほぼ平坦で深さは20cmと比較的浅い。北側壁直下にはごく浅い落ち込みがみられる。断面は逆台形を成す。

出土遺物には、縄文時代中期土器片・チャート片があり、縄文時代中期後半に位置づく遺構である。

◎ 土坑84 (挿図52)

C2h23に位置する。 $0.8 \times 0.6\text{m}$ の不整楕円形で、底部・壁面ともに凹凸があり整っていない。深さは最深部で34cmを測る。

覆土より出土した条線紋の土器1片から、縄文時代中期初頭とした。

出土遺物は、縄文時代中期土器片1点のみであるが、それによれば縄文時代中期初頭の遺構である可能性が高い。

㊂ 土坑85 (挿図98)

C2a7に位置し、径1.2mの円形を呈する。底部は平坦で深さは30cmを測るが、北東側には小穴があるが性格は不明である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、断面は長方形に近い。

遺物の出土はなく時期等不明である。

㊂ 土坑86 (挿図96)

C1r9に位置し、1.2×0.9mの隅丸方形を呈する。底部は小穴があり、凹凸がある。深さは最深部70cm、浅いところで44cmを測る。壁面は比較的急角度に立ち上がっている。

出土遺物には、縄文時代中期土器片・黒曜石剥片があり、それらから縄文時代中期後半に位置づく遺構である。

㊂ 土坑87 (挿図96)

C1s9に位置し、南側は別の土坑を切る。径1.0mの円形で深さは60cmを測る。底部は平坦で壁面は垂直に立ち上がり、断面はほぼ長方形を成す。

覆土から縄文時代中期の唐草紋の土器片が出土した。

出土遺物には、縄文時代中期土器片・黒曜石剥片があり、それらから縄文時代中期後半に位置づく遺構である。

㊂ 土坑88 (挿図97)

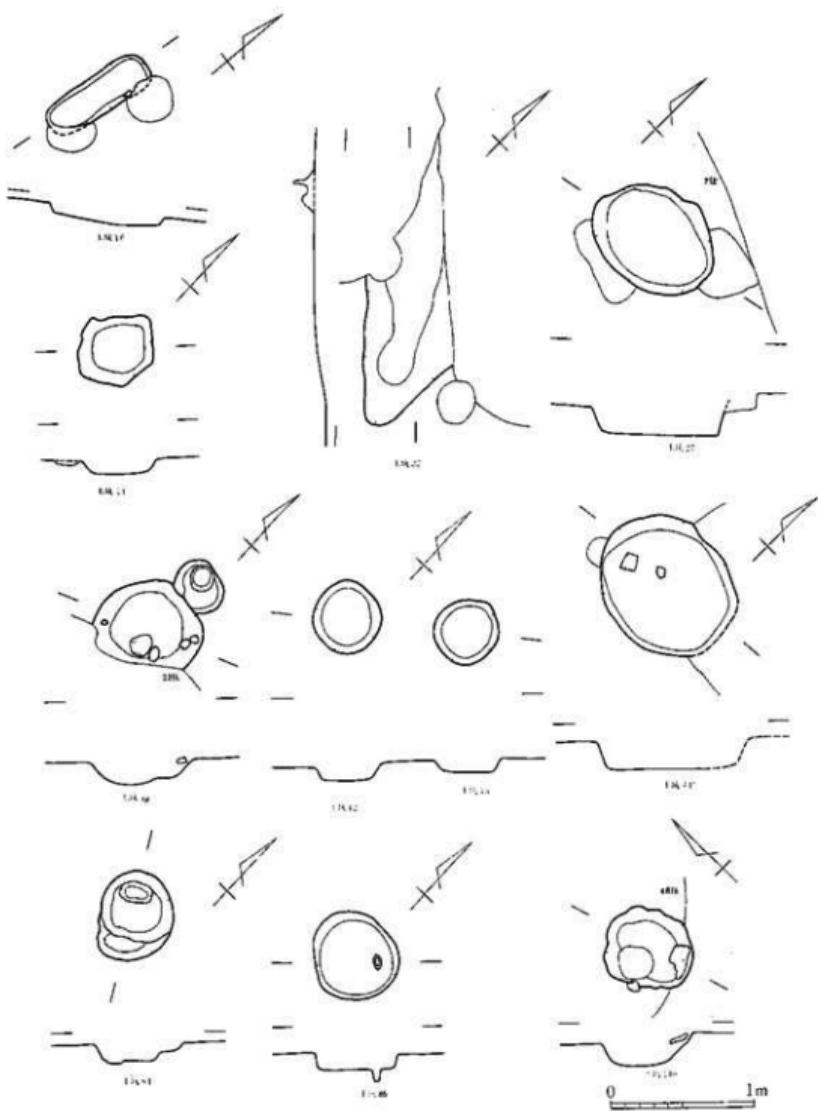
C1y18に位置し、掘立柱建物址1の柱掘方に切られる。1.8×1.4mの不整形円形を呈し、北側には70×60cmの小穴を持つ。底部は2つにわかれそれぞれ平坦で深さも50cmと同じ。南側の中央付近に底部から深さ40cmを測る小穴がある。壁面は比較的急角度で立ち上がる。

出土遺物には縄文時代中期土器片・磨石・黒曜石剥片があり、それらから縄文時代中期後半に位置づく遺構である。

㊂ 土坑89 (挿図97)

C2k21に位置し、2号住居址の床面下で検出した。32号住居址と切り合うが新旧関係は不明である。2.1×1.9mの楕円形を呈し、底部は平坦で65cmを測る。壁面は比較的急角度に立ち上がり、断面は逆台形となる。

出土遺物は多く、縄文時代中期土器片・横刃型石器・黒曜石剥片などがあり、それらから縄文



挿図98 KID 土坑11・16・22・27・38・42・43・44・64・85・110

時代中期後半に位置づく遺構である。

⑦ 土坑90 (挿図94)

C1x11に位置する。 $0.9 \times 0.8$  mの楕円形で深さは30cmを測る。断面は逆台形を成す。

覆石から爪型紋の土器片・黒曜石・緑泥岩が出土した。

出土遺物には、縄文時代中期土器片・黒曜石及び、緑泥片岩の剥片があり、それらから縄文時代中期後半に位置づく遺構である。

⑧ 土坑91 (挿図66)

C1i17に位置し、72号住居址と切り合うが新旧関係は不明である。 $1.5 \times 1.4$  mの隅丸方形を呈する。底は北東側でくびれ四字形になり、深さは20cmと比較的浅い。中央付近には10~15cm大の石が入った箇所があり、別の穴の可能性もあるが断定はできない。

出土遺物には、縄文時代中期土器片・打製石斧片・黒曜石剥片があり、それらから縄文時代中期後半の遺構といえる。

⑨ 土坑92 (挿図66)

C1h15に位置し、72号住居址を切る。 $0.6 \times 0.6$  mの隅丸方形を呈する。底部は平坦で深さは27cmを測る。壁面は垂直に立ち上がり、断面はほぼ長方形となる。

出土遺物には、縄文時代中期土器片・打製石斧片があり、それらから縄文時代中期後半に位置づく遺構といえる。

⑩ 土坑99 (挿図99)

B2f10に位置し、土坑100と重複するが、新旧関係は不明である。 $1.0 \times 0.6$  mの不整楕円形を呈する。30cmの深さを測る。底部は丸みをもつそのまま壁面となり立ち上がるため、断面は碗状になる。

出土遺物は比較的多く、縄文時代中期土器片・ビエス・エスキューがあり、それらから縄文時代中期後半の遺構といえる。

⑪ 土坑100 (挿図99)

B2g11に位置し、土坑99・101・109と重複するが、新旧関係は不明である。 $1.6 \times 1.5$  mの不整方形を呈する。深さ40cmの底部は平坦であり、ごくゆるやかに立ち上がる東壁とややゆるやかな西壁以外は確認できなかった。

出土遺物は比較的多く、縄文時代中期土器片があり、それらから縄文時代中期後半の遺構といえる。

◎ 土坑 101 (挿図99)

B2g11に位置し、土坑100・109と重複するが新旧関係は不明である。1.4×1.3mの不整形円形を呈する。底部は平坦で40cmを測り、壁面は比較的急角度に立ち上がり、断面は逆台形を成す。遺物の出土はなく、時期等不明である。

◎ 土坑 102 (挿図99)

B2f13に位置するが、南側は未調査となり、全体形は不明である。調査部分で 1.0×0.5m の半円形。底部は平坦で深さは15cmとごく浅い。断面は皿状を成す。また北壁には小穴があったが性格は不明である。

出土遺物には、横刃型石器があるが、時期決定には至らなかった。

◎ 土坑 103 (挿図99)

B2g13に位置し、径 0.7 m の円形を呈する。底部は中央がやや凹み深さは30cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、断面は鶴形になる。

遺物の出土はなく時期等不明である。

◎ 土坑 104 (挿図99)

B2h13に位置し、1.0×0.8 m の不整形を呈する。底部はほぼ平坦で深さは40cmを測る。東壁には稜があるためゆるやかであるが、他の面はほぼ垂直に立ち上がっている。

遺物の出土はなく時期等不明である。

◎ 土坑 105 (挿図99)

B2i14に位置し、0.9×0.8 m の不整形を呈する。底部はほぼ平坦で深さは40cmを測る。西壁がゆるやかに立ち上がる他は、ほぼ垂直に立ち上がり、断面は逆台形を成す。

遺物の出土はなく時期等不明である。

◎ 土坑 106 (挿図99)

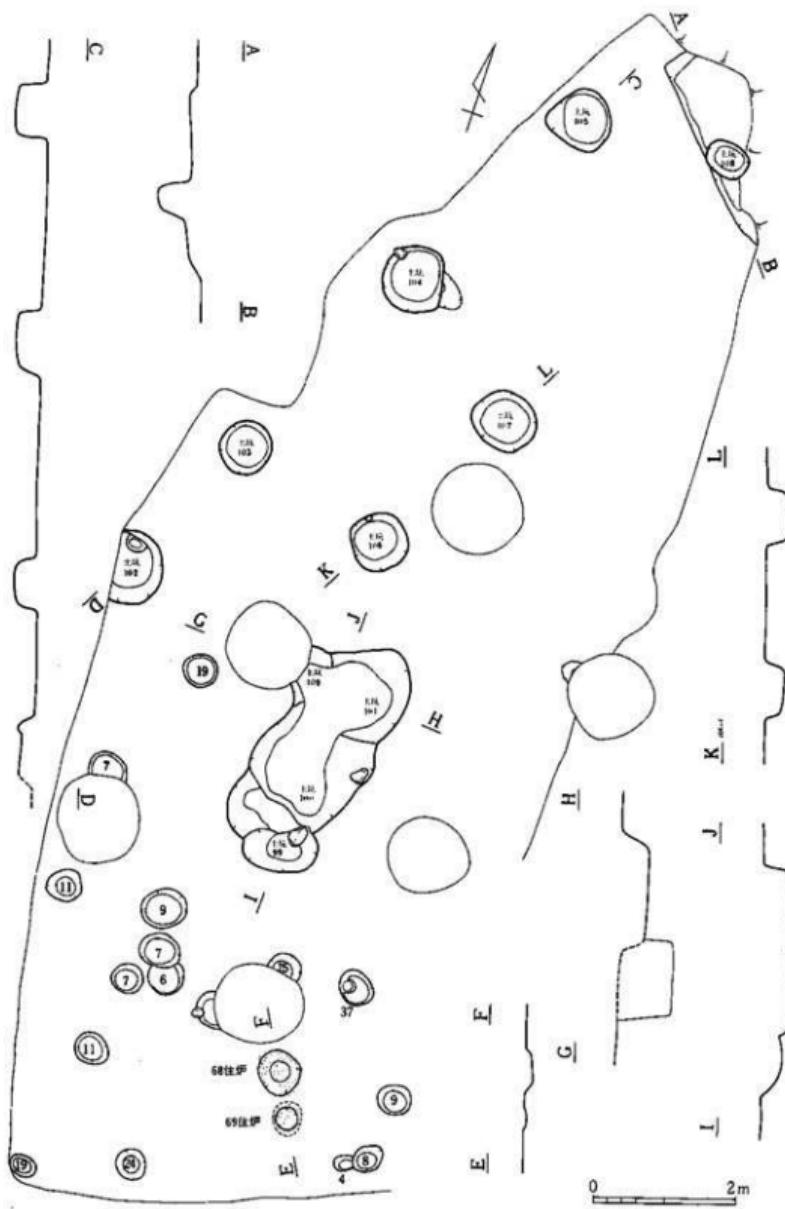
B2h12に位置し、0.8×0.8 m の隅丸方形を呈する。底部中央にはごく浅い落ち込みを持ち、南西へわずか傾斜するが平坦で深さ25cmを測る。壁面は比較的急角度で立ち上がり、北側の壁には稜がある。

出土遺物には横刃型石器があるが、時期の決定には至らなかった。

◎ 土坑 107 (挿図99)

B2h12に位置し、径 0.8 m の円形を呈する。底部は平坦で深さは30cmを測る。壁面は、比較的

插图99 KID 68号·69号房址, 土坑99·100·101·102·103·104·105·106·107·108·109



急角度で立ち上がり、断面は逆台形を成す。

遺物の出土はなく時期等不明である。

#### ◎ 土坑 108 (挿図99)

B2j 13に位置し、未調査区にかかり全体形は不明である。調査できたのは西南側の壁付近のみである。底部はほぼ平坦で深さ20cmと比較的浅い。底部の南隅には深さ50cmの小穴があるが性格は不明である。

覆土からは紋様不明の土器片・横刃型石器・打製石斧・黒曜石が出土した。縄文時代中期の遺構とした。

出土遺物には、縄文時代中期土器片・横刃型石器・打製石斧・黒曜石剥片があり、それらから縄文時代中期後半に位置づく遺構といえる。

#### ◎ 土坑 109 (挿図99)

B2g IIに位置し、方形柱列址の掘り方に切られ、土坑100・101と重複するが新旧関係は不明である。底部は平坦で深さ30cmを測る。壁面は比較的急角度で立ち上がり、断面は逆台形を成す。出土遺物には、縄文時代中期土器片があり、縄文時代中期後半の遺構と考えられる。

#### ◎ 土坑 110 (挿図98)

C1w 15に位置し、48号住居址を切る。径1.2mの不整円形を呈する。底部はほぼ平坦で深さ40cmを測る。西側よりの底部は48号住居址の柱穴が残っている。壁面はゆるやかに立ち上がっており断面は逆台形である。

覆土からは条線紋を施した土器片・打製石斧剥片が出土しているが時期は不明である。

出土遺物には、縄文時代中期土器片・打製石斧片・敲打器があり、縄文時代中期後半の遺構である可能性が強いが断定はできない。

#### ◎ 土坑 111 (挿図65)

C1h 25に位置するが、北東側は未調査区にかかり全体形は不明である。調査部分で1.6×1.1mの半円形を呈する。底部は北東方向へやや傾斜し、最深部で40cmを測る。壁面はゆるやかに立ち上がっている。

覆土からは、紋様不明の土器片と横刃型石器・凹石が出土したが、時代決定には至らなかった。出土遺物には、縄文時代土器片・横刃型石器・凹石があるが、時期等の決定はできない。

(吉川 豊)

## (7) 溝 址

### ① 溝址 1 (插図53・54)

調査区北東側境に平行に検出した。1・2・3号住居址を切っているが、上部と下部は削平され検出できなかった。長さは約20m確認したが、この台地を縦断していたものと推測される。巾は上部で50cmあり、断面形はほぼU字形をなし、所々に水流による凹みがあった。

遺物は、切っている古墳時代住居址と同じ土師器がほとんどで、縄文時代の遺物も少量混入していた。斜面をほぼ直線に西下しており、用水路的な入為的な施設と推測される。

時期は切り合い関係から古墳時代後期より新しいことを把握したが確定できない。

(佐々木嘉和)

## ま　　と　　め

以上、本遺跡の調査結果につき、その事実を示したわけであるが、調査前の予想をはるかに越える遺跡の内容があり、その資料の数も膨大で、十分な整理もできず、細部にわたる検討も不可能といわざるを得ない状況下にあるといえる。具体的には今後のより深い考究により、資料が史料化され、北田遺跡に残された人々の足跡が歴史の中に位置づけられることを期待し、ここでは、現時点で可能な若干の整理といいくつかの問題点等を列挙して、本調査のまとめとしたい。

### 1. 縄文時代早期

30号住居址と小塹穴1の存在は、当地方における最初の定住形態を示すものであり、今まで遺物のみが研究対象となっていた該期において、他地域で発見されている類例資料との比較検討も可能となり、当地方における類例資料の発見も当然予想されるとともに、考古学の持つ本来の目的の1つである人間の生活追求に1歩近づくことができるのではと考えられる。

また、出土土器はいわゆる押型文土器であるが、その主体は関西から東海地方に主たる分布域のある大川式系に属するもので、当地方編年では立野式土器に含まれるものといえるが、その供伴する格子目文、山形文とのあり方などから、該期文化の伝播経路や当地方に押型文土器の定着する過程等を研究する上からも好資料といえる。

### 2. 縄文時代中期

当地方において該期集落の調査例は數例あるが、それらと共に点多いことは事実であるが、また新しい事実のいくつかも見い出すことができる。

まず、本遺跡における該期当頭段階の土坑群の発見は何を意味するのであろうか。10基に近い土坑があるにもかかわらず、1軒の住居も検出されていない。検出された土坑のいずれもが舌状台地先端部に限られていること、いずれの土坑も本来は土器を伴う可能性が強いことなど一定の約束事があったのではと推測される。それにより、本遺跡に隣接するいすれかに居住する空間二住居の分布する箇所があることが予想される。また、出土土器は当地方に類別の乏しいもので、調査地方のものとの共通性が強くみられる。

次に本調査において最も多数の遺構・遺物が発見された該期後半についてであるが、その分布は調査範囲全体、つまり、舌状台地のある程度の平坦面全域にあるといえる。住居址についてみると、その形態や出土土器の様相から少なくとも3~4時期にわたる集落であったことがわかる。土器による検討は不十分であるが、遺構の形態によると、以下のように3段階に大別可能といえる。

第1段階として比較的浅い掘り込みの竪穴で、円形の平面形を呈し、炉の掘り込みも浅く碟を円形に床面上に並べた程度というものである。

第2段階は、検出された住居址数は最も多く、詳細の検討によりさらに時期区分される可能性もあるが、次のような共通点がある。平面形は隅円方形を基本とし、四隅に4本の主柱穴を有し、炉の形態もしっかりとした方形に大きな石を組み、かなり深く掘り込まれている。更にほとんど例外なしに入口部とみられる位置に埋甕を置いている。

第3段階は、前段階でしっかりと造られていた竪穴も若干不整形となり、炉の規模も若干小型化し、埋甕を持たなくなる。

以上のように少なくとも3段階の小期に分割が可能といえるが、縄文時代中期でいえばいずれも後半段階にあたり、同時に存在する住居数としては10軒前後で連続して集落が営まれたと考えられる。

次に竪穴住居址と土坑との位置についてみると、住居址は台地上のほぼ全体に分布するが、土坑は比較的東側の地形的に高位の側に集中する傾向がある。台地上の土地利用のあり方を検討する必要があるのかもしれない。

### 3. 弥生時代後期

弥生時代後期の遺構としては5軒の竪穴住居址が検出されたのみであるが、調査前にはその存在がまったく予想されなかつたもので、当上久堅地区における唯一の弥生時代の遺跡ということとなり地域史の中で大きな意味を持つものといえる。

住居址の調査範囲内での分布状況は、舌状台地全体に散在しているが、1つの集落のほぼ全容を知ることができたと考えられる。未確認の住居址があったとしても、1~2軒程度と推測され、標高650m程の高地における1つの単位が示されたといえる。

弥生時代といえば、当然稻作による農業経営がその生産基盤となるわけであるが、西方に位置する凹地=湿地帯を利用しての水田経営があったことは否定できないとともに、住居址の立地する台地上にも相当面積の空白地があり、家のまわりでの畑作も行なわれていたことも推測される。

当地方における山間地の同程度の標高の集落遺跡として、高森町月夜平遺跡があり、また、未調査ではあるが、弥生時代後期の遺物が出土したとされる、高標高の遺跡も何例か知られており、弥生時代終末期に何らかの要因による居住域の拡大、例えば人口の増加・農業技術等の充実による生産性の拡大等々の社会的に大きな変化のあった時代ではないかとも推測される材料を提供してくれる。

### 4. 古墳時代後期

竪穴住居址17軒は個々についてみると、当地方該期遺跡の通例のあり方に共通するが、掘立柱建物址24棟の存在、標高650mを越える地にこれだけの集落が構成された要因を推し測るとき様々な問題が提起される。

竪穴住居址と掘立柱建物址は、舌状台地上の全体に分布するが、台地中央部には掘立柱建物址が何棟か存在する他は総体的に空白部となる。特に竪穴住居址に限ると、台地縁部のみに構築された事実がみられる。住居址・建物址ともに同時に存在した数は調査した遺構すべてではなく、

2～3時にわたると考えられるが、それにしても、台地上全体の土地利用についてなんらかの規制があったことがうかがえる。

堅穴住居と掘立柱建物の相方が検出されている事実は、何を意味するのかも大きな問題である。当地方において、現在までの段階で両者の共存を具体的に示された調査例はなく、今後の古墳時代集落研究に果す意味は多大である。しかし立地等の項でも述べたとおり本遺跡の所在する場所は標高 650 m を越える山間部であり、天竜川沿いの低位段丘上の生産力と較べ劣悪な条件下にあるといわざるをえず、倉庫とも考えられる建物址の複数存在することは単純には解し得ないことがある。また一定の時間差はあるが先行する弥生時代の終末に構成された小集落の生産基盤と大差ない条件下で単なる農業生産のみが、古墳時代後期後半の統制のとれた集落を成し得るとも考え難い。そうした中で具体的に本集落の成因もしくは、かように発達した要因を求めるのは極めて困難ではあるが、あえて考究するとすれば、15号住居址とした鐵治工房の存在である。7世紀代における当方において、一定の範囲内に集落で 1 軒の堅穴が完全に工房として位置づけられた例はなく、本集落そのものが、その鐵治工房により規定されていた可能性もわずかながら見い出せるのではと考えられる。なお、発掘調査終了後当地を訪れた葉賀七三男の周辺調査及び本址出土スケールの検討により、かなり良質の鉄生産のなされた可能性も指摘されている。

次に本遺跡の古墳時代集落については、隣接する塚穴古墳との関連を考える必要がある。古墳の位置から見ると、丘陵をはさんで背中合わせの位置にあり、直接の関連は考えられたことは無かったが、直線距離にすれば 100 m 足らずの位置にあり、古墳前面はその直下に玉川の川筋があり、むしろ直接相対してはいないが、地形的に連続する本遺跡とのつながりが強いともいえる。古墳周辺における他の集落が不明な現段階において、本遺跡と塚穴 1・2 号古墳が直接的な関連があったとするのがより妥当といえる。

## 5. 中 世

北田遺跡において、確実な時代を把握できた時代は、前述の古墳時代後期まであるが、調査範囲内西端部に検出された掘立柱建物址 5 は他の建物とは、柱の掘り方も全体の規模・構造ともに異なり中世に位置づけられる可能性が強い。

中世における当地は、神之峯城址の存在が示すように、知久氏を中心にかなりの発達した様相を示しており、知久 18ヶ寺の 1 つが置かれた觀音丘陵に接し、城そのものを一望する位置にある本遺跡も当然何らかの関連があったと推測される。こうした中で、建物址 5 が位置づけられると考えられる。

また、調査着手前に地形的に不自然な浸喰谷とみられた、北東部にある掘り込みは、試掘調査の結果で人為的な掘り切りとしてとらえられた。知久氏がこの上久堅の地に移った初期には掘切川をはさんだ柏原地区に施設を構えたとされ、本遺跡もその城館に関連した可能性が強く、その関連で掘削された掘り切りと考えられるが、それに対応する南側の掘り切りは掘削された痕跡はなく、工事途中で放棄され神之峯城が整備されたと推測される。

結局、掘立柱建物址 5 と掘削途中の掘り切りは、知久氏が上久堅の地に移った直後の短期間に位置づくといえる。

以上、現段階における北田遺跡の発掘調査結果に基づく若干の整理と、提起される問題点のいくつかについて列記したが、総体的に北田遺跡をみれば、縄文時代早期から古墳時代に至る 7000 年を越える間、途中とぎれる時期はあるが、標高 650 m を越える山間の当地域の拠点的な集落として位置づけられる。

本遺跡にみられるような、山間地における好立地条件の遺跡は、隣接した箇所へ単期間の本拠地の移動はあったとしても、比較的長期間にわたる継続的な集落が営まれる可能性の強いことを示している。

また、北田遺跡の持つ意義について、本書においてそのごく一部を整理できたのみであり、今後具体的かつ詳細に資料の検討を行ない歴史史料として活用される段階に至ってはじめて北田遺跡の真の姿が示されるものと考えられる。

最後に、現地での調査中から、本遺跡の文化財としての意義を深く理解され、物心両面からご協力をいただき、その結果として遺跡内の一画に 2 軒の復元家屋を造り、後世に伝えるとともに神之峯城址・塚穴古墳等と合わせ、地域に残された文化財が様々な形でより一層保護・活用されることを期待いたします。

(小林正春)

## 付 編

### 15号住居址出土スケールの金属学的分析調査結果

日本産業技術史当会理事

葉 賀 七 三 男

#### はじめに (図版 1・2)

昭和62年8月23日付けで岡田正彦先生から、15号住居址出土の試料が届き、分析調査方の依頼があった。同年5月9~10日信州製鉄史シンポジウムが、诹訪郡富士見町井戸尻歴史民俗資料館で開催された折、たまたま同席した先生に、工房と考えられる遺構については、その床面の土を精査する必要がある旨、お話ししておいた経緯もあって、早速北田追跡15号住居址の本来のカマド以外に火床（ほど）をもち、工房と推測される床面からの土を20グラム試料として送付された。

試料に磁石を近づけると、写真1のごとく一部が磁着し、鉄分の存在が明らかとなった。そこで、試料を皿に入れ、水を注いでゆり分けたところ写真2に示すごとく扁平、粉末状のスケール（金肌）様のものが2グラムえり分けることができた。手許にあった現代のスケール、昭和54年に兵庫県養父郡明延（あけのべ）鉱山調査の際、同鉱山付属鍛造工場の床面に散っていた試料と北田出土のものとを比較したのが写真3である。また、乾燥したスケールを紙に乗せ、裏に磁石を当てると写真4のごとく美しく磁化され、一部きわめて微細な粒は、砂鉄ではないかと疑われた。

詳細な金属学的、鉱物学的分析調査を、特に東北大学選鉱製錬研究所岡田広吉先生にお願いして実施したので、その結果を中心に記載することとする。

#### ×線による分析結果 (挿図100・101)

蛍光X線分析によって、スケールに含有する主要元素を確認した結果、挿図100のとおりほとんどが鉄であり、それに極く微量のマンガンを含むことが明らかとなった。これによって、この鉄関係スケールにはチタンが全く含まれていないことが把握できた。

X線回折によればスケールを構成する鉱物名が明らかとなるが、北田出土試料は挿図101の回析結果のとおり、m（マグネタイト、磁鉄鉱）、H（ヘマタイト、赤鉄鉱）、Q（クオルツ、石英）とW（ウスタイト、酸化第一鉄）から組成されていることが判明した。ウスタイトの位置が

写真1 試料磁着状況



写真2 試料水上げ結果  
▼ (右) スケール



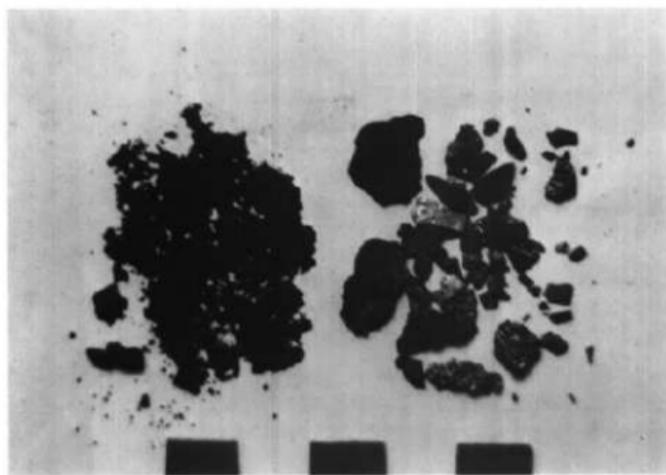


写真3 スケール比較  
(左) 北田遺跡  
(右) 明延鉱山鋳造場



写真4 北田遺跡スケール  
磁化状態

わずかずれているが、特にウスタイトそのものの存在は、試料が天然の鉱物ではなく、人工物である可能性が強いことを示している。また、マグネタイトの多量である点は、試料が磁性を強く示すとの深い関係があることが承知される。

X線回折では特にリモナイト（褐鉄鉱）が検出されていないが、後述するごとく顕微鏡写真では、かなりの量が存在している。

#### 顕微鏡による調査結果 (図版3・4・5)

実態（双眼）顕微鏡による調査では、薄板状から薄葉状の雲母状鉱物が多く、しばしば鉛灰色で金属光沢をもつものが多い。しかし、破碎した鉄鉱石様のものや、砂鉄粒らしい外観のものは見当らなかった。

実態（双眼）顕微鏡の調査は、写真5～6のごとき結果で、スケールも現代のものに比べてかなり細かいことがうかがえよう。

反射顕微鏡によって、樹脂に埋めた試料を研磨しその断面を倍率をあげて調査した結果は、写真7～10である。全体からみると、細長い板状鉱物が多く、その主体はマグネタイトであり、その周辺部分が酸化してヘマタイト化しており、一部にはソモタイト化（褐鉄鉱化、水酸化鉄化）しているものもある。砂鉄の粒は見当らず、また金属鉄は全く存在していないことも把握できた。

写真7は層状をなした特徴がうかがえるが、ほとんどが酸化の度合が進んだ褐鉄鉱である。

写真8は細長い葉片状のものの断面であるが、これはマグネタイト（磁鉄鉱）が大部分であり、わずかしか酸化していない。

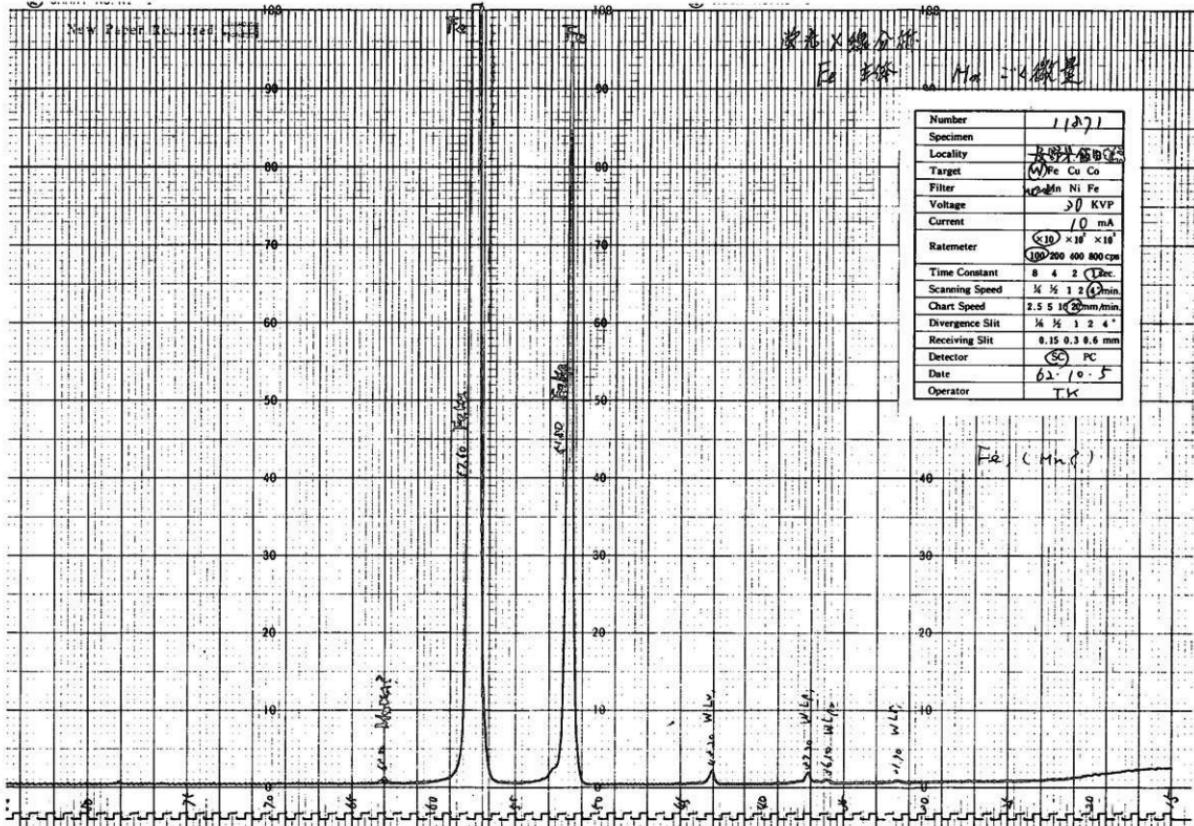
写真9はやや大きいスケールの部分であるが、芯になっている灰色部分がマグネタイトで、外側をとり巻く白い部分が酸化したヘマタイト（赤鉄鉱）である。

写真10は、一段と酸化の進んだ段階のスケールで、黒い大きな丸は空隙であり、核となっている白い部分がマグネタイトで、その周囲がやや灰色がかった部分がヘマタイト、その外側にリング状に褐鉄鉱化が進んだ状態がうかがえて、特異な構造を示している。

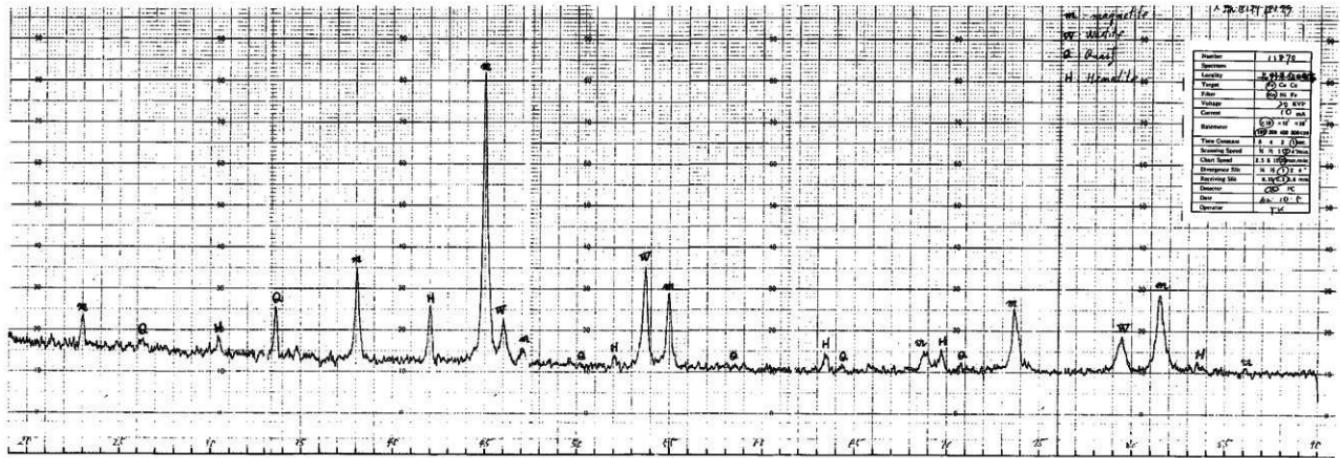
以上代表的な構造を示したが、これらスケールは、かなりの酸化つまり鏽化が進んでおり、小片化している点からも、時代の古さを証しているものと考えられる。

#### むすび

分析調査結果によって、15号住居址は鍛冶工房址であることが明らかとなった。床面の土に重量で1割スケールを含む事実は、かなり鍛冶作業が実施された結果であることを証明している。また、スケールそのものが酸化が進み褐鉄鉱化している点は、スケールの発生した時期が古い時代に属するものと考えられる。



挿図100 スケール螢光X線分析結果



挿図101 スケールX線回析結果

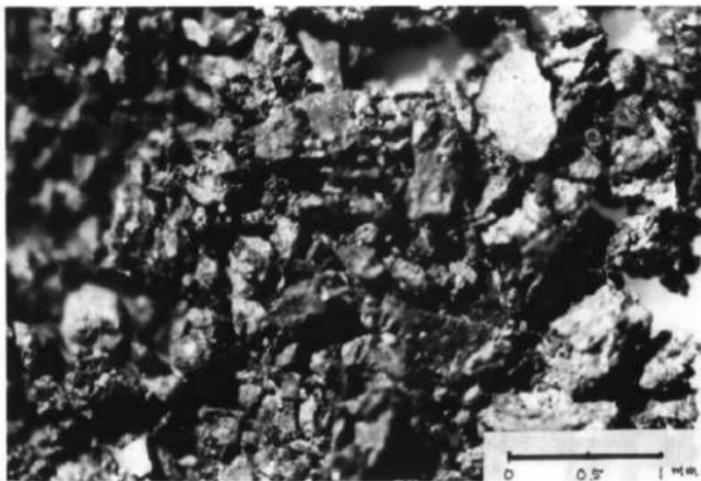


写真5 スケール実態（双眼）顕微鏡写真(1)

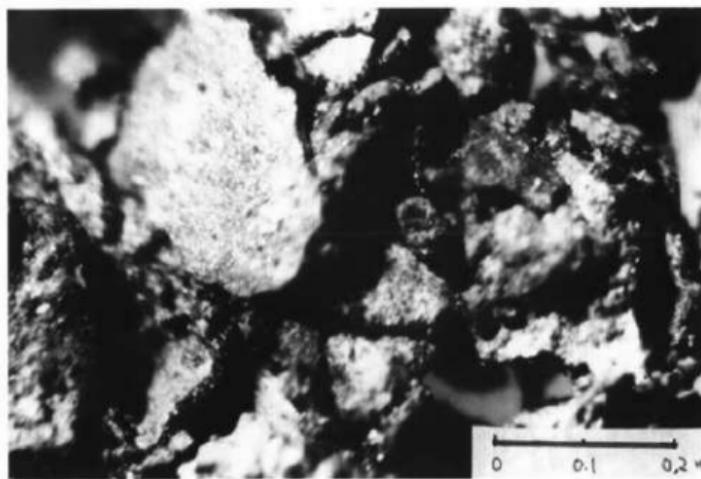


写真6 スケール実態（双眼）顕微鏡写真(2)

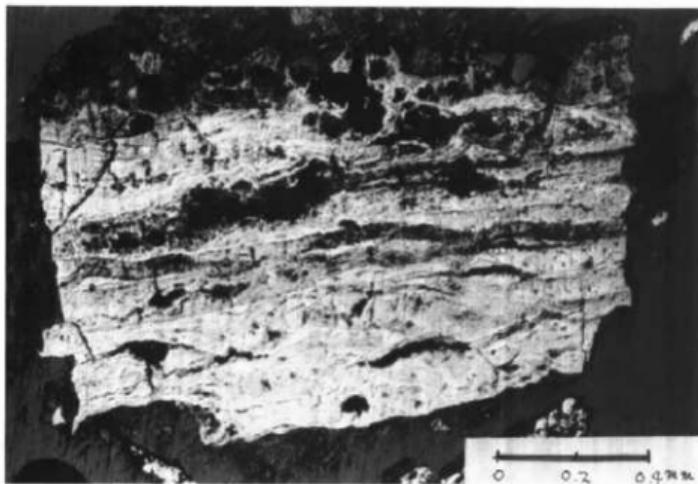


写真7 スケール反射顕微鏡写真

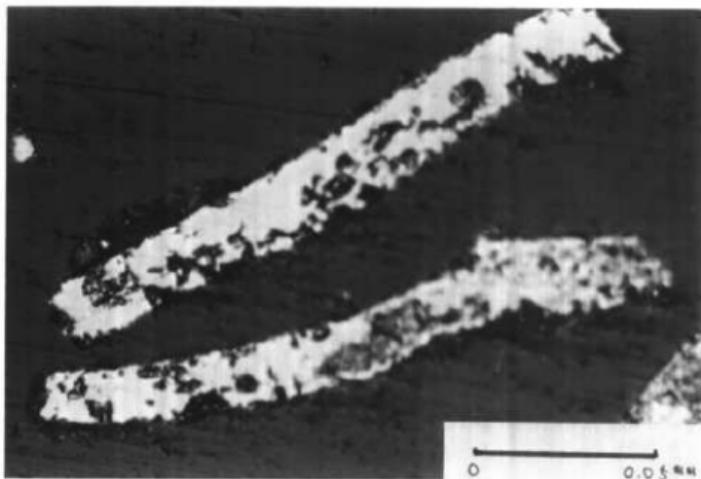


写真8 スケール反射顕微鏡写真

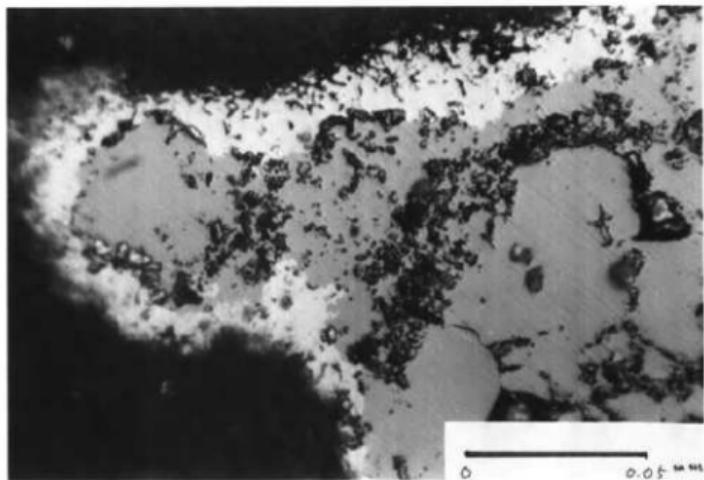


写真9 スケール反射顕微鏡写真

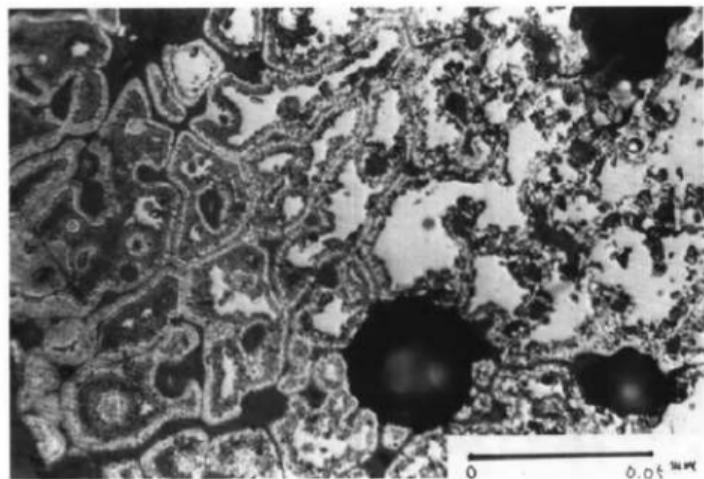


写真10 スケール反射顕微鏡写真

蛍光X線分析によれば、スケールにチタン分を全く含まない事実は、鍛冶作業に材料として使用された鉄は、砂鉄を原料として生産されたものではなく、鉄鉱石から製鍊された鉄材であったと推測される。

従来の考古学発掘調査では、工房の床面からのスケールについては、ほとんど考察の対象となっていないが、ここ数年来福島県相馬地方の大規模模製鉄遺跡群に關係して、特にスケールの残存に焦点をおいた調査が実施され、三貫地遺跡（原口地区）に関する「国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅲ」（福島県教育委員会、福島県文化財調査報告書第179集、1987年3月刊）のごとく鍛造剝片（スケール）として詳細な化学分析、E P M Aによる調査も行われて、基礎となるデータの蓄積が始められたが、本調査結果も、今後工房址から出土するスケールを検討する際、重要なまた貴重な手掛りを与えるものと考えられる。

試料について特別な配慮を賜わった岡田正彦先生、分析調査の実施に尽力された東北大学還鉄製鍊研究所岡田広吉先生はじめ同所分析スタッフの各位に深甚なる謝意を捧げる次第である。

# 写 真 図 版

図版 1



北田遺跡遠景(神之峯城跡から)



北田遺跡近景(西方から)

図版 2



調査後の近景(西から)



調査地全景(西から)

图版 3

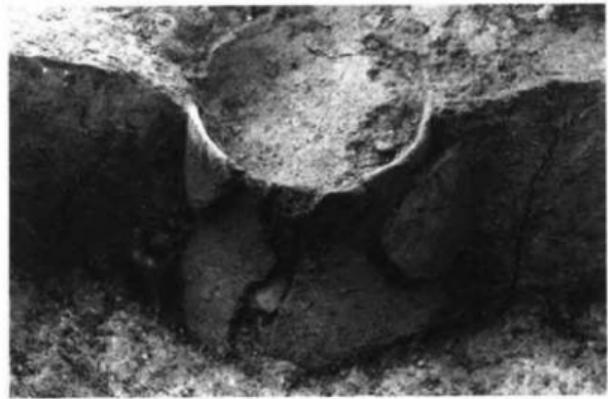
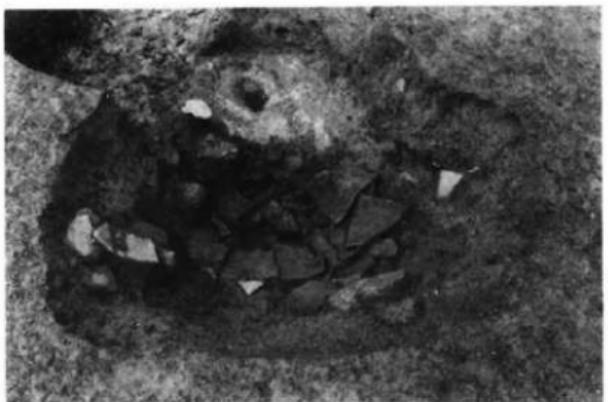


30号住居址



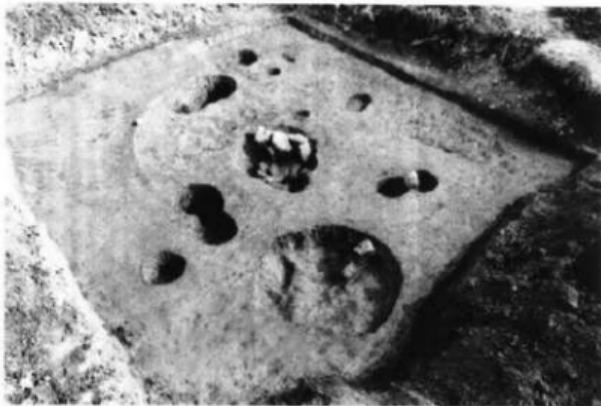
8号住居址

図版 4



図版 5

19  
20号住居址



19号住居址炉



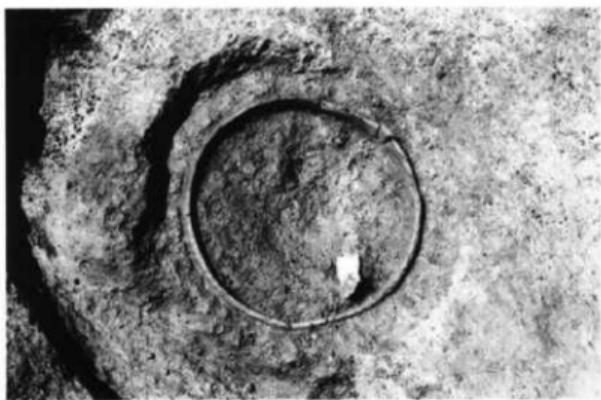
20号住居址炉



図版 6



21  
号住居址



同  
埋ガメ



同上断面

図版 7

21号住居址土器出土状態



同上乳棒状磨石斧出土状態

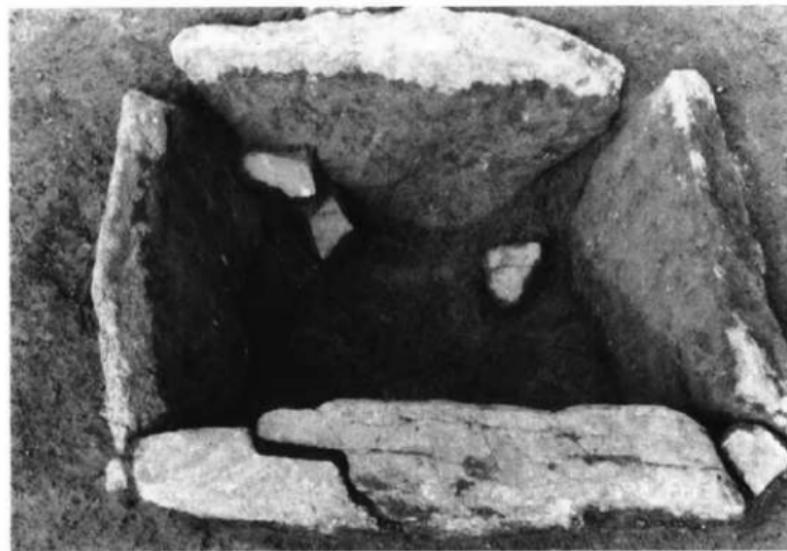


同上土偶出土状態





22号住居址



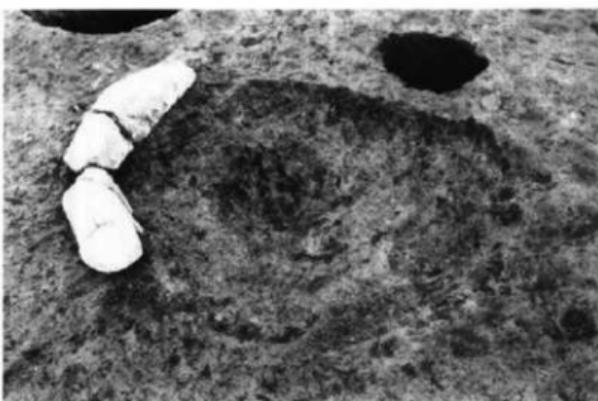
同上炉

圖版 9

23  
號  
住  
居  
址



同上  
爐



吊手土器  
出土  
狀態



図版 10



図版 11

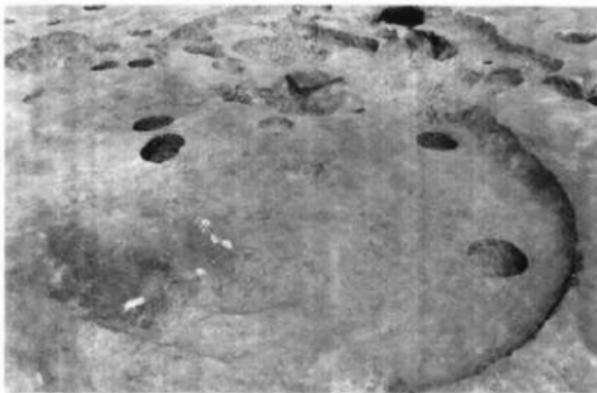
24号住居址炉内土器出土状態



25号住居址



26号住居址



図版 12



28号住居址



同上炉



同上埋ガメ

図版 13

29号住居址炉



31号住居址埋ガメ



同上断面



図版 14



32号住居址



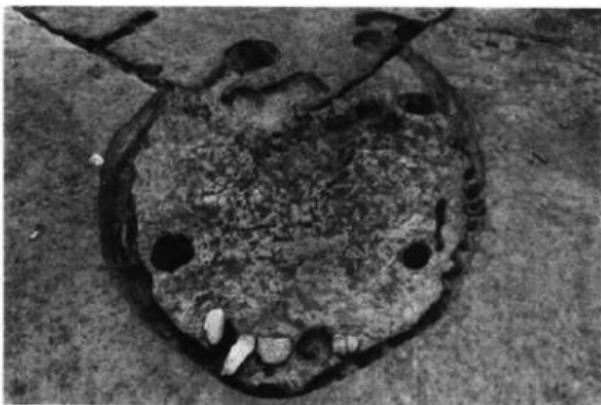
33号住居址



同上炉

図版 15

34号住居址



同上埋ガメ



同上断面



図版 16



35号住居址



同上炉



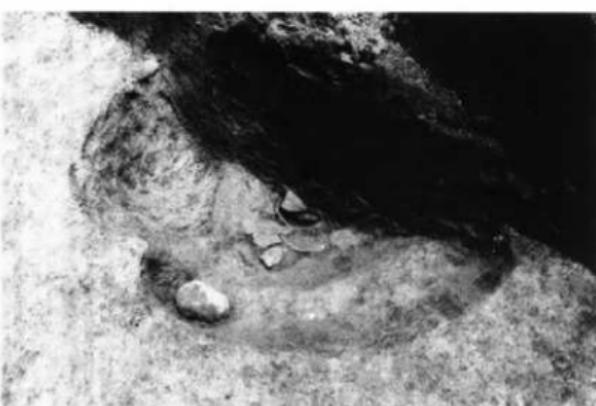
同上石器出土状態

図版 17

38号住居址



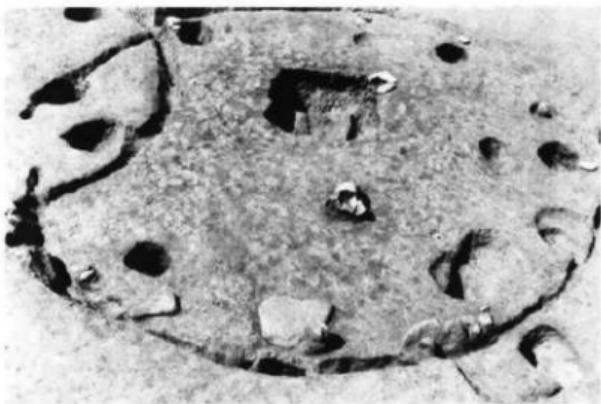
同上炉



同上埋ガメ



図版 18



39号住居址



同上炉



同上副炉

図版 19

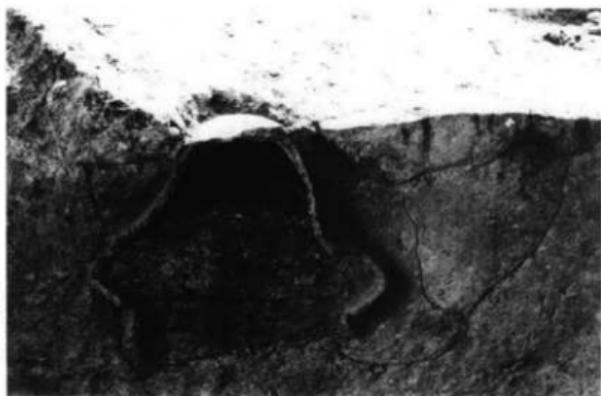
39号住居址埋ガメ



同上伏ガメ



同上断面



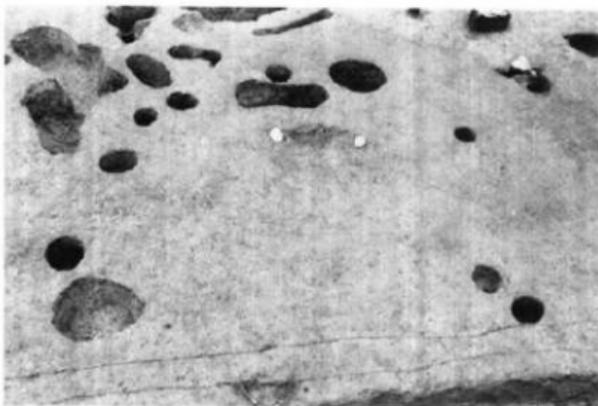
図版 20



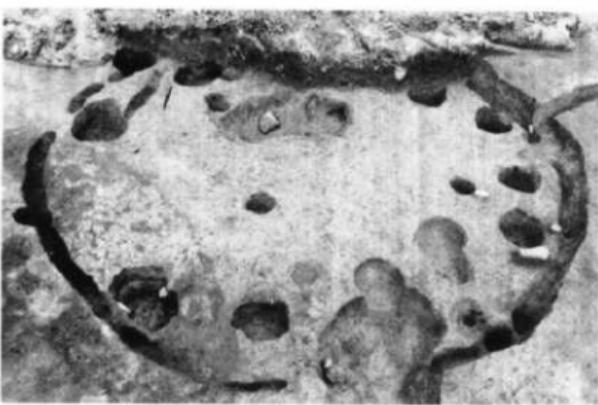
38号住居址出土土器出土状態

図版 21

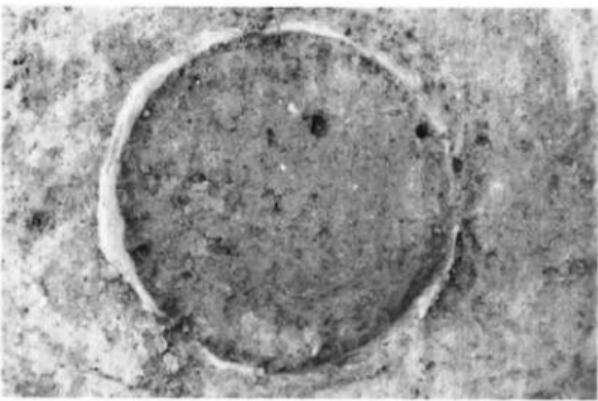
40号住居址



41号住居址



同上埋力メ



圖版 22



43号住居址



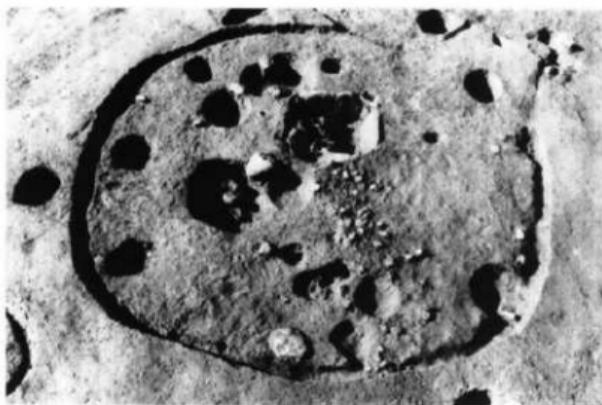
同上



同上埋方メ

図版 23

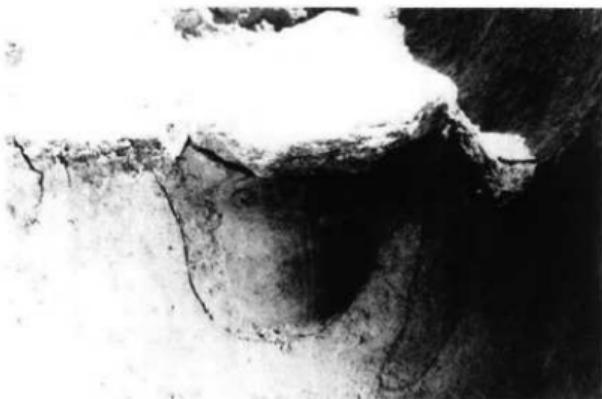
44号住居址



同上 炉



同上 埋ガメ



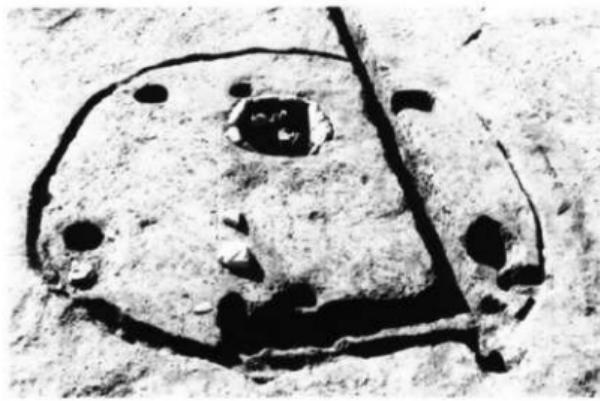
図版 24



45号住居址



同上 炉

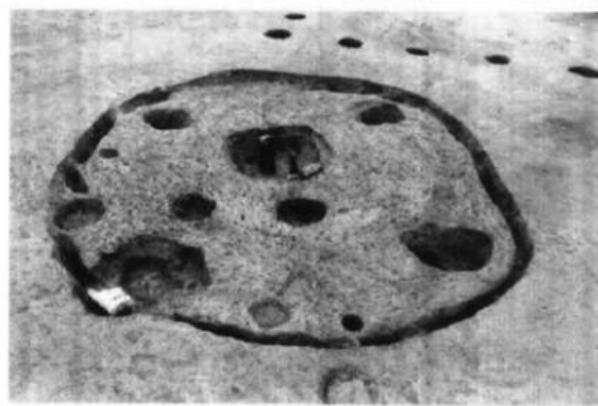


47号住居址

図版 25



47号住居址炉



48号住居址



同上埋ガメ

図版 26

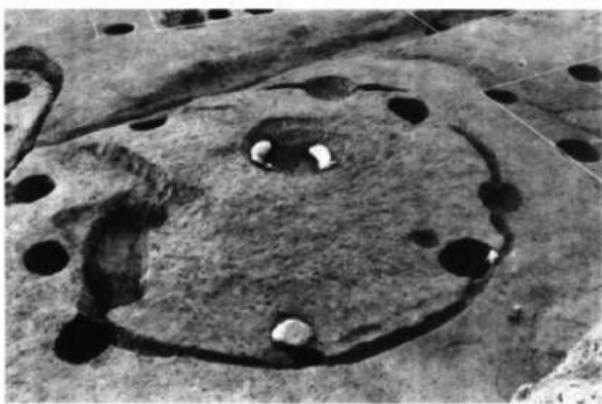


図版 27

50  
・  
57号住居址



51号住居址



同上  
炉



図版 28

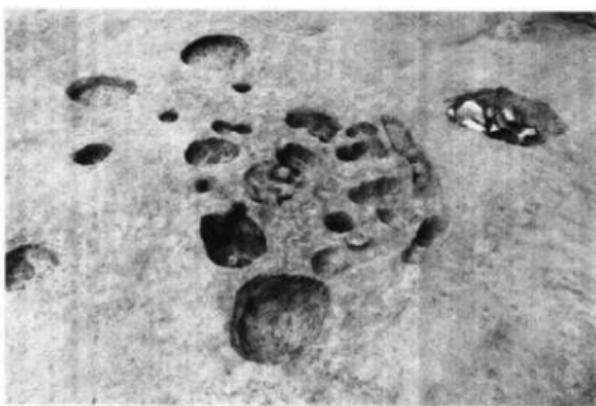


図版 29

54号住居址埋ガメ



55号住居址



56号住居址





58号住居址



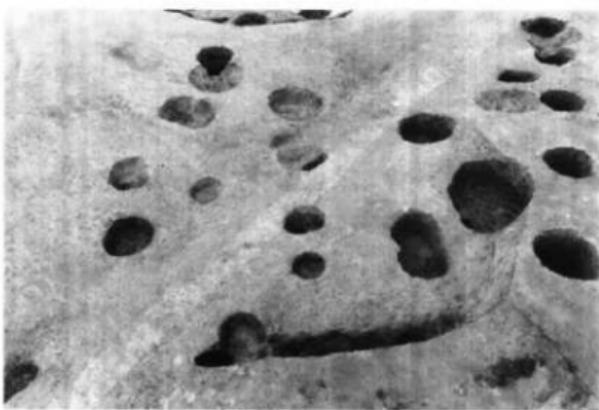
同上埋ガメ



同上断面

図版 31

59号住居址



60号住居址



同上炉



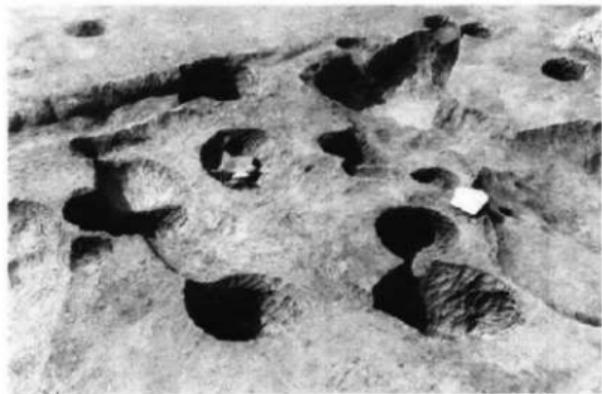
図版 32



61号住居址



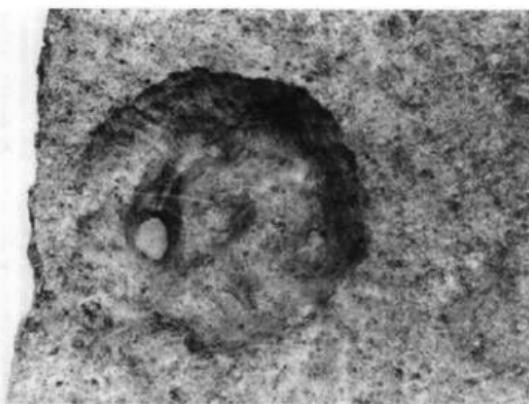
同上炉



63号住居址

図版 33

土坑  
14



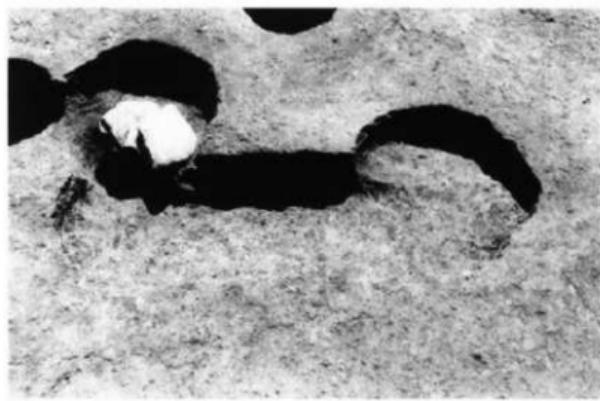
同上土器出土状態



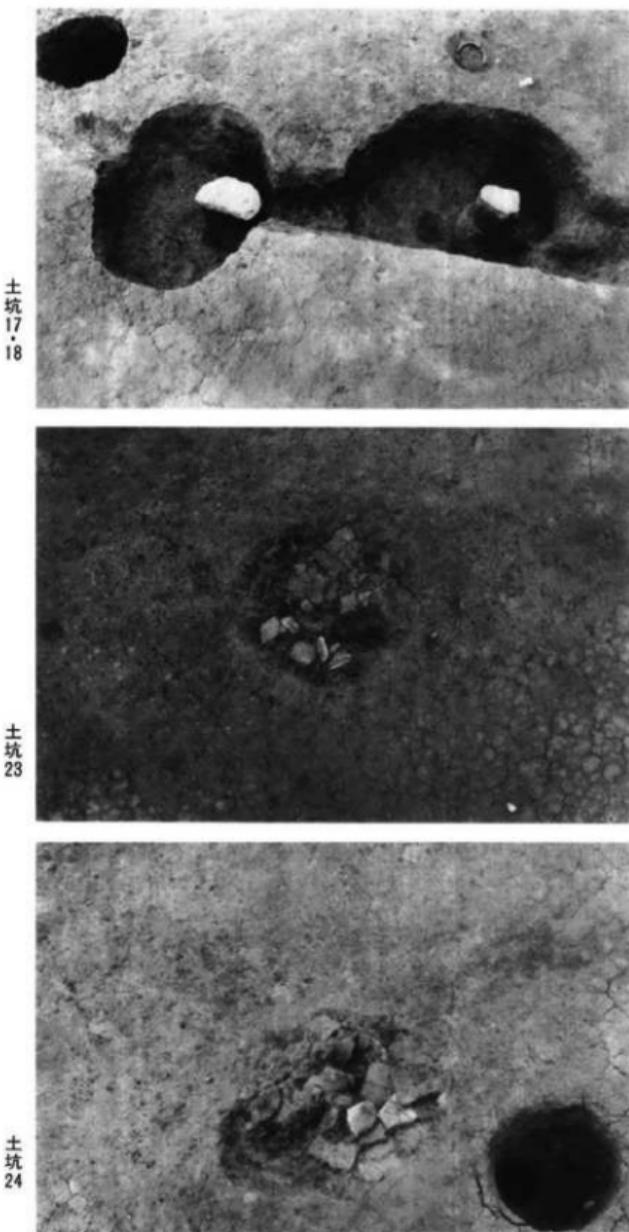
同上土偶出土状態



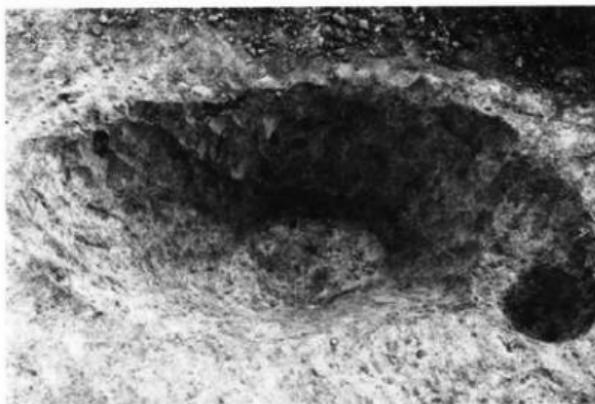
図版 34



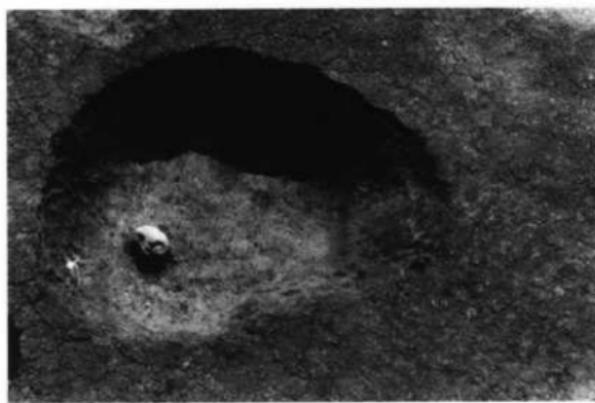
図版 35



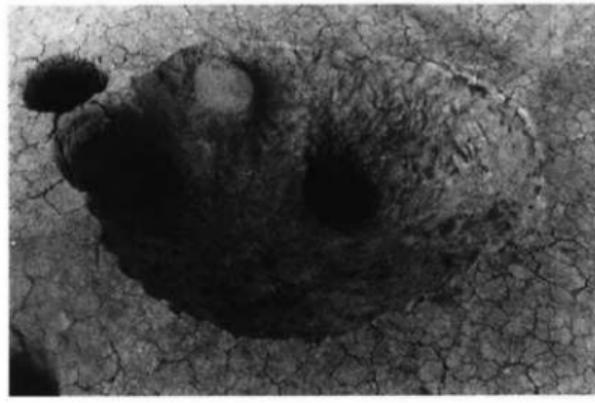
図版 36



土坑  
25



土坑  
26



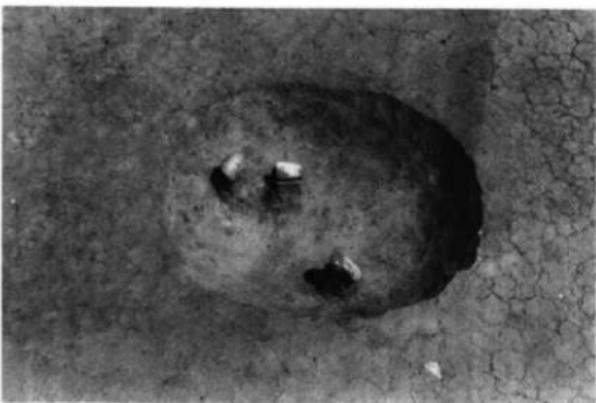
土坑  
30

図版 37

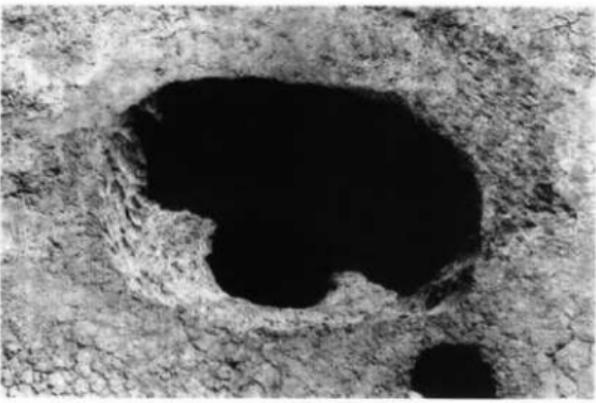
土坑  
31



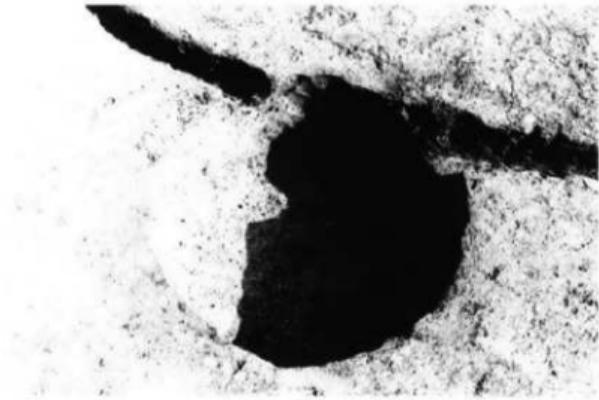
土坑  
34



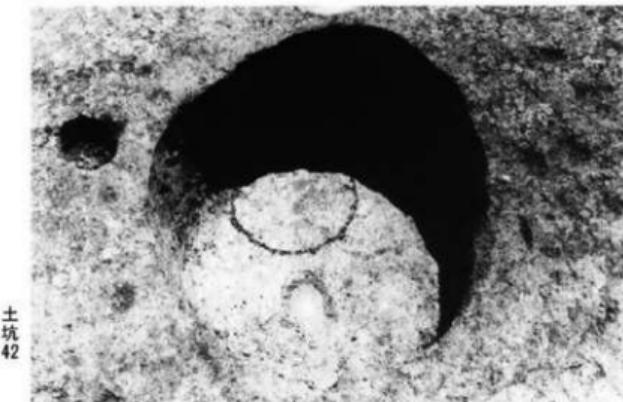
土坑  
36



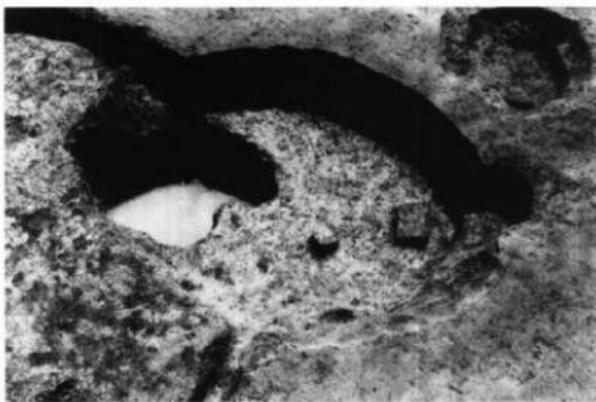
図版 38



図版 39



土坑  
42

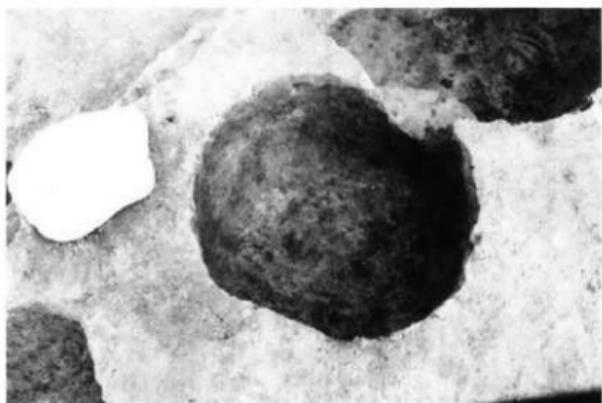


土坑  
44

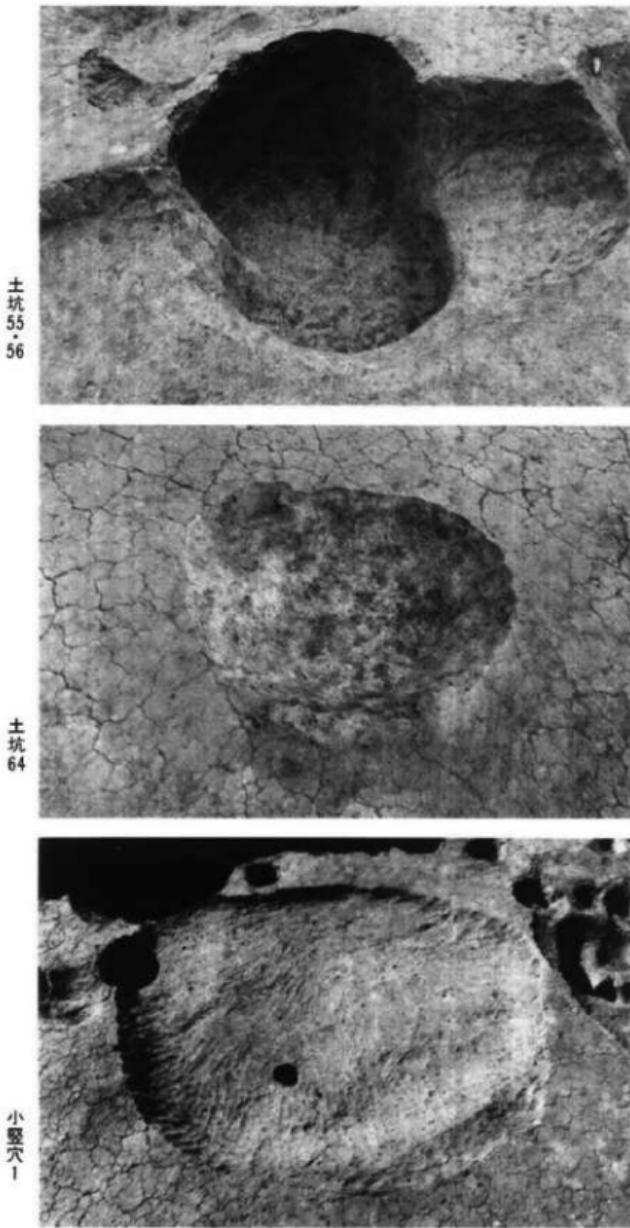


土坑  
46

図版 40



図版41





方形柱列址 1 (西から)

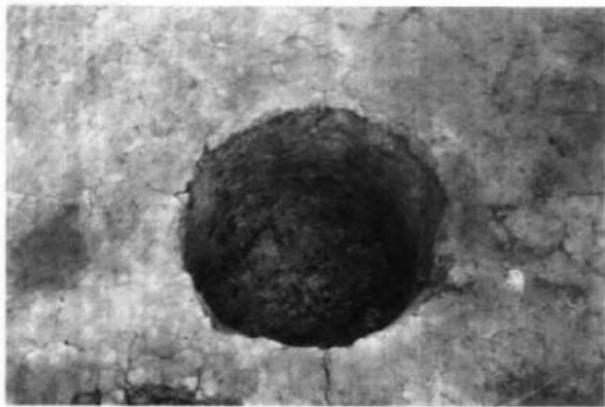


同上 (北から)

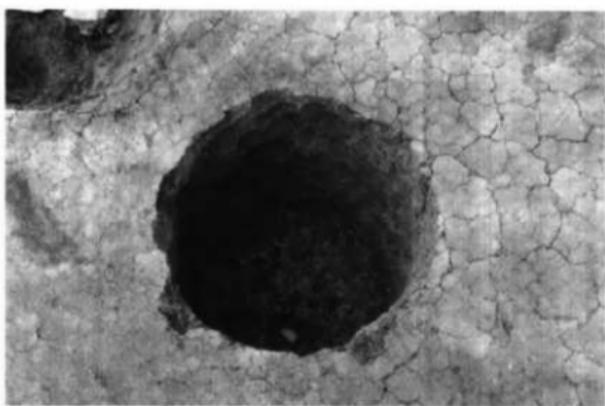
図版 43

方形柱列址 1

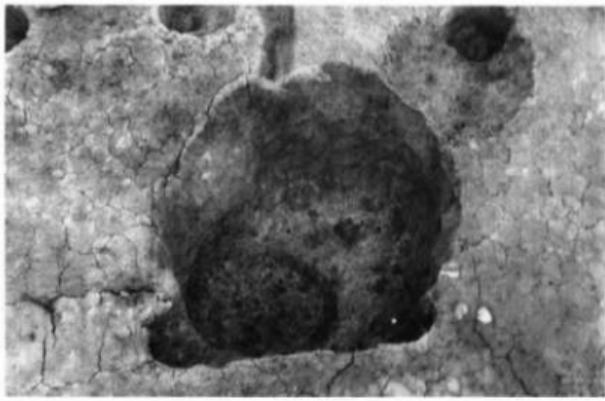
(土坑 58)



(土坑 60)



(土坑 63)





方形柱列址 2 (西から)

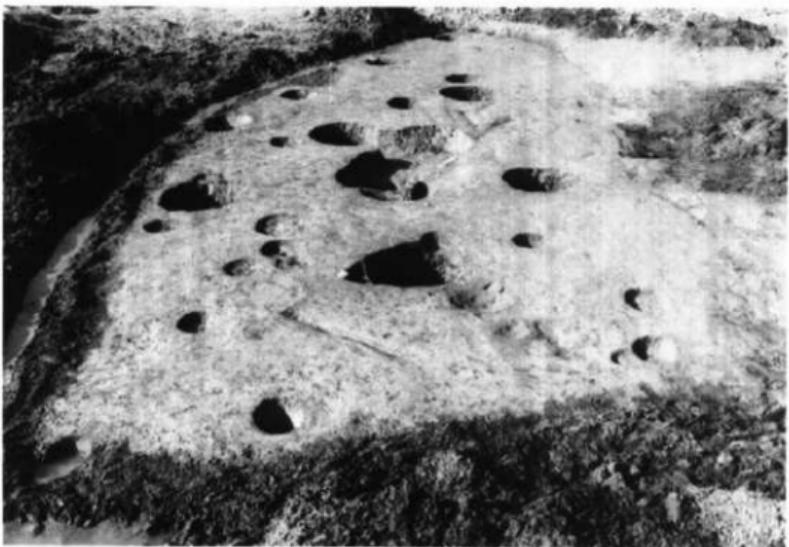


同上 (北から)

図版 45



方形柱列址 3 (北から)



同上 (南から)

図版 46

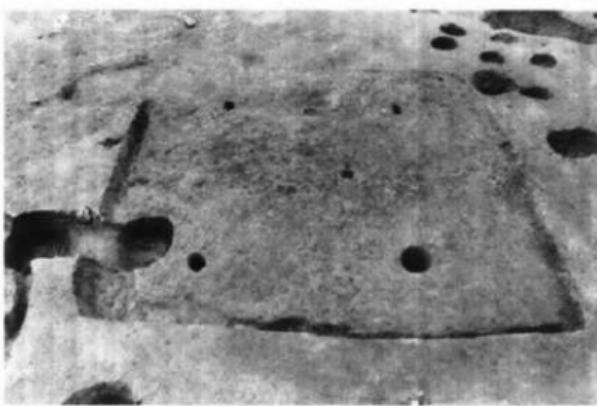


図版 47

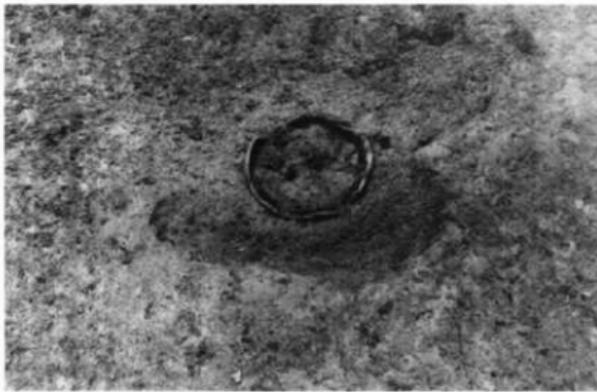
6号住居址入口部



9号住居址



同上  
炉



図版 48



18号住居址



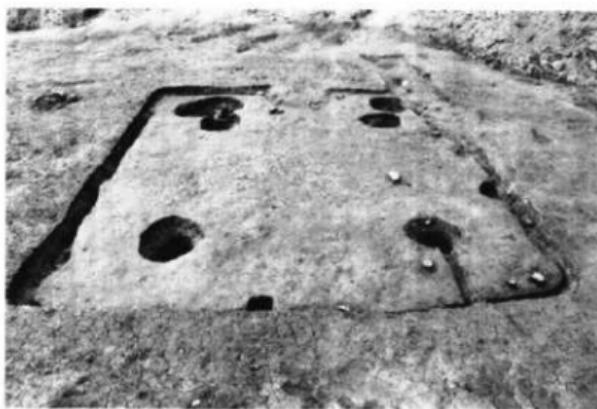
同上 炉



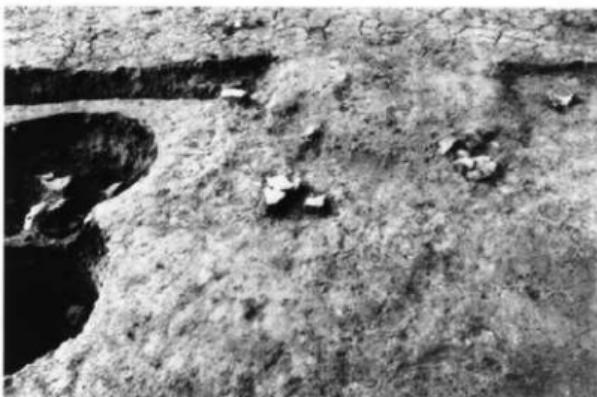
同上 离环出土状态

図版 49

1号住居址



同上カマド



2号住居址



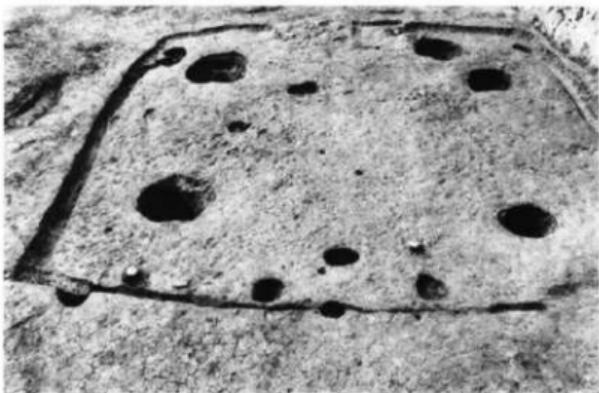
图版 50



3号住居址



同上 土器出土状態



4号住居址

図版 51

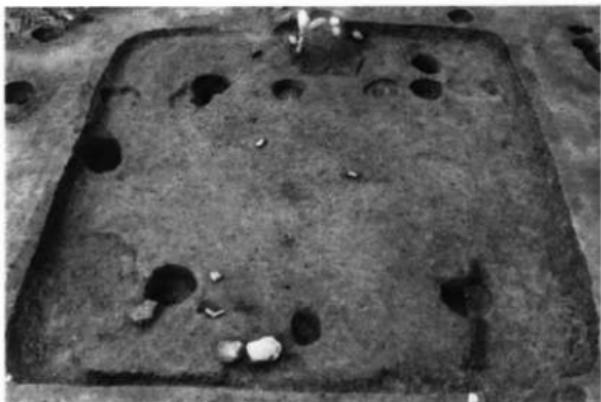


5号住居址



7・14号住居址

図版 52



12号住居址



同上カマ下



同上断面

図版 53

15号住居址



同上短刀出土状態



70号住居址



图版 54



71  
72号住居址



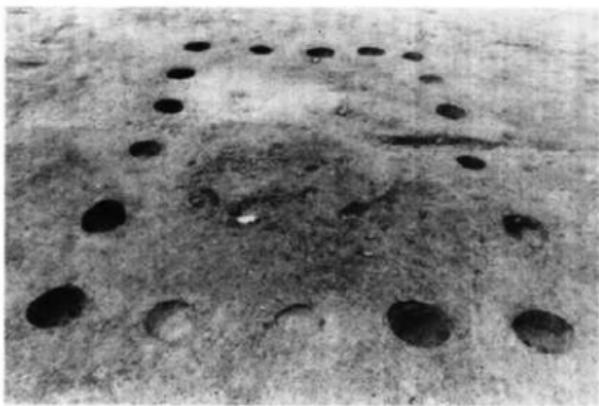
73号住居址



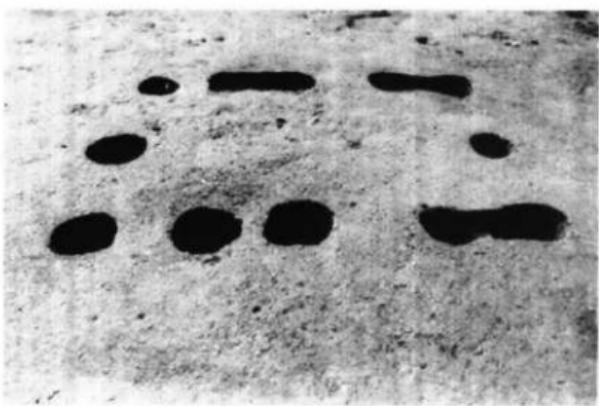
同上土器出土状态

図版 55

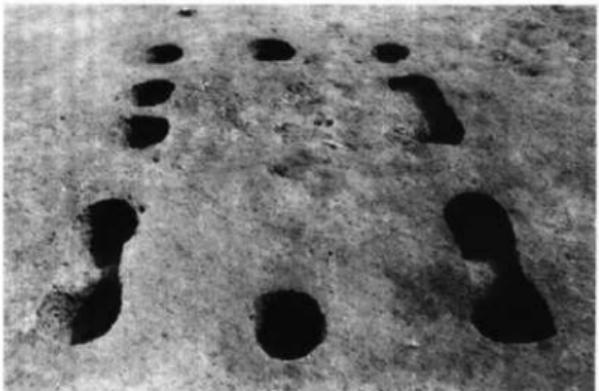
掘立柱建物址 1



同上  
2 (東から)



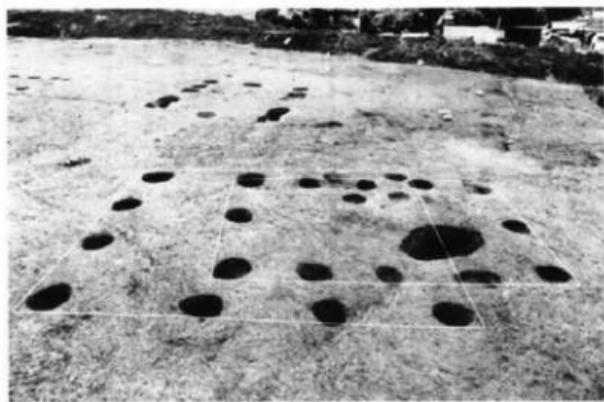
同上  
(北から)



図版 56



倒立柱建物址 3・4 (東から)



同上 (北から)



同5・6 (北から)